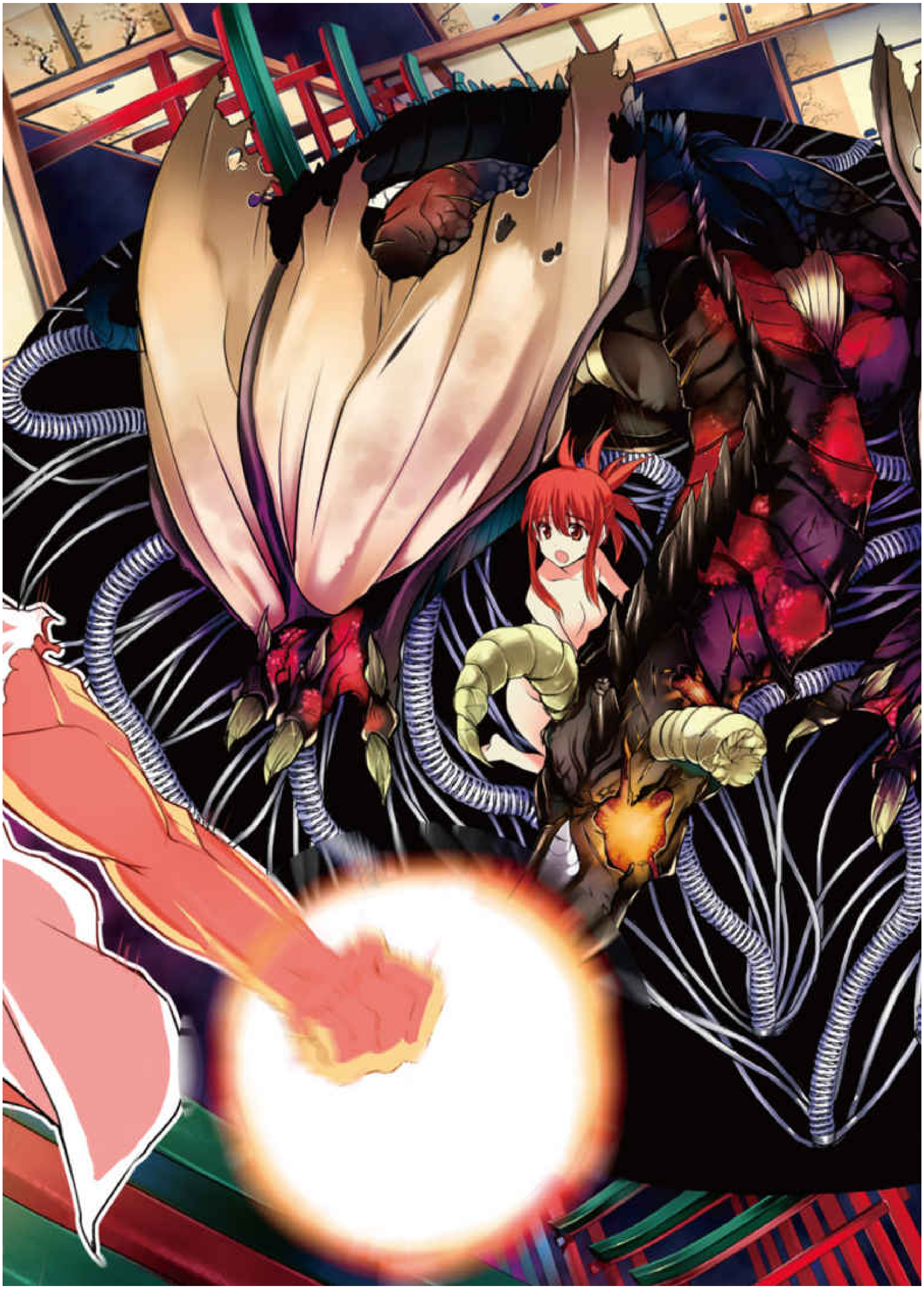

いちばんうしろの大魔王
ACT5
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばん・うしろの大魔王
ACT5




「ふん……それもいいか」
阿九斗がつぶやくと、それが合図だっ
たかのように、無数の巫女たちが一斉
にピーターハウゼンに襲いかかった。


「どうしてこんなことになったの？」
けーなは聞いた。
「それは難しい問いよ。本当に難しいわ」

いちばんうしろの大魔王
ACT 5

水 城 正 太 郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
さいあくと
紗伊阿九斗
将来「魔王」になると予言された「善良な」主人公。膨大な魔力を有するが融通が利かない。
そが
曽我けーな
落ちこぼれな天然少女。阿九斗に懐いている。物語の鍵を握る人物？
やまとぼういちろう
大和望一郎
内閣魔術情報調査室のトップ。何故か100年前から姿が変わっていない。神に対する立場の違いから阿九斗と対立する。
えとうふじこ
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓った黒魔術師にして薬物使い。阿九斗たちの先輩で女子寮長を勤める。


服部絢子（はっとりじゅんこ）
阿九斗のことが気になる一途で純情なクラス委員長。伊賀出身の忍者娘。
リリィ白石（しらいし）
コンスタン魔術学院生徒会長。帽子がトレードマーク。阿九斗と魔王の件に関して独自路線を歩む。
学院長（がくいんちょう）
コンスタン魔術学院の学院長。謎多き老人。魔王が起こした前大戦の経験者。
三輪寛（みわひろし）
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。伝説の勇者という顔も持つ。
ピーターハウゼン
前代の魔王に仕えた全長15メートルの黒竜。阿九斗を主と認め、その騎竜となる。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。ポシェットから秘密な道具を取り出し使用する。

大和望一郎はすでに彼自身の体感時間で数百年を生きてきていた。あらゆる時代に出没したが、そのいずれの時代においても失望を味わってきていた。

失望は彼を強くしたが、一方で頑迷にもしていた。彼の心の根底にある、とある矛盾を彼自身が解決できなかったことがその原因になっていた。それは何年も、それこそ何百年経っても解決できないことだったのだ。

かつて——だが阿九斗たちの時代よりははるか未来——望一郎は大学の研究室におり、そこで情報総合学を学んでいた。彼がまだ時間旅行者となる前、つまり彼の人生における最初の時代のことだ。

「特定の人種が知能が劣るとして、これを優等人種が導くことは正しいわよね」

そう言ったのは、望一郎の指導教官である須藤理夢だった。

「まさか！」

望一郎は反射的に嫌悪感を表に出した。人種差別など過去の忌むべき慣習だった。例えば、長らく人々を苦しめた奴隷制度の根底には、文明化されている人種が、そうでない人種よりも優れているという理屈があったことは間違いない。嫌悪すべき考えだ。

が、その反応は予測していたという顔で、理夢は首を横に振った。ほんの少しの失望がその眼にはあった。望一郎はその表情に気づいて肩をすくめた。

「それは何かの意地悪なんですか？」

理夢は研究室では恋人としてではなく指導教官として振る舞う。そのことをより強く望一郎に意識させるために、理夢は意地の悪い質問をすることがたまにあった。

「いいえ。それほどの意地悪じゃないけれど」

理夢はそう言いながらあからさまなため息をついた。彼女は情報総合学の天才であり、外見にも非の打ち所がなかった。ただ知性、理性を信奉するあまり、感情に基づいた行動をとる者に対する軽蔑を隠そうともしないところが明確な欠点だった。

「でも、あなたもでもそういう反応をするのね。よく考えて。その言葉だけの範囲で言えば、絶対的に正しいに決まってるわ」

理夢は諭すように言った。望一郎はうなずく。

「なるほど。学問としての話なら、そうでしょう」

「でも、それが実生活のことになると、とたんに飲み込めなくなるわ。たとえば人類よりもすぐれた知性が存在するとして、誰がそれを納得できるかしら?」

「なぜ、今、そんな話を?」

望一郎は意図がわからず聞き返した。すると、思ったよりも真剣な顔で理夢は答える。

「人類が滅びるからよ」

「ふう、あなたが冗談を言う性格でないことをよく知っていることを後悔していますよ」

望一郎は出来うる限り深刻にならないように言ったが、理夢の真剣な表情を崩（くず）すことはできなかった。そこで改めて望一郎は胆（きも）を冷やした。

「滅びる？　比喩（ひゆ）として言っているのですか？　それとも……」

「具体的な意味よ」

理夢は言い切った。

望一郎が研究室を見回す。二人の会話を聞いている者は誰もいない。そういうタイミングを選んで理夢が声をかけたのは間違いなかった。

「表ではできない話というわけですか」

望一郎は息をのんだ。

ようやくわかったか、というように理夢はうなずいた。

「もちろんそうよ。こんなことを言って、正気だと思ってくれるのはあなたくらいだわ。最終戦争を起こさないと、人類は何者かに消滅（しょうめつ）させられてしまうの」

「何を馬鹿（ばか）な……」

反射的にそう言ったが、望一郎は気持ちを落ち着かせ理夢に聞き返す。

「魔王（まおう）を倒（たお）す兵器の基礎（きそ）理論を作ったのは貴女（あなた）です。そのおかげで今後、魔王が出現しようと即座（そくざ）に対処できるようになったはず。それなのに最終戦争を起こさないと人類が消滅させられる？」

「私が研究を支援（しえん）してきた神学が根本から間違っていたの。何度魔王（まおう）を倒しても、魔王が生まれてきたのはそのため」
「間違っていた？」
「そうよ。もはや神は意志を持っている。我々はそれを見誤っていたのよ。それこそ何百年も、ね」
「それでは、その神こそが人類を……？　いや、何者かってさっき……」
「そうよ。人類が作り出したシステム……機械仕掛（じか）けの神でなく、本物の神がいるかもしれないの。いにしえの神々。人類が最初に宗教を生み出したときに神とされたもの。〝古い星の神〟が」
　理夢の言葉は望一郎に言いようのない混乱を与（あた）えた。彼女の言葉の意味は「本物の神が実在する」ということだ。しかも、それが人類を滅ぼそうとしている。
　望一郎が言葉を発することができないでいると、理夢はあきらめたように笑った。
「ねぇ、やっぱりそういう反応になるでしょう？　でもね、《我々の機械仕掛けの神は我々よりも数段優れたその知性により我々にはわからない理論をもって人類を救うために人類の大半を殺そうとしている》。これが私の考えよ」
　そこまで言われれば理解できない望一郎ではない。しかし、それが正しいとすると、どのようなことになるかを予想し、導き出された結論に恐怖（きょうふ）した。
「それで最初の質問に……！」

「そうよ。理論的に正しいことが感情的な反発を招く。正しい戦争があるとか、白人種は臆病であるとか、そういうことを口にしなくなるようになって確かに人類の生活は豊かになったわ。でも、それが人類の生み出された目的と違うとしたら？」
「人間は、差別や残虐行為を行うために生まれた……そういうことですか？」
「そうかもしれない。人類を作った神が人類を滅ぼそうとしており、我々が作った機械の神がそれから人類を救い出そうとしている」
　理夢の世界観に望一郎は頭を抱えた。それが正しいかどうか判断できなかった。
「か、確証はないのでしょう？」
　望一郎は言った。理夢が狂っていてくれたほうがいくらかマシだった。しかし、理夢は冷静に首を横に振った。
「情報総合学の常として、哲学のように語るしかないけれど、ある種の動物が他の動物の殺害になんらの躊躇もないのは、彼らが水の中にある一滴の水のように周囲と同質化しているからだわ。その自然との一体化に抵抗するのは我々が知性が高いと考える生物ね。知性とはその一体化に抵抗することだと信じていると言ってもいいわ。でも、我々が生み出した神は、同質化していながら高い知性を持っているの」
「では、人類が滅びるという話は……」
「そうよ。神から直接に聞いたの。スハラ神の巫女との対話でね。誰もうまく質問できなかったから答えが導き出せなかった。それだけで何百年も秘匿されてきたことなの。魔王が生まれる理由。そして、戦争に

駆(か)られる理由」
「到底(とうてい)、信じられる話ではありません。それならば、騙(だま)されている可能性だってあります。人類を救うために、どうして人類を減らすような戦争を起こさなければならないのか……。ありえないですよ」
　望一郎の意見に、理夢はあきらめたように肩をすくめた。
「そこがあなたのセンスのないところよ。でも時間がないから自分で考えなさい。でも、〝古い星の神〟が存在する証拠(しょうこ)はあるわ。いつも使っているマナによる転送がどうして時間を越(こ)えることがないのか。私たちはマナによる技術では時間を越えられない。つまり次元に干渉(かんしょう)することはできていない。それなのに転送が成り立つのは矛盾だわ。その理由こそ〝自同律〟にあるの。自分が自分であるという考えから逃(のが)れられないということよ。それが生物としての知性の源泉。そして、それを作り出したのは〝古い星の神〟だわ」
　理夢は言い、理解できていない顔の望一郎に向かって再度失望したように首を振った。
「私のことが信じられなくてもいいわ。それなら、あなたに研究のチャンスをあげる。それが成功したら、私のこともわかるようになるかもしれないから」
　そう言うと、理夢はマナゲージを出現させて望一郎に見せた。
「これが私のマナの固有振動(しんどう)よ。これを使うと、時間を越えられるわ」
「な、そんな……」
　それに続く「馬鹿な」という言葉を望一郎は飲み込んだが、それでも理夢が狂ってしまったのではないかという疑念を感じはじめていた。時間を越える技術は、理夢自身が直前に言った通り、長年にわたって

失敗し続けてきたのだ。
「やってみればわかるわ。私自身が〝自同律〟だったからできるの」
　理夢はそう言って穏(おだ)やかに微笑(ほほえ)んだ。
　望一郎には、もはや何も返す言葉がなかった。ただ「研究してみますよ」と答えるしかなかった。
「ここで聞いたことは、公表しちゃダメよ。時間を越える技術も完成するまで秘密。定期的に成果は見に来るわ」
　そう言ってから、理夢は研究室を去り際(ぎわ)に振り返(かえ)った。
「もし私が今回のことを公表したら、私はどうなるかしらね？」
　理夢は笑顔(えがお)のままだった。どこか悲しげな。
　望一郎は表情の意味を理解した。理夢は狂っていることにされるだろう。誰も彼女の言うことを信じないだろうし、彼女がその理想を実行に移すための行動を開始したならば、収監(しゅうかん)されることは間違いない。
　理夢の笑いは絶望から来たものに望一郎には思えてきた。そして、その絶望の原因が自分の反応によるものだと思えてならなかった。理夢は彼女と同じように考えることのできる仲間を欲(ほっ)していたはずだ。そして、自分は説明を受けるまでそのように考えることができなかった。おそらくは大多数の人々と同じように。
「ま、待って……」

望一郎は引き留めようとしたが、理夢は答えを聞かずに行ってしまった。

それから後、望一郎は再び理夢の姿を見ることはなかった。定期的に成果を見に来るとは言ったが、理夢はその後、すぐに魔王を支持する行動に出たのだった。

望一郎の絶望は癒されようのないものとなった。僅かな彼女との繋がりを確かめるように研究に没頭し、結果として時空間を操る技術を開発したものの、一度自分が存在した時間に二度戻ることはできないことを知り、理夢を救う機会は永遠になくなったことを認識した。その上、開発した技術を使った瞬間こそ、人類の滅びのその瞬間なのだった。

二度と忘れることができないその光景を望一郎は目を閉じる度に脳裏に描く。

赤黒い空に不可思議な渦巻きが立ちのぼっている。渦の中に名状しがたい不吉で巨大な存在が立っているのが見える。その渦の周囲で魔王の数万の軍勢が螺旋を描いている。先頭に立つ変異した姿の魔王。そして、その隣にいるのは理夢だ。

黙示録的で壮大なその光景と、恋人からの信頼を裏切り恋人に裏切られたと感じている矮小な心象に望一郎は身を割かれるような気分になる。出来ることなら自ら命を絶ちたかった。だが、望一郎は自分が最後の人類となることを知っていた。研究の結果、〝古い星の神〟が人類を滅ぼすことだけは確信できていたからだ。

望一郎は逃げなければならなかった。人類でただ一人の時間旅行者となった今、状況を変えられるのは望一郎しかいなかった。

望一郎はそれからただ一人の時間旅行者となり、長い長い絶望を味わうことになったのである。

1　最初から大混乱

　魔城と化した『コンスタン魔術学院』を取り囲んでいる軍勢は総数で三千七百。さらには飛行空母『玄鶴』の姿もある。いかに魔獣が校舎そのものを包むほどの数がいようとも、さしたる抵抗もなく事態は収拾できるはずだ。ただし、魔王、紗伊阿九斗がいなければ。
　照屋栄子が指揮官として陣取っているテントからは校舎と校庭が見渡せる。校庭には服部絢子が指揮する伊賀忍軍六百名と、帝国軍歩兵一個連隊の千二百名、合計で千八百名を配置している。彼らが先陣を切って校舎を取り巻いている魔獣を狩り、突入のための入り口を作るという作戦だった。
　しかし、その栄子の目論見は早くも破綻していた。地下から螺旋を刻んだ鉄杭を撃ち出して穴を空け、地上に躍り出した阿九斗と黒龍ピーターハウゼンが歩兵を浮き足立たせてしまっていたからだ。
「お嬢様、指示を！」
　連隊指揮官の声が念話機から栄子に向かって飛んでくる。
「お嬢様ではない！　あたいが当主だよ！　指示？　各自、魔王を迎撃するしかないだろうさ！」
　栄子が念話機に叫び返す。が、その瞬間、背後に人の気配を感じて振り返った。
　テントで地図を前に一人指揮をとっていたはずが、いつのまにかスーツ姿の男が一人立っていた。

栄子は舌打ちする。この『破城槌(づい)作戦』開始前からテントの周囲をうろついていた内閣魔術情報調査室のエージェントだ。しかも、室長の大和望一郎(やまとぼういちろう)の直属である『ＣＩＭＯ８』の一人だ。

と、こともあろうに彼は念話機に向かってこう言った。

「魔王は見かけよりもぬるい男だよ。逃げる者は襲(おそ)わないし、積極的に人殺しはしたくないなんて甘(あま)いことを考えてるさ。距離(きょり)を取って挑発(ちょうはつ)するように戦いなさいな」

「……な！」

栄子は絶句した。念話を切って即座に振り返ると、照屋家に特有の威圧(いあつ)感のある眼光を男に向けたが、男はそれを平然と受け流した。

年齢(ねんれい)は三十代か。軽薄(けいはく)な印象の男だが、さしたる外見的特徴(とくちょう)はない。サラリーマンだと言われればそうだと信じられるほどだ。均整の取れた体格は隠しようがないが、それでもスーツ姿ではその中の筋肉量は推量できない。ＣＩＭＯ８の全員が魔術(まじゅつ)戦のエキスパートと聞くが、とてもそうとは思えない。

「そちらは勝手にやると言っていたじゃないさ！」

栄子が怒鳴(どな)ると、男はへらへらとした笑いを返してくる。

「失敬。さっき情報を集めた結果、協力できるかもと思ったわけです。魔王の性格だってこっちで集めた情報でね。それに対応した指揮をしちゃどうかってことですよ」

栄子は言葉に詰(つ)まった。そして、ちらりと戦況(せんきょう)を見る。魔王と黒龍は歩兵の非積極的な戦法にいささか対処しかねているように見えた。地上の数人の兵士を軽々と吹き飛(ふと)ばした後は、上空を旋回(せんかい)している

時間が長いようにも見える。
「……参考にさせてもらうよ。名前は？」
　栄子の質問に、男は両手でVサインを作った。その馬鹿みたいな格好に栄子は眉(まゆ)をつり上げる。
「貴様！　馬鹿にして……」
「２Ｖ(ツー・ブイ)。そういうコードネームですよ。よろしく、美人ちゃん。なんつってな」
　栄子の怒(いか)りをまたもすかして、２Ｖは地図に置かれた軍勢を示すユニットを勝手に動かしはじめた。
「君の作戦の目的は、魔獣の殲滅(せんめつ)と、突入して魔王の捕縛(ほばく)、あるいは殺害にあったわけでしょう？　ところが、事情が変わった」
「ほ、歩兵には個別に対処させ、時間稼(かせ)ぎをしてから空母をぶつけるつもりだった」
　栄子は言ったが、無視するように2Vは続ける。
「空母での攻撃(こうげき)は学院への被害(ひがい)も大きい。全国放送も行われているんです。軍の評判を落とすわけにはいかないでしょう。それよりは兵士で魔王を狩れれば一番です。ちゃう？」
「そ、そんなことはわかっている！」
「いやいや、悪いけど、この軍の配置ってば、新米指揮官の悪い特徴が出てるんです。魔術戦闘(まじゅつせんとう)ってのは、三次元で展開できるってことを忘れてるでしょ？　黒龍は飛んでる。挑発している歩兵は歩いている。本来、相手ができるのは君が空母内で温存している空挺(くうてい)大隊ですよ。ここぞって時に校内に突入させるつもりだったでしょ？　魔術戦じゃそうじゃない。飛行できる部隊は飛行部隊相手に三次元的に使う」

　この講義に栄子は黙り込むしかなかった。２Ｖは〝落ち着いて〟と手を振る。
「大丈夫、指揮は君がとる。こちらは情報提供のみですよ。情報では校内に魔獣をコントロールしている装置があるとか。それを叩くという目標に切り替えれば勝ちやすくなりますよ。それを叩けば、魔王が離れれば魔獣はコントロールを失う」
　２Ｖは自信ありげに言った。
　栄子はいぶかしんだ。魔獣をコントロールしている装置の存在など、正規軍情報部も持っていない情報である。が、その表情を読み取ったらしく、２Ｖは先回りするかのように栄子に言う。
「我々が独自に集めた情報です。そりゃ、情報調査室ですからね。すいませんが、そこらの諜報機関より優秀なんで」
「信じていいのかい？」
　栄子にそう言われて、２Ｖはにやりとした。
「もちろん」
「魔獣をコントロールする装置だと？」
「そうですよ。さて、それを破壊するための作戦に変更しましょうか」
　２Ｖは眼前の地図に手を伸ばした。が、その手を栄子は掴んだ。
「作戦を決めるのはあたいだ。情報だけくれればいい。それに、そちらは勝手に動くつもりだろう？　それならそうすればいいさ」

「はいはい」

２Ｖは大げさに首を縮めて怖がって見せた。

○

「コントロール装置？」

そう聞いたのは小粋な帽子をかぶった小柄な生徒会長、リリィ白石である。その前を行くのは三本首の魔獣『ケルベロス』にまたがった江藤不二子と曽我けーなの二人。

「そうですわ。『祭壇』と呼んでいますけれども」

不二子は長い髪をなびかせて振り返った。制服でなく過激なボンテージ風ファッションに身を包んでいる。魔王に付き従う者のスタイルとして彼女なりにイメージした成果であるらしい。それでも美形の彼女には毒婦風のスタイルはそれなりに板に付いている。

「その格好は校則違反だ。それに加えて魔獣のコントロール装置なんてものを学校に作るとは、喧嘩でも売ってるつもりかね？」

服装規定違反と魔獣をコントロールすることの違法の度合いには天と地ほどの差があるが、小柄であるためスタイルそのものも良いとは言えないリリィにとっては同列の罪であるらしい。リリィは喧嘩腰の眼で不二子を見返す。

　不二子は笑い声をあげた。
「ほほほ、まさか！　祭壇は阿九斗様のためのもの。正しくて強いのは学校でなくて阿九斗様に決まってますわ。喧嘩になりません」
　リリィが眼に殺気を宿らせた。
「ん？　大概(たいがい)にしないとキミもまとめてやっちまうよ？」
「ダメだよ、喧嘩しちゃ。ほら、学長さんが頑張(がんば)ってくれてるんだし」
　けーなが二人をいさめる。
「あなたにそんなことを言われるとは思いませんでしたわ」
　なにごとか言い返そうとしていた不二子だったが、毒気を抜(ぬ)かれたのか矛(ほこ)を収める。それはリリィも同様だったようだ。
「……細かいことは後にしよう。ともかく祭壇はどこにあるんだい？」
　リリィの質問に、不二子は前方奥(おく)を指さした。
　三人が進んでいるのは、『コンスタン魔術学院』の地下最深部、魔王の宮殿(きゅうでん)が存在した区画である。そのさらに奥、魔獣たちが封(ふう)じられていた場所へと向かっている。
「魔獣は阿九斗様に固有のマナ波動によってコントロールされていますけれど、阿九斗様から距離があったり、その精神が安定していなければ、魔獣は暴れ出(だ)しますの。そこで安定してマナ波動を出すための装置を作りましたの」



　通路の先が開け、小さな部屋が出現した。ケルベロスを降りた不二子がその中央を指し示す。そこにはドクロと龍の意匠の黒魔術祭壇が鎮座していた。サイズは人間ひとりがその前で儀式を行うのにちょうど良い程度。色は赤と黒がメインの毒々しいものだ。

「いい趣味だね」

　リリィが口をゆがめながら毒づいたが、不二子はそれを意に介していない。

「ありがとうございます。機構自体は単純ですから、外見には凝りましたの」

「機構が単純ねぇ。確かに中央の壺状のものが波動を出しているが。いや、そういえば人体に固有のマナ波動は、本人の肉体以外で再現することは不可能なはずじゃあ……」

　リリィがそう口にすると、不二子はうっとりとしたような顔をみせた。

「阿九斗様の身体の一部を波動を出せるようになるまで培養するのは苦労しましたわ」

「え？　話では祭壇を作ることにしてから制作までの間に培養ができるほどの時間はなかったはずだよね？」

　ぎょっとしてリリィは聞くが、不二子はなぜか恥ずかしそうな顔で頬に手を当てただけで、それには答えなかった。

「と、ともかく、これを守らなければ負けが確定するわけだ」

　リリィが咳払いをしながら言った。

「そうですわ。もちろん祭壇は死守しなければなりません」
　不二子は手を広げ、マナスクリーンを展開すると学院周辺の地図を表示した。
「死守するだけ？　それじゃどうにもならないだろうに」
　リリィが聞くと、不二子は腰に手を当てて不敵に笑う。
「阿九斗様は神を殺すとおっしゃった。それならば、従うのは当然。それに、守っているだけじゃありませんわ。幸い、全国放送が入っていますもの。この機会に正規軍を魔獣たちがケチョンケチョンのギタギタにしてしまえば、全国の黒魔術師たちを勇気づけることになるでしょう！」
「気楽に言ってるね。ま、そういうことなら、ボクはキミの敵だ」
「敵？　学院を守るのが会長のお仕事でしょう？」
「キミは馬鹿かい？　ボクが魔王に味方して戦うわけがないだろう。ボクがついてきたのは、キミの動きを見るためだ」
　リリィは立腹した様子で言う。
「そういうことならご安心を。会長の邪魔はいたしませんわ。それに現時点の敵は共通のはずでしょう？」
「照屋栄子か。何をしたかはボクも知っている。監視カメラがぎりぎり間に合ってね。証拠もあるが、そいつごとボクらを抹消するつもりだろうね、彼女は」
「ですからわたくしがどう戦うか考えておりますわ。会長がここを出て軍勢を相手にするおつもりでしたらご自由に」

「作戦があるって？」
　自信ありげな態度の不二子に、リリィは聞く。
「ばっちりありますわ。そもそも魔獣はわたくしの命令で動きますもの。連携はばっちり。それに、照屋栄子のような卑怯者の考えることはよくわかってますもの」
「それはキミ自身が卑怯者だからかい？」
　リリィは皮肉めかして言ったが、不二子は満面の笑みを浮かべてうなずいた。
「卑怯と姑息は黒魔術師に対する最高の褒め言葉！　照屋栄子はこちらの自爆を恐れて戦力を逐次投入してくるはず」
　あきれてリリィは肩をすくめた。が、不二子が作戦について触れたので、そこには質問を返す。
「自爆？」
「こちらには魔獣以外には数人の生徒しかいませんもの。敵が校内に一気に突入してきたら、校舎ごと崩して巻き込んでしまう。そういう作戦をまずは恐れるはず」
「なるほどね」
「そうなると、校舎内には戦力は逐次投入してくるはず。そこにはいくらでもつけいる隙がありますわ」
　不二子はいまにも高笑いをはじめかねない様子だったが、リリィは疑いを挟む。
「しかし、それは指揮が照屋栄子の場合だろう？」

「え？　それが当然でしょう？　彼女が指揮を他人に譲るように見えまして？」
「いや、C-MO8について調べていたんだけど、そこで2Vというコードネームの奴が乗り出してくるとわかってね」
　含みのある言い方をするリリィに今度は不二子が聞き返す。
「2V？」
「自動人形を使う魔術の専門家だよ。どうもこいつが戦術指揮に優れているとか」
「だとしてもどこに問題がありまして？」
「そこまで自信があるならまぁいいさ。だがボクはこいつが照屋栄子と同じ事を考えているとは思えない。何か別の狙いがあるなら、キミの考えているように事態は進まないぞ」
　リリィが語気強く言ったが、不二子はそれほど真剣に取り合ったようには見えなかった。
「ありがとうございます。いろいろと考えておきますわ」
「それだけかい。じゃあ、あとは勝手にやりなよ」
　リリィは祭壇の前を離れて部屋を出て行こうとする。
　それを見たけーなが、リリィに声をかけた。
「行っちゃうの？」
「学長が作ってくれた時間だ。ボクなりに有効に使うさ」
　リリィが振り返らずに言った。

○

その学長は、大和望一郎と対峙（たいじ）して、すでに数合ほど打ちあっていた。望一郎は阿九斗さえも吹き飛ばした巨大な剣（けん）を構えている。それでも再度の打ち込みを行わないのは、学長が隙を見せないことが理由だった。

学長は上半身を裸（はだか）にしているが、その筋肉は油断無く、よどみなく波打っている。常に身体の前方で両腕（りょううで）が静かに回転しているのである。

普段（ふだん）の学長を知っている者からすれば、今の彼（かれ）の姿は信じられないだろう。枯（か）れた木のようにしか見えない老人だったのだが、今は凄（すさ）まじい量の筋肉に包まれた上半身を露（あら）わにしているのである。変化系の魔術による身体操作の究極の形だろう。

「何故（なぜ）、道を塞（ふさ）ぐんですか？」

望一郎が厳しい声で聞く。

学院地下の廊下（ろうか）のこの部分は一本道で、学長を倒（たお）さない限りは先には行けない。

「百年前とは違（ちが）う、ということじゃよ」

若々しく、軽妙（けいみょう）な声で学長は笑う。

「以前、あなたとは肩を並べて戦った。魔王を倒すための戦いで」
「先代の魔王のときに、じゃな」
「それならば、なぜ。なぜ私の目的を知りながら道を塞ぐんです？」
「お前さんの目的は忘れておらんさ。しかしながら、こちらも年を取って考え方も変わる。あのときは魔王を倒すのが正しいと思った」
「今は正しくないと？　何も変化していないのに？」
「確かに変化はしていない。それはわしらがうまくやらんかったからではない。先代の魔王は倒した。それでもお前さんがここにいる。つまり、未来は変わらんかったんじゃあないかね？」
　学長のその言葉に、望一郎は痛いところを突かれたという顔をする。
「だ、だが、あのときは自同律がどういうものかわかっていなかった！」
　望一郎は叫ぶ。次の瞬間に望一郎の身体が消えた。それは凄まじい勢いの前進だった。瞬時にして学長の前まで移動し、そこで踏みとどまる。が、両手で握った剣だけはその勢いのままに学長に向かって叩きつけられた。剣の切っ先が音速を超え、破裂音を周囲に響かせる。
　学長はこの攻撃を避けるわけにはいかなかった。避ければ望一郎の前進を許す。が、受け止めても吹き飛ばされることは確実だった。阿九斗をすら吹き飛ばす一撃なのである。
　しかし、学長がしたことは、呼気を一瞬、細く吐き出し、身体の前方で回転させていた腕の速度をあげただけだった。

と、その腕が剣の腹に粘り着くように動く。すると巨大な剣が、学長の腕の回転によって、一瞬にして弾き飛ばされたのである。

「ちぃい！」

望一郎が逸れた剣の軌道を修正できず、そのまま切っ先を壁に叩きつける。剣は壁をえぐって止まるが、望一郎は無防備な身体を学長の前にさらしていることになるため、跳び退ることを余儀なくされる。

二人は再び先程までの距離を挟んで対峙した。

校舎の壁には剣で破壊された跡がいくつかある。二人が打ち合っているにもかかわらず状況が動いていないのは、何度も同じことが繰り返されたからである。

学長は望一郎には打ち込んではいかず、そのために時間だけが過ぎていく。

「攻撃してこないのは時間稼ぎのためですか？」

「さて、勝手に想像するがいいわい。わしの老体では、この化勁でかわすという戦い方があっているということじゃよ」

「どちらにせよ、互いに動けないことには違いない。そして状況が悪くなっていくのは私の方だ。昔のよしみで殺したくはなかった。多少、話もしたかったですし。しかし、こうなっては仕方がない。命を奪うことになっても恨まないでくださいよ」

望一郎は剣を小さく構え直した。

「次元ごと切断させてもらう。『ホジスン式完全切断』」

その一言とともに望一郎が剣を振ると、その切っ先の軌跡に従って何もない空間がゼリーに刃物を当てたように裂けていく。そして、その裂け目が学長に向かって凄まじい速度で撃ち出された。
空間そのものを裂くことでどんなものでも切断する技である。これによって阿九斗の腕も切り落とされた。さすがに学長もこれを腕の回転で弾き飛ばすことはできまい。
空間の切断面が学長の身体に触れた。
が、学長は涼しい顔で立っている。切断面自体は学長の身体を通り過ぎて向こう側に行っている。学長の身体に異変はない。
「何だと……？」
望一郎がぴくりと眉をあげた。
再度、望一郎が『ホジスン式完全切断』を撃ち出す。が、またも切断された空間は学長の身体を通り過ぎた。
「どうやった？　映像か？」
望一郎は再び空間を切り裂くと、それを追って自らも前進した。そして切り裂かれた空間と同じ軌道を進むように剣を振り下ろす。
すると学長は切り裂かれた空間を避けず、剣の方を腕の回転で弾き飛ばした。
「何だと？」
望一郎は再び下がる。

「タネは秘密じゃね。長生きするにはそういう小細工も必要になる。おっと、お前さんの方が長生きじゃったか……。さて、昔のよしみだ。お話でもしようじゃないか。この年齢になると昔語りをする相手もそういないのでな」

　学長は微笑む。

「映像かと疑ったのですが、違うらしい。食えない老人だ。とはいえ、こちらもたばかられて怒るほどには短気でも幼くもない。話すことがあるなら話しましょうか。ただし、手は休めずに……」

　望一郎が前進したが、今度はそれほどの速度ではない。剣を短く、鋭く、連続して打ち込む。これで剣を弾かれたとしても体勢を崩さずに連続した攻撃が可能になる。

「先代の魔王は確かに共に倒した。じゃが、それで事態は好転はしなかった。わしはお前さんの言葉を信じられなくなった」

　学長が腕を素早く回転させ、すべての斬撃を弾きながら言う。

「人類が滅ぶのは嘘ではない！」

「その事自体は疑ってはおらんよ。どのようにそれを解決するのかが間違っているのではないかということじゃ」

「だからこそ神を人類が管理しなければならないと言っている！　人類のことを人類が決定する。それを放棄したから滅びることになった！」

　望一郎は叫ぶが、学長は首を横に振る。

「違うじゃろう。お前さんの意志はそこにはない。こだわっておるのは、お前さんの話していた女のことじゃろうに」
　と、望一郎の手が止まる。
　二人は近距離でにらみ合った。
「百年前、心を許したから本当のことをあなたには話した。それを後悔することになるとはね」
　望一郎が静かにうめく。
「こちらは今でも心は開いておるよ。しかし、先代の魔王を倒したときにわかってしまった。お前さんは、実は魔王に成り代わりたがっているだけじゃ」
　学長は、こちらも静かにそう告げる。
　望一郎が言葉に詰まった。
「自同律と言ったかの。その性質を持つ女はどこか似ている。曽我けーなにその色を見たのかね？」
　学長が聞くと、望一郎は剣を一気に振り上げた。
「そのような小さい人間と私を言うか！」
　轟音を立てて剣がうなる。学長はそれを受け流しつつ、応じる。
「そうではない。お前さんの善なる心は余人をもって代え難い素晴らしいものじゃ。その決意の大きさも、それ故の孤独も知っておる。だからこそじゃ」

「神を操る。それによって滅亡を回避する。それのどこが問題か！　神を破壊してどうなる？　そこに正しさは一片もない！　それこそ破壊衝動に従っているだけだ！」
「ここで議論してもはじまるものかよ。じゃが、わしはお前さんが間違っているように感じておる」
「それならば、魔王が正しいと！」
「いや、それも間違いじゃろう」
「勝手なことを！　外野から言える老人は本当に質が悪い！」
「百年前には若かったわい」
　学長は望一郎の剣を受け流し、後ろに下がった。さすがに息を切らしていた。
「もう若くはないということか」
　一方、望一郎は呼吸を乱していない。
「こちらもそれほど時間がないというわけではない。もう少し話をしていられそうですね」
　望一郎は再び剣を構え、じりじりと前進を開始した。

○

「作戦は変えない。飛んでいる奴は飛んでいる奴が相手をする。となれば、話は簡単さ」
　栄子は2Vに向かって毒づきながら、念話機に向かい、混乱している現場に作戦指示を出す。

「第一、第二小隊は正面入り口、第三は通用口、第四は連絡通路へ前進、魔獣からは距離をとって待機。突入に備えよ」

栄子は隊を細かく分け、それぞれを同時に突入させる体勢をとらせる。

「それじゃあ、相手が守りやすい。どうして戦力を分散して逐次投入なんてことを」

2Vが抗議すると、栄子は彼をにらみ返した。

「自棄になって校舎ごと自爆する危険があるからに決まってるからさ。それに相手は魔王頼みの軍勢。出てきた魔王を足止めできているということのほうが重要じゃないか」

「足止めの策があれば、でしょう?」

「ふん、そんなことなら考えてあるさ。三次元的に見ればいいとか言うけれど、要は飛べる奴ならばいいということ」

栄子はそう言って再び念話機を手にする。

「服部家の軍勢は全員、魔王と黒龍の対処に全力を尽くせ」

そう言って栄子は返事を待った。服部家の大将は、今は服部絢子である。彼女の声が念話機からは聞こえてこない。

「どうしたの、絢子？　返事は?」

残忍な笑みを浮かべつつ栄子は再度聞く。

と、そこに怒鳴り声が返ってくる。

「了解！」
栄子は一瞬、顔をしかめたが、念話を切ってから面白そうに笑った。
「ははは！　これでいいんだろ？　奴らは飛べる者も多いし、いざとなればどういうわけかブレイブとかいう道化者もついているらしいしね！　さて、絢子がどういう戦いをするか見せてもらおうじゃないさ！」
そう言って戦況を見守る栄子だったが、2Vは彼女の見えないところで顔をしかめた。
「思ったよりも指揮官としてはダメか……。わかってはいたが、あまり状況が不利になりすぎるのもまた困る」
周囲に聞こえないように独り言をつぶやくと、2Vは部下を呼びつけるように軽く右手を動かした。
すると、控えていた伝令兵の一人がテントの中に入ってくる。
周囲の者も気づいていないが、それは奇妙なことだった。CIMO8の彼には軍人に何かを命じる権限などないはずなのである。
しかし、その理由はすぐに知れた。2Vに向かって身をかがめたその伝令兵の表情は、人造人間に特有の自我のない表情をしていたのである。
「指揮権を奪えるようにしておこうや」
小さく2Vは言い、人造人間の伝令兵と視線を交わした。その視線にマナ特有の光が宿っていた。やがてうなずき返した人造人間の眼には、明らかな自我が感じられた。

これが2Vの得意とする術だった。彼は人造人間に意志を転送し、自らの身体のように操ることができるのである。そして、軍の雑用を任されている人造人間は2Vの意志を受け取ることができるように改造されていた。

「さて、次はどうしますかね？」

2Vは栄子に聞いた。栄子はなにやら自らの心づもりを話しはじめたが、2Vはそのほとんどを聞いていなかった。人造人間の伝令兵を待機している歩兵たちに紛(まぎ)れ込ませるべく走らせていたからである。

「望一郎の大将、うまくやってくれますかねぇ？」

伝令兵は2Vの声で、口の中でそうつぶやいた。

2　黒幕がいっぱい

――やるしかないのか。

絢子（じゅんこ）は一度決めたはずの心に迷いが生じていることに気づいた。

戦場とはいえ、今はまだ敵は上空の阿九斗（あくと）一人である。その阿九斗も校舎に近づく兵士たちを牽制（けんせい）しているのが主たる行動で、２Ｖ（ツー・ブイ）の助言もあってか、やる気のない兵士たちは出来る限り動かないようにしていた。校舎を取り巻く魔獣たちにも動きはなく、そのため絢子もそれほど葛藤（かっとう）を感じずにいられた。しかし、栄子（えいこ）の命令が下れば別だ。

――ええい、迷うな。

そう自らに命じても、様々なことを考えてしまう。

――命令に従うしかないが、命令しているのはあの栄子だ。それにただ従うのは馬鹿（ばか）馬鹿しい。だが、家のためでもある。いや、でもお祖母様（ばあさま）は自分の意志に従えと言ってくださった。では、自分の意志とはなんだ？　何がしたいのだ、私は。

絢子はそんな風にぐずぐずとしていたが、絢子の思いと裏腹に、伊賀（いが）者たちは阿九斗に対してまだ強い恨みを持っていた。栄子の命令に絢子が返事をしたとたん、総勢六百の忍者（にんじゃ）軍団のうち、服部（はっとり）家直近の者たちは我先にと空に舞（ま）い上がっていく。

「お嬢様の恨み、我らが必ず晴らします！」
彼らは口々にそう叫んでいた。
精鋭たちである彼らは、個人での戦闘用魔術のほとんどを使いこなす。上空を旋回するピーターハウゼンにまたがる阿九斗を五人で取り囲むと、彼らはまるで五人でひとつの生き物であるかのような有機的な動きで阿九斗に襲いかかった。
「伊賀忍法五方魔円陣！」
五人の忍者は素早く互いの位置を変えつつ、それぞれがそれぞれの動きをフォローする理想的な陣形で攻撃を繰り出していく。剣で、手裏剣で、鎖鎌で。恐らくは巨大な魔獣を倒すために生み出された強力な連係攻撃だ。
「久しぶりの戦闘だが、人間の戦い方も進化しているようでなによりだ！」
喜びの声をピーターハウゼンはあげる。この神の眷属である古い龍は、久しぶりの戦いに昂ぶっているようだった。
しかし、その主たる阿九斗は、戦いを楽しんでいる風ではなかった。
「必要のない進化だ。それに、それほど有効でもない」
つまらなそうに言うと、ピーターハウゼンの背中で立ち上がり、討ちかかってきた忍者の足を片手で握ると、彼を振り回して他の忍者の攻撃を弾き飛ばした。

「仲間が人質に取られた場合は想定してあるようだけど、不測の事態に弱い」
阿九斗はそう言うと、振り回した忍者を投げ飛ばし、回避した忍者も巻き込んで下に叩き落とす。
部下を軽々とあしらわれて、絢子は、さすがに瞬時に頭に血を上らせた。
「貴様！　何をするか！」
絢子は飛び上がった。腰の刀に手をかける。二本差しのうち大刀の柄を握ったが、それが伝家の宝刀『ソハヤノツルギ』であることを思い出した。刀に選ばれなければ、スハラ神に選ばれた者でなければ抜けない銘刀である。
——抜けるか？　いや、抜けなかったなら……。
「ちぃい！」
絢子は小刀の柄に握り替えた。抜きはなって逆手に構え、阿九斗に斬り込んでいく。
その何の工夫もない攻撃を阿九斗は素手で受け止めた。刃の部分を手でしっかりと握り込んでいる。
「くっ……」
絢子が顔をゆがめる。小刀は押しても引いても動かなくなっている。しかも阿九斗の手からは血が流れることはない。
阿九斗は無言で絢子を見つめていた。絢子はその眼の悪意のなさにひるむ。
「な……どうしてそんな顔をする！」

絢子は握られた小刀を支点に足を振り回して阿九斗の顔を蹴りつける。阿九斗は首を曲げただけで蹴りを軽くかわし、同時に小刀を放した。絢子は自らの蹴りの勢いのままに身体ごと回転して吹き飛ばされたような格好になる。

「く……な……なぜだ……！」

涙こそ流さなかったが、絢子は唇を噛みしめた。まるで相手にならぬことが悔しかった。自らの非力さが口惜しい。

――まるで問題にならないじゃないか！　それに私が敵になっているというのに、あいつは動揺してもいない！　私が弱いから脅威にもならないというのか？　それとも私があいつにとって本当にどうでもいい存在ということなのか？　……ええい！　私はどうしてそんなことを考える……！

絢子は小刀を収める。そしてソハヤノツルギの柄に手をかけた。

――あいつに傷をひとつ付ける程度の力でもあれば……！　そうすればあいつも私のことを少しは相手にする気になるだろう……！



「なぜ私のことを気にかけてくれないんだ！」
絢子は叫んだ。叫んでから、自分が思わぬ本心を吐露していたことに気付いた。
――ち……違う……違わないが……そうじゃない……！
ソハヤノツルギに手をかけたまま絢子は突っ込んで行くが、やはり刀は抜けない。
絢子は、ふたつの不都合にぎょっとした顔になるが、一度ついた勢いは衰えない。柄に手をかけたままの格好で阿九斗に急接近。間抜けなことに正面から阿九斗にぶつかってしまう。
「ひぃ！」
絢子は阿九斗に抱きとめられていたことに気づき、身をよじる。だが、阿九斗は絢子の身体を離さなかった。
「や、やめろ！　何をする！」
「君がそんな風に思っているなんて知らなかった」
阿九斗が言った。絢子の動きが止まる。
「え？」
「君は僕よりも立派で、今だって沢山の人を従えている。だから、僕に自分のことを気にかけて欲しいだなんて、そんなことを考えているとは思ってもみなかった」
阿九斗は真摯な声で絢子の耳元でささやいた。
「ば、馬鹿っ……？　今がどんな状況かわかっているのか？」

絢子がたしなめるが、阿九斗はそれにうなずいただけで、さらに続ける。
「僕の戦いは僕だけにしかできないから、それに夢中になってしまった。終わったら、君のことを大切にするよ」
「た、大切に……」
爆発したように顔を赤くした絢子は、へなへなと身体の力が抜けたようにへたり込んでしまう。
「気をつけて」
身体に力が入らなくなった絢子を、阿九斗は優しく抱きかかえ、下に降ろした。飛翔魔法の効果が残っていたので、絢子の身体はふらふらと上空から落ちていく。
――ば、馬鹿っ……。そんなことを言われたらどうしていいかわからなくなるじゃないかっ……。

○

半ば自らの意志で落下していく絢子だったが、その様子を遠くから見ていた伊賀者たちにとってはそうではなかった。
「お嬢様がやられた！」
「ええい！　魔王め！　逃れられぬ近距離からお嬢様に魔術を打ち込んだか！」
「行くぞ、今一度！」

「怒りの八方魔円陣！」
伊賀者たちは今度は人数を八人に増やしての連続攻撃を阿九斗に仕掛けてきた。
ピーターハウゼンがそれを見て呆れたようにため息をついた。
「前言を撤回するか。進化してもワンパターンな数を増やしただけの攻撃とは……」
今度は黒龍の羽根の一振りで伊賀者たちは吹き飛んでしまう。
「彼らは逆上しているだけだ。悪く言うもんじゃない。どうして逆上したかわからないけれど」
阿九斗は言った。
「……そんなことよりも、主よ、どうするつもりなんだ？　相手になるような敵がいないならもう上空に居る必要もあるまい。目的を果たしに行くべきだ」
「そうもいかない。ここになんとかしなくちゃいけない相手がいる」
阿九斗が見下ろした先には、ゆう子がいた。絢子の妹であり、人気アイドル。そして、魔獣のマナを体内に持ってしまったために命の危機にあり、かつ阿九斗の出現によって精神に影響を受けてしまった少女である。今も絢子の落下を誤解して半狂乱になり、阿九斗に向かって上昇してきている。
「あんな娘を？　放置しても問題ないほどだ。命を救いたいというのであれば……」
そう言いかけたピーターハウゼンを制して、阿九斗が彼女の背後を示した。
「僕が言っているのは、あっちだ」

「後ろか？」
　ピーターハウゼンが改めて首をめぐらせると、ゆう子の背後から弾丸（だんがん）のように上昇してくる影（かげ）があった。
「あいつか！」
　ピーターハウゼンが叫ぶ。
「うぉおお！」
　大気を切（き）り裂いて上昇してくるのはブレイブ。特殊（とくしゅ）スーツに身を包（つつ）み、魔獣退治のためにどこからか現れるヒーローとして知られていた。スーツの出力はマナに依存（いそん）しないようで、彼を取り巻いている光はマナ発光のそれではない。
「マナが感じられない！」
　ピーターハウゼンが驚（おどろ）きの声をあげた。
「気をつけて。おそらくマナキャンセラーを使うことができるはずだ」
　阿九斗が警告したその言葉が終わるか終わらないかのうち、阿九斗を乗せたピーターハウゼンとブレイブが交錯（こうさく）する。
　金属同士がぶつかる音が地上の兵士にまで聞こえるほど高く響（ひび）いた。
　すれ違った二人は距離（きょり）をとって対峙（たいじ）する。

ブレイブが手の甲から生える高周波ブレードの爪を構え、余裕の姿を見せたのに対し、ピーターハウゼンはその巨体をぐらりと揺るがせた。

「おお！　これは驚いた！　生まれて以後百年以上も傷ついたことのないこの身体に！」

正気を保つように翼を一振りして体勢を立て直したピーターハウゼンが声をあげる。

「傷？　大丈夫か？」

阿九斗が気遣うと、ピーターハウゼンは唇をめくりあげて残忍な笑みを見せた。

「大丈夫？　力がわいてきて困るくらいだ。まさしくこの喜びのために生きてきた！　彼の手から生えている爪は私のそれのように硬い！　互角の相手だ！　私が存在してきたことの意味を気づいてくれるのはそういう相手だけだ！　わかるか？　主にならわかるだろうが！」

「わかるさ。強く生み出された者はどうしたって孤独になる。君のように時間と共に弱くならない者は特にね。でも、今回は負ける覚悟すら必要だ。あの爪はまだ以前見た本来の実力を発揮してはいないし、無論、彼には他の武器もある」

阿九斗は言った。以前見せられた映像でブレイブは爪全体を高周波振動させていた。さらに周囲を取り囲む魔獣を一瞬にして切断した見えないワイヤーもまだ使ってはいない。

「負ける覚悟か。ふん、死ぬ覚悟ならいつでもしているが、負けることはありえない」

ピーターハウゼンは笑う。

「それなら良かった」

阿九斗は寂(さび)しげに言った。

ブレイブは、下から追いついてきたゆう子のことを守るようにその前に立ち、ゆう子になにごとか囁(ささや)いた。ゆう子は納得(なっとく)したのか、再び下に降(お)りていく。

「あいつも女には甘(あま)いらしい」

「あいつも?」

ピーターハウゼンの皮肉を聞き流し、阿九斗はブレイブを指さした。

「ともかく、彼をなんとかしないと、ここを離れるのは無理ってことさ」

「なるほど。確かにそのようだ。我らと戦うのにふさわしい相手だ。さぁ、行こうか」

ピーターハウゼンはブレイブに向かって加速した。

○

ゆう子が下に降りてきた。

「お嬢様、なんたる無茶(むちゃ)を」

「我らにお任せください」

忍者たちはゆう子を気遣って周囲に集まったが、ゆう子は首を横に振(ふ)った。大丈夫(だいじょうぶ)だと伝えようとしたわけではない。ゆう子は満面の笑みで上空を指さしたのだ。

「心配ないよ、ブレイブがあいつを殺してくれるから。みんなは他の魔獣を殺そうよ」
　ゆう子はアイドル然とした態度で言った。
　この戦場には生中継のカメラが来ている。そしてアイドルであるゆう子には、特にべったりと張りついているカメラマンがいる。それを意識してのアイドル顔であろうが、それだけでない狂気がゆう子に宿っているように感じられた。
「みんな！　命令なんてどうでもいいよ！　あいつはブレイブがなんとかしてくれる。それだったら、学院に突入する任務を優先しようよ！」
　ゆう子は付いて来い、と手を振ると、いきなり走り出した。
　周囲の忍者たちは戸惑った。命令違反を堂々と指示されたのである。さらに、伊賀の指揮官は絢子なのである。
　その絢子は、ゆう子よりも先に下に降り、保護しようとする忍者たちに心配ないと告げていたのだが、このゆう子の行動に気づき、さすがに意見しようと前に出る。
「こら、ゆう子、戦場では……」
　しかし、その説教はすぐに中断させられてしまう。間に入ったのはなんとカメラマンとレポーターだった。
「勇敢なるブレイブに守られた星野ゆりちゃんが、いよいよ実戦に向かいます！　ゆりちゃん！　ゆりちゃん！」

レポーターが絢子を押しのけて、ゆう子の芸名を呼んでいる。

「ゆりちゃん！　危なくはないですか？」

「大丈夫！　秩序を乱す魔王の成敗はブレイブがやってくれてる。だから、私は魔獣を退治しないと！」

ゆう子がカメラに向けてきっぱりと言う。それは可憐なアイドルが恐怖を克服して戦いに赴くという映画のワンシーンのようだった。演技なのは明らかだったが、違うのはこれが本当の戦場ということで、視聴者にとってはとんでもない興奮があったことだろう。

それが事実だったことはすぐに判明した。指揮官である栄子の声が絢子に飛んできたのである。

《服部忍軍は、ゆう子の自由にさせていいぞ》

「それは、命令変更ということですか？」

絢子が聞く。

《そうだ。かなりの反響があるらしい。あんたの人気もそれなりだね。デビューくらいはできるかもしれんさ》

栄子が皮肉る。人気取りのためだけに放送を許可した栄子である。視聴者からの反響も報告させているらしい。

「……了解」

苦々しい気持ちで絢子は答え、遅れてゆう子について行くと、他の者にも「続け」と指示を出した。

ゆう子を先頭に、服部忍軍が校舎に向かっていく。すでに校舎近くに控えていた部隊はそのとき、すでに魔獣たちとの交戦を開始していた。

○

「くくく……。相手が罠にかかる瞬間というのは、いつ味わっても悪くないですわね」

開始された戦闘の様子を複数のマナスクリーンで見守りながら、にやりとする不二子である。

「なんか悪い人みたいだよ、先輩……」

けーなが不二子を見守りながら素直な感想を口にする。

「悪い人ですもの」

不二子は当然のように言う。

すでに生徒会長が去った後で、小部屋にいるのはケルベロスを除けば、不二子とけーなの二人だけなのだが、その部屋はスクリーンで埋め尽くされており狭く感じられる。

不二子はスクリーンを忙しくつつき回って魔獣たちに指示を出している。スクリーンは学院の監視カメラを使ったもので、不二子の戦術に重要な場所が映し出されている。すなわち、敵が侵入のために突破しようとする場所だ。

「狙い通りですわ。こういうときは包囲して相手の消耗を待つのが常道ですが、それは放送の関係上果たせない。それならば校舎の全面を一気に攻めなければならないところを犠牲を恐れてそれもできない。結局、正面玄関、裏口、連絡通路と侵入口として最適な三箇所のみを同時に攻撃するしかない。まさに策にはまるために攻めてくるようなものですわね！　ほほほほほ」

　不二子が笑いながらタイミングを計る。

　タイミングというのは相手が突入してくる瞬間のことだ。校舎近くにバリケードを築いていた兵士たちは、その陰から小銃を撃ち込む者と、刀を構えて突入準備をする者とに分かれている。問題は、いつ突入してくる兵士たちが動き出すか、だ。

　不二子は魔獣たちのうち、硬い外殻を持つ蟹やら亀やらの魔獣を外側に立てていた。小銃の詠唱弾程度であれば、彼らは傷つかない。だが、不二子は少しずつ魔獣たちが後退するようにし向けていた。突入を誘っているのである。

　そこに兵士たちに栄子の突入指示が飛んだ。それは服部忍軍に突入の許可を出した直後、そして不二子の読み通りのタイミングであった。

　小隊指揮官が突入の合図を出す。援護の銃撃が厚みを増し、爆発魔法が込められた詠唱弾が激しい爆発を校舎の各入り口に巻き起こす。次の瞬間、その爆煙に紛れて兵士たちが互いをカバーしながら突入を開始する。

　しかし、不二子の魔獣に対する指示は、それより一瞬だけ早かった。

「各自バリケードへ攻撃開始！　上空から狙いなさいませな！」

　魔獣たちはその指示で一斉に突進を開始した。音波で周囲を確認できるタイプの魔獣は煙で視界を奪われることなく兵士たちを的確に攻撃できたし、飛行できるタイプの魔獣は煙と爆発そのものを飛び越えてバリケードに殺到する。

　バリケードは上空からの攻撃も想定されてはいた。飛行できる者も少数だが小隊には配置されている。彼らは自らが移動式のバリケードとなるべく金属製の大盾を構えていたのだが、いかんせん魔獣の数が多すぎた。統制された魔獣など存在しなかったことと、そもそも魔獣との戦闘経験が軍には少なかったことも手伝い、いきなりの上空からの攻撃にほとんど防戦一方となる。

　突入を開始しようとしていた歩兵たちも同様だった。魔獣たちが攻撃してくることは予想外でほとんど対応できなかったばかりか、飛行型の魔獣たちに後方に回り込まれたため、バリケードに戻ることもできなくなっている。

「各自対応せよ！」

　もう打つ手がないという意味のことを小隊長が叫ぶ。個々の兵は魔術もほとんど使えず、一対一の戦闘では魔獣に勝ち目はないのであるから、各自対応などできるはずもない。兵たちは次々と魔獣に吹き飛ばされ、戦闘不能状態に追い込まれてしまう。

　それでも魔術が使える少数の兵が仲間たちを守り、バリケードそのものを放棄して後退をはじめたことでなんとか混乱は収まったが、それでも大規模な混乱を突入部隊は被る。

突入口三箇所のどこでも同じ光景が繰り広げられたことをマナスクリーンで確認し、不二子は大笑する。

「おほほほほほ！　大勝利！　指揮官の差ですわよ！」

　それを見ていたけーなは心配そうに言う。

「兵隊さん大丈夫かなぁ」

「怪我すればすぐに後退、戦闘不能になるのが軍隊ですわ。何百年前ならいざ知らず、向こうは医療班も揃っているんですし、即死なんて何パーセントも出ませんわよ。それに、そもそもそんなこと気にしていたら勝てませんわよ！」

　不二子は興奮した様子で応じたが、魔獣たちに追撃を命じはしなかった。小隊を四個ばかり潰走させた結果に満足し、再び校舎にまで魔獣を引き戻す。

「次は服部忍軍が来ますわ。こちらは個人でも魔獣と戦える強力な相手。戦い方を変えなくては……」

　不二子は正面玄関に向かって前進してくる服部忍軍に意識を移した。スクリーンには先頭を歩いてくるゆう子と絢子の姿が見える。

「あ、絢子ちゃんだ！」

　けーなが心配そうな声をあげる。一方、不二子はにやりとした。

「それは好都合。ライバルを葬れるまたとないチャンス！」

「えー？　ダメだよ、そんなことしちゃ」

けーなは口を尖らせるが、不二子は取り合わない。

「ほほほ、怪我をしたとしても服部さんが悪いんでしてよ。阿九斗様に楯突くような行為はあの人が許してもわたくしが許しませんわ！」

「むー、そんなことをしちゃダメなんだよ。ねぇ、けるぴー？」

そう言ってケルベロスのみっつの首ののど元を撫でるけーなである。

「けるぴー、とか変な名前を付けないでくださる？　そもそもケルピーは別の魔獣の種類の名前ですから！　って、あなた、犬が苦手なんじゃなかったでした？」

「犬は怖いよ。でも、首がみっつだったら犬じゃないよ？」

「よくわからない基準ですわね……」

「そんな話はいいんだよ。あんまり戦争すると、ぼんってなっちゃうよ？」

「ぼんって？　何を言っているんですの、あなた？」

わけのわからないことを言うけーなに不二子は不思議そうな顔になる。

しかし、状況が待ってくれるわけでない。不二子は服部忍軍に対し、即座に対処しなければならなかった。

「来ましたわね！　さぁ、行きますわよ、魔獣たち！」

○

服部家に対する命令を変更した栄子だったが、その直後の戦闘の結果には狼狽せざるをえなかった。
「し、しまった……。ええい！　相手が前に出てきた程度で崩れるんじゃないよ！　魔獣と戦える部隊を出さないと……。そうだ、服部家を前に出したじゃないか。あれにやらせて他の部隊は退かせよう……。いや、駄目だ。それじゃあいつらの人気が出てしまうじゃないさ！」
元々が人気取りのために自分が指揮をしているのである。解決したのが服部家となれば、その目的は果たせない。
「かといって正面玄関の戦いは映像的わかりやすさからも外せない要素だし……。照屋家の部隊を投入するか……？　いや、勝っている時に投入するのはいかにもまずい。空母から空挺を降ろすか……。それとももはや空母そのものを突っ込ませるか……」
悩んでいる栄子に、背後からまたも２Ｖが声をかける。
「お困りなら手を貸しますけどね？」
「何かアイデアがあるのかい？」
取材陣は指揮所であるテントに今はいない。栄子は恥も外聞もなく２Ｖに頼る。
「情報調査室からは、自分の他にもう一人来ていますんでね。そいつにちょいと仕事させましょう」
２Ｖは面白そうに言う。今は意識を人造人間の操作でなく、こちらに集中させているらしい。
「仕事？　どんな奴が来ているんだい？」

「潜入と情報収集の専門家ですよ。少し変わってますけれどね。ラバーズというコードネームです」

「ラバーズ。恋人ってことかい？　いや、名前なんてどうだっていいよ。どうすればいいんだい？」

「ラバーズに服部家の邪魔をさせます。そこに照屋家の部隊を投入すればよろしい」

「そんな簡単なことでいいのかい？」

栄子はいぶかしむが、２Vはうなずいた。

「そうですよ。勝ってもらわないとこちらも困る。疑う余地はありませんや」

２Vは軽口のように言う。そして、上空を指さした。

「早くしないと、あれのせいで戦況が無茶苦茶になっちまいますよ」

２Vの言う〝あれ〟というものが何かはすぐにわかった。

その瞬間、激しい爆発が巻き起こったのだ。栄子の視界が凄まじい光に満たされる。それに続いて衝撃波がやってきた。テントの天幕、そして念話機までもが吹き飛ばされそうになる。そしてようやく爆発音。

そちらに顔を向け、栄子ははじめて何が起こったのかを理解した。巨大な火球が空中に出現していた。それは阿九斗とブレイブがそこで衝突した証だった。

「な……なんだっていうんだい！　あれはとても人間の仕業じゃないよ！」

栄子が思わずそう叫ぶ。

「同感です。しかし、どうやらああいうのと戦わなくてはならないらしいですよ、我々は」

２Vは楽しそうに笑った。

○

——プラズマ球が防がれるのか！

ブレイブ＝ヒロシは驚愕していた。どちらかといえば防御の意味合いで自分の周囲に展開していたプラズマ球である。触れれば爆発することはわかっていたはずだった。ところがそれに躊躇無く阿九斗——いやピーターハウゼンか——は突っ込んできた。そしてその威力に耐えきり、自分を攻撃してきたのである。

「戦いならば身体を使うべきだぞ、若者よ！」

ピーターハウゼンの咆哮と攻撃が同時だった。ヒロシはその爪を両腕をクロスして受けきり後方に下がる。

——身体を使う？　こっちは武器の使用を計算しなくちゃいけないんだよ……。

ヒロシは頭の中でぼやく。

ブレイブのスーツはどうやらあらゆる武装やエネルギーそのものも異次元から転送されてくるらしい。

重武装は再装填までに時間がかかる仕様になっている。

《高温プラズマ球、使用可能まであと四分二十秒……》

バイザーに武装が使用可能かどうかが映し出され、カウントが頭の中に響く。スーツを駆動するための動力も攻撃に回せるが、そうすると数秒は動けない状態になる。

「説教など聞いていられるか！」
　ヒロシは爪のブレードを高周波振動させてピーターハウゼンに斬りかかった。爪同士が切り結び、激しい火花を周囲に散らす。
「ワイヤー！」
　ヒロシは左手を滑（すべ）らせ、単分子ワイヤーを展開する。これにはピーターハウゼンも触れはしない。今度はピーターハウゼンの方が下がり、ヒロシが一気に前に出る。
「ちぃい！」
「うぉおおお！」
　阿九斗を乗せたピーターハウゼンとヒロシは絡（から）み合（あ）うように空を駆（か）けていく。それは暴風を巻き起こし、ひとつの竜巻（たつまき）のようになってうねりながら通過する周囲の物をすべて吹き飛ばしていく。
　彼らが通過した位置にいた兵士たちはほとんどが吹き飛ばされ、彼らの進路にいる兵士たちは悲鳴をあげて逃（に）げまどった。
　その竜巻の中心にあってヒロシは阿九斗に叫ぶ。
「説教の割りにはあんたはどうして戦わない！」
　それに答えたのは阿九斗でなくピーターハウゼンだった。
「戦っているのは主ではなく私だ！　私が戦いたがっている！」
「そっちじゃない！　あんただ！　どうして戦ってるんだ、あんたは！」

ヒロシの言葉はあくまで阿九斗に向けられている。
「神を殺したい。それだけさ」
　阿九斗の声は思いの外静かだ。
「そんなことをして何になる！　人々の生活を脅(おびや)かし、魔獣をはびこらせ、破壊(はかい)をもたらす！　それよりもあんたほどの力があれば良い方向に人々を導くことだってできたんじゃないのか？」
　ヒロシは怒鳴(どな)る。阿九斗も応じた。
「そうできるならばしているさ。そうできない理由があると考えたことはないのか？」
「人の生活を脅かすものを、破壊をもたらすものを排除(はいじょ)すればいいに決まっている！　今や神のおかげで犯罪者は減った。残っているのはおかしくなっちまった奴だけだ！」
「僕がおかしくなってしまったように見えるのかい？」
「あんたはそうは見えない。だが、本当に狂(くる)っていようといなかろうと行動が狂っていれば同じことだ！」
「それならば僕を討(う)てばいい。だが、僕がおかしくなっていないように見えるのならば、僕にも正しさはあると気づいて欲しい」
「なら、その正しさってのは何だ！」
「人はシステムにすぎないものに名前を与(あた)え、その名前をいつか実体だと思いこんでしまう。本当に無くすべきなのはそいつだよ」
「そんな答えになっていない抽象的(ちゅうしょうてき)なことを！」

「簡単なことを言っていて本質が突（つ）けるものか。人は簡単に物語に頼りすぎると言っているんだ。神もそう名付けられただけだ。人の繫（つな）がりすらも、本当のことを見ているわけじゃなく、自分が夢想した物語に他人を当てはめようとしているだけだ。今の神が頂点に立つ物語の中での幸福を人は求め、その基準に則（のっと）って人は人を殺し、戦争をする。それなら、僕は……」

阿九斗はそこで言葉を句切った。

「それならどうした！」

ヒロシは阿九斗に斬（き）りかかる。

今度はピーターハウゼンがそれを防がず、阿九斗は直接に高周波ブレイドを片手で受け止めた。

高周波の振動によってマナの光が波紋（はもん）のように拡（ひろ）がる。

阿九斗がその波紋を押（お）しのけるように、高周波ブレイドごとヒロシの腕（うで）をねじ上げる。そして、告げた。

「そんな物語自体の敗北を知らしめてやる」

その言葉を聞いたヒロシは咆（ほ）えた。

「それじゃあ本物の魔王じゃないか！」

ヒロシは左手のワイヤーを阿九斗に巻き付けようとする。阿九斗はそれを身体に触れさせず、マナによって空中に繫ぎ止（と）めることで防いだ。

「それこそ物語に毒されている！」

阿九斗がヒロシを弾（はじ）き飛（と）ばす。

空中で体勢を立て直しながらヒロシが背部のレーザーを撃ち出す。空中でその軌道(きどう)を変えたレーザーはヒロシの背中に生えた光る蜘蛛(くも)の足であるかのように見えた。

「それでもあんたがいるだけで実際に苦しんでいる人がいるんだ！　そして今の神にすがらないと生きていけない子がいるんだ！」

ヒロシの叫(さけ)びと共に時間差で撃ち出されたレーザーは次々と阿九斗に襲(おそ)いかかっていく。

「物語を利用して人々を騙(だま)し、私欲を満たす者がいる！　その犠牲じゃないか！」

阿九斗はレーザー数発を気合いだけで吹き飛ばす。逸(そ)れたレーザーは地上に次々と突き刺(さ)さり、周囲の兵士たちを逃げまどわせる。

「勝手なことを言うな！　あんたはどう責任をとるつもりだ！」

ヒロシは再装填の終了(しゅうりょう)した高温プラズマ球を呼びだした。

「最後にはすべて責任をとる！　神や宗教という物語を終わらせてからだ！」

阿九斗はピーターハウゼンに鉄杭(てっくい)を撃ち出すことを命じた。螺旋(らせん)の刻まれた鉄杭はミサイルのようにヒロシに突き進(すす)んでいく。

「違う！　あんたは今すぐに人を救うことができるはずだ！　なぜあの子の身体から魔獣のマナを取り去ってやらない！　あんたは犬の魔獣からマナを吸い取ったことがある。それがなぜ今できない！」

ヒロシは高温プラズマを鉄杭にぶつけてそれを防がざるを得なくなる。周囲を圧倒する爆発(ばくはつ)が連続して起こり、その衝撃波が周囲を激しく揺らす。

その爆発の間を突き抜けてピーターハウゼンと阿九斗とがヒロシに突進する。
体勢を立て直す隙の与えられなかったヒロシは正面からピーターハウゼンの牙を受け止めることになる。
「僕のことを知っているな?」
阿九斗が最初から答えを期待していない口調で聞いた。
——しまった……。熱くなりすぎた。
ヒロシは悔やむが、それには答えなかった。ばれようとも、ここまで来てしまえばそれでいいのではないか、と思えてきていた。
それよりも危険なのは眼前の顎だった。今は閉じられようとしている上下の牙をかろうじて両手で支えているが、この状態で鉄杭を撃ち出されてはひとたまりもない。
——何か対処法はないのか?
ヒロシがそう念じると、バイザーに仕込まれたコンピューターの声がそれに応える。
《対魔王用戦闘モードに移行しますか?》
——危険はないのか?
《危険はありません。確実に魔王を仕留めることが可能です》
——確実に……。

その言葉にヒロシは冷たいものを感じる。これまでもどこか阿九斗を信頼して戦闘を仕掛けてきたような気がする。だが、確実に、と言われてしまうと今更のように戸惑いが心の奥からわき上がってくる。
しかし、ピーターハウゼンの喉の奥に鉄杭が生み出されたのを見たヒロシは、即座に対応を迫られる。
「くそっ……！　対魔王戦闘モード移行！」
ヒロシが宣言すると、ブレイブのスーツはこれまでに見たこともないような光を放ちはじめた。

○

魔王とブレイブの戦闘中、下にいた兵士たちの混乱は並大抵のものではなかったが、それでも服部忍軍には混乱は微塵もなかった。
しかし、魔獣たちも混乱はしていなかった。結果として、正面玄関前でのみまともな戦闘が行われていたことになる。
魔獣たちは三体が一組となって襲いかかる戦法をとっていたのだが、それでも組織力という点で服部忍軍に劣っていた。互いをカバーする忍者たちの見事な動きについていけず、次々に斬り捨てられていく。
生中継されているゆう子の姿は、その中にあって一際活躍しているかのように視聴者には見えていたに違いない。自らに向かってくる魔獣を忍者刀によって斬り、周囲の忍者たちに向かって指示を出しているように見える。

しかし、実体としてはカメラマンとレポーターが近くにいるゆう子を魔獣の攻撃にさらすわけにはいかず、服部忍軍の面々が周囲を囲んでいるのであった。ゆう子に接近できる魔獣は手負いか、支援を失って孤立したものだけであり、それ故にゆう子にも斬りやすい魔獣であるといえる。

「見えますでしょうか？　星野ゆりちゃんの姿が！　アイドルでありながら魔獣と戦うこの力強い姿！　これが現代の新しい女性の姿なのでしょう。強く、かつ、美しく。誰もが夢見た女神の姿がここにあります！」

それでもレポーターの熱狂は凄まじいもので、興奮した声を振りまき、ゆう子の活躍を伝えている。栄子があてにしていた放送への反響は、圧倒的にゆう子の支援で占められはじめていた。

――こんなことで人気が上がるのは良いことと思えないがな。

絢子はその状況を横目で見つつ、ゆう子に接近しようとする魔獣を斬り捨てていた。

――仲間思いな子だったが、それにしても嬉々として魔獣を狩るような子ではない。やはりマナの悪影響が……。

考えなくてはならないことが絢子には多すぎた。

と……。

「星野ゆりちゃんのお姉さんですね？」

レポーターは絢子にもマイクを向けてきた。

絢子がそれに答えないでいると、レポーターは非難するような眼を絢子に向けてきた。

――思い描（おもいえが）いた通りのストーリーに動いてくれなくては不満というわけか。

絢子は不快な感情にとらわれる。が、折良く、レポーターの背後に魔獣が空から落ちてきた。すでに戦闘能力は失っているようだが、これ幸いと絢子は小刀を突き出した。

レポーターの顔面のすぐ横を銀色の刃（は）が駆け抜けていく。

「ひー!」

レポーターが悲鳴をあげた。その頭のすぐ後ろで魔獣が小刀に突き刺され、生暖かい血を吹（ふ）き出す。

「いかにも姉ですが」

絢子は言い、返り血を避（よ）けるために身体をひねった。魔獣がレポーターの方に倒れ込み、さすがにレポーターは逃げ出した。

――ふん、面倒（めんどう）はなくなったか。



絢子はそう思ったが、その瞬間はしっかりと放送されており、どうやら絢子の人気は一気に跳ね上がっていたらしい。そして、彼女のうかがい知れぬことではあるが、そのことは栄子の指揮に影響を与えていた。

○

「馬鹿な！　そのラバーズとかは何をしている！」
焦ったのは指揮をしていた栄子である。マナスクリーンで映像への反響を見ながら2Vに向かって怒鳴る。
上空では阿九斗とヒロシの人間の力を超えた激しい戦闘が行われ、そのせいで軍は戦闘が行われず死傷者もほとんど出ていないというのに総崩れになっている。唯一戦えている服部忍軍のみが放送の対象になっているから戦況全体の不利さは一般の人々には隠せているが、その代償として絢子の人気までが上がっていくのは我慢できない。
「あの女よりあたいの方が劣っているところなんてないのにさ！　畜生、馬鹿な男はみんな処女ばかり持ち上げて！」
栄子は完全に余計なところにまで文句をつけながら、さらに2Vに迫る。
「だから、ラバーズが何をしてくれるって言うのさ？」

「大丈夫（だいじょうぶ）、すぐになんとかしてくれますって」
２Ｖが面倒くさそうに言ったとき、マナスクリーンに映し出されていた戦闘風景の中を不気味な影（かげ）が一瞬だけ横切った。２Ｖは口笛を吹く。
「来ましたぜ」

○

絢子はここまでは順当に事態が進んでいることを確認し、これ以降の行動指示を栄子に仰（あお）いでいいものか迷った。このまま行けば正面玄関の突入（とつにゅう）口は確保できる見通しだ。だが素直に相手の策に乗ってやることもない。
それに……。
——このまま行くと、私は紗伊（さい）と先輩とを敵に回さないといけなくなる。
まだ絢子は迷っていた。もはや自分の決断力の無さも嫌（いや）になる。いや、本心はもう決まっているのかもしれない。ただ体面や家督（かとく）のことを考えて動けずにいるだけなのだ。
——結局のところ、私が臆病（おくびょう）なのではないか。
それを変えられればどうにかなるとも思えないが、と知りつつも絢子は悔やむ。
——変えられるだけの力が欲（ほ）しい。

武力のことではなく権力についてそう思ったのははじめてだった。これまで他人の世話を焼くことが多く、修行も勉強も苦にならない性格だったが故に、自分の欲するところのために力を使うという感覚は理解できていなかった。今ならば少しは理解できる。

魔獣の襲撃の波が収まったところで『ソハヤノツルギ』の柄にもう一度手をかけてみる。力を入れてみたがやはり抜けなかった。

――神に選ばれなければ抜けない……。だが、お祖母様は、そんなもの神の都合に合わせればいいだけだと……。すると、この場合の神の意志とは何だ？

絢子がそんなことを考えていたとき、視界の端で魔獣が動いた。

――やはり落ち着かせてはくれないか。

絢子は小刀に持ち替えて、そちらに前進した。人間に似ているが、四本足で動く手足の長い魔獣である。

――いや……。こいつは……！

絢子は嫌な予感に足を止めた。他の魔獣と違い、連係行動をとっていない。さらに、他のどの魔獣にも似ていない。

予感は当たった。そいつは手を鞭のように振り回した。振られたその腕は、かなりの距離を飛び、素早く飛び退いた絢子の胴体が先程まであった空間を薙いでいる。

「魔獣……じゃないように思えるが」

絢子はつぶやく。
そいつの皮膚はゴムのようにぬらぬらと光っていた。頭にも頭髪にあたる部分はなくテラテラと輝いている。全身にタイツをまとった人間のようにも見えるし、新種の生物のようにも見えるが、人間にしては手が長すぎ、関節も人間とは逆側に曲がるような部分があるようだ。だが、そいつから感じる気配は確かに魔獣のそれではない。
――だとしたら、どうしてこちらを攻撃してくる？
絢子はいぶかしむが、それを確認する余裕はなかった。そいつは絢子を手強い相手と見たのか、跳ね上がって絢子の後方に飛ぶと、服部忍軍を襲いはじめたのである。
「気をつけろ！」
絢子は叫び、忍者たちもその絢子の警告と敵の襲来に気づいてはいたが、それでも一瞬にして数人が彼に吹き飛ばされる。
――まさか！
絢子は驚愕する。絢子の目は彼らが吹き飛ばされた原因をはっきりととらえていた。忍者の誰もが、その一撃を刀で防ごうとしていたのである。だが、ゴムのような腕はしなやかさと強靭さを兼ね備えていたらしい。信じがたいことに腕は刀の刃に切断されることなく、まるで柔らかさのある金属棒という矛盾した存在のようだった。刀に接している部分は曲がりはしたものの、むしろ反発する張力をもって刀を握った忍者そのものを吹き飛ばしていた。

「腕は避けろ！」
　即座に服部忍軍たちは反応した。口々にそう叫びながら、謎の生物に斬りかかっていく。幾人かは不規則な動きに翻弄されてたたき落とされたが、五人がそいつの下にたどり着いていた。彼らは一斉に刀でそいつを突き刺した。
　しかし、その全員が驚愕に目を見開くことになる。刃は確かに身体を貫通した……ように見えた。しかし、実際には棒でゴム板を突き刺したようなものだった。身体は柔らかく伸び、刀は身体を突き抜けてはいるものの、決してその皮膚を切り裂いてはいなかった。
「ぐぅ！」
「なんと！」
　服部忍軍は驚きの声をあげた。ゴムが戻るようにそいつの身体も戻り、その弾力は刀を宙に跳ね上げ、刀を強く握っていた者を吹き飛ばした。
「下がれ、熱によるものなら……！」
　服部忍軍の一人が言い、魔術を使うことを決断した。彼の生み出した火球がゴムの怪物に襲いかかる。だが、その火球は到達する前にゴムの怪物が口から吹き出した火炎によりかき消されてしまう。
　魔術戦闘い熟練した者たちが最終的に肉弾戦を行うしかなくなる理由のひとつがこれである。マナを媒介としてダメージを与える以上、同じようにマナを使用すれば効果は相殺できるのである。だが、もちろんそんなことができるのは魔獣でなく人間だ。

——強い……。だが、人間ならどうして我々を襲う？

絢子はその疑念を強くしながら服部忍軍に撤退（てったい）を命じた。

と、服部家の面々が占めていた空間に、絶妙（ぜつみょう）なタイミングで鎧（よろい）武者たちが前進してきた。照屋家の軍勢である。

「馬鹿っ！　出てくるな……！　そいつは危険だ！　下がれ！」

絢子は叫んだ。

それを鎧武者たちは完全に無視した。整然と列を作って前進していく。

「待て……！」

絢子は再度叫（さけ）んだが、そのとき、驚いたことにゴムの怪物はするりと校舎内に姿を消した。服部忍軍が魔獣たちを倒していたおかげで正面玄関（げんかん）は開放されていたのだが、まさかそのような者が最初に門をくぐるとは誰も考えていなかっただろう。

「照屋家の軍勢に最強の魔獣も怯（おび）えて撤退しました！」

ゆう子に張りついていたレポーターがそう叫んでいた。

確かに直接にゴムの怪物と戦った者でなければそう見えるだろう。

——しかし、戦い方を見た限り、いかなる敵が来ようと下がるような奴ではない……。ということは、あいつは……。いや、まさかとは思うが……。

絢子はいぶかしんだ。

○

「あれがラバーズ……恋人でなく、まさかゴムという意味とはね！」

戦況をマナスクリーンで見守っていた栄子はほくそ笑んだ。どうやらラバーズのおかげで服部家が成果を挙げすぎることだけは防げたようである。

「あれが最後にはあたいに直接やられてくれる芝居をしてくれると嬉しいけどね」

栄子が冗談を言うと、2Vはそれに真面目な答えを返してくる。

「ふむ……。大丈夫だと思いますよ。あれはマゾだから、喜んで殴られてくれるんじゃないっすかね？」

「あれで人間なのかい？」

「マゾヒズムが高じて自らを肉体変異の実験台にした奴でしてね。もう人間には見えない身体になりました。とはいえ魔術戦ではあいつは強い。さて、これで予定通り……」

2Vがそう言ったとき、2Vにも予測できなかった事態が起こった。

照屋家の鎧武者たちは即座に校舎に入り込もうとしていたのだが、その前進がいきなり止まった。と、次の瞬間、列を作っていた照屋家の鎧武者の先頭の一人がいきなり後方に飛ばされたのである。吹き飛ばされた彼がまるでボウリングのピンのように後続をなぎ倒してしまう。

「何だ？」

栄子もこれには驚いた。マナスクリーンを覗(のぞ)き込む。

照屋家の鎧武者たちを吹き飛ばしてできた空間に、ゆらりと姿を現したのは、なんと生徒会長であるリリィ白石(しらいし)だった。

「生徒会の許可無く校内に入るなよ」

リリィはその右手首をコキコキと音を立てて回転させていた。

この事態に逆上したのは栄子である。

「畜生！　ふざけるんじゃないよ！　やってしまっていいさ！」

栄子は自らの家の部下たちに指示を出(だ)すが、その指示よりも早くリリィは何人かを伸びる手で吹き飛ばしている。ラバーズのそれには劣るが、それでも充分(じゅうぶん)な攻撃力(こうげきりょく)だ。

「ふがいない！　他の部隊を……」

苛立(いらだ)ちながら栄子は、ここでようやく戦局を確認(かくにん)する。

そして、愕然(がくぜん)とした。校内に突入できればほぼ勝利と目していたため、他の部隊にはほとんど指示を出していない。そのため地上部隊はほとんど無傷であるにもかかわらず、阿九斗とヒロシの戦闘を避けるための混乱で機能しなくなっていた。ほぼ千人の歩兵たちは小隊ごとに固まって指示を待っているどころか、互(たが)いの位置さえ把握(はあく)できずにいる状態なのである。

しかも、相変わらず阿九斗とヒロシの空中戦は続いている。そのすさまじさは確実に歩兵たちのモラルを低下させていた。明らかに人間の限界を超えた戦闘がすぐ上で行われていて、それでも目の前の魔獣

と戦えるのは、服部家か照屋家の精鋭くらいのものである。
　そして魔獣たちは服部家の攻撃で一度は退いたものの、再び正面玄関に戦力を集めはじめている。校舎のその他の位置においては、魔獣たちはほぼ無傷である。
「ま、負ける……というのか？」
　栄子は今になってその可能性に気づき、恐怖に顔面を蒼白にした。
　ここで負けてしまっては、帝国全土に無能をさらすことになってしまう。それだけならまだしも、父殺しも明かされてしまうだろう。そうなれば自分は身の破滅だ。
「こ、こうなったら全軍攻撃の指示を出すこともあり得るか……」
　栄子はつぶやく。
「いや、まだ手はありますって」
　慌てたのは2Vである。栄子はその戦力のほとんどを温存している。混乱しているだけなのだから、適切な指示が出せれば、再編成が行え、いくらでも挽回のチャンスはあるのだ。まして、空母とその中に控える精鋭の空挺は混乱すらしていない。恐怖に負けて冷静な判断ができなくなっているだけなのだ。
　――ここまで無能だと利用するのも難しいな。ここは多少無茶でも共倒れをしていただくしかないか。
　2Vは頭の中で作戦を変更する。
「地上の軍を下がらせ、空母による攻撃を行いましょう。周囲に被害が出るので控えようと言っていましたが、ここまでくればもう校舎が壊れたところで文句はないでしょう。魔王たちの方が周囲を破壊してい

るように見えるってなもんですからね」

２Ｖの言葉を栄子は頼もしく思ったらしい。

「そ、そうか……そうだね！」

そして栄子は空母に前進の指示を出す。

――ふぅ、やれやれ。

密かに２Ｖはほくそ笑んだ。そして精神を集中させた。

すると彼が以前から仕込んでいた仕掛けが発動した。各部隊に配属されていた何の変哲もない兵士が、それぞれ２Ｖの意志に従って動きはじめたのである。あらかじめ各部隊に人間と偽って混じっていた人造人間であった。自律型のものでなく、２Ｖの魔術が介在しなければ自らの意志のない人形である。総数で五十ほどが紛れ込んでいた。

２Ｖの人造人間はもちろん空母のブリッジにも潜入していた。

「前進。校舎に接近し、壁面の魔獣を掃討する」

そう栄子の命令を告げた艦長にうなずくと、何食わぬ顔で空母の操舵輪を握ったのは２Ｖの人形であった。

――さて、うまくやろうじゃないの。

○

「とてもまずいことになりましたわね」
　不二子が地下の祭壇前で考えこんだ。
「どうしたの？」
　けーなが聞く。
「動き出しましたわ。空母『玄鶴』が」
　不二子がいくつものマナスクリーンを操作し、『玄鶴』の様子を様々な角度から映し出す。校庭からは少し離れた位置にいた空母は、ゆっくりと校庭の方に動き出していた。
「それが来るとまずいの？　来たときにどうするかは考えていたんでしょ？」
　けーなが聞く。無邪気なだけに不二子としても腹が立つところである。
「考えてはいましたわよ！　でも、それは最後の手段……校舎の本当の自爆、ですわ」
「校舎をどーんとやっちゃうの？」
「地下の浅いところを魔獣たちで壊せば、校舎は沈みますでしょ？　空母の攻撃はそれ以上は不可能。ただし、それをやるときは、こちらも負けるとき。逃げ出すときにやることですわね」
「それじゃあ、最初から空母が動いたら負けなんじゃないの？」
「いちいち痛いところを突く人ですわね！　その通り。でも、こちらの読みでは空母は阿九斗様を追うはずでしたの。ただ阿九斗様がブレイブとかいうちんぴらにからまれて動けないことが誤算でしたわ」

　不二子は悔やむ。そして別のマナスクリーンに眼を向けた。

「それに、潜入してきたあのゴム人間も校内にいるはずなのに見失なったのも痛いですわ」

「そうなの？　どうして見失ったの？」

「わかれば苦労しませんわよ！　どこに消えたのやら……。鼻がきく魔獣にも捜させていますし、わたくしたちにとって致命的なことにならなければいいのですけれど……。ああ、もう、阿九斗様さえブレイブを片づけてくだされば！」

　もしゃもしゃと頭をかきまわし、不二子はわめく。

「だから喧嘩はダメなんだよ。ぼんって……ぼんって……」

　そこまでは普通に話していたけーなだが、不意にそこで黙り込む。

「どうしましたの？」

　不二子はちらりとけーなを振り返る。けーなの様子にはそれほど変わったところはなかったが、どこか夢見るような表情をしている。

「なんでもありません、先輩。ねぇ、こういう世界のありようについてどう思われます？」

「はぁ？」

　不二子は驚いて振り向く。

「争いがなくなる世界を目指している人々が互いに争う。そういう寂しさについてです」

　けーなは聞いた。

不二子はけーなの様子を不審（ふしん）には思うが、危険はなさそうだし答えないのも納まりが悪いと作業を続けつつも答える。

「争ってるんだから寂しくないでしょうに。虐殺（ぎゃくさつ）と戦争なら戦争を歓迎（かんげい）しないといけませんわ。戦争がない世界は誰でも虐殺が行える世界ですもの」

不二子はそう言ったが、それには答えはなかった。

「それじゃぼんってなっちゃうよ」

けーなは言った。いつものけーなに戻（もど）っていた。

「……あなた、それ最近覚えた芸か何かですの？」

「え？　なんのこと？」

けーなは首をかしげた。

○

――これが対魔王（まおう）戦モードだって？

ヒロシは自らに変化のないことに戸惑（とまど）いを覚えた。出力も武器やエネルギーの転送速度もあがったわけではない。

しかし、ピーターハウゼンの爪を受け止める手に負担がかからないこと、こちらからの攻撃の威力が増していることに気づく。

――どういうことだ？

ヒロシは自らの一撃のその効果に驚く。それは段々と威力を増し、ついにはピーターハウゼンを吹き飛ばせるまでになっていた。

「マナが打ち消されている」

阿九斗がピーターハウゼンに言った。

「ああ、これがそうなのか。体内のマナにはそれほど干渉されずに済んでいるが、外に力がうまく伝達しなくなっている」

ピーターハウゼンがうめいた。

「距離をとろう」

その阿九斗の提案にピーターハウゼンは首を振った。

「いや。向こうの方が速い。背を向けるわけにはいかん」

「……なんとかする手段を考えよう」

阿九斗が言った。と、視界にゆっくりと割り込んでくる空母の姿があった。

「まいったな。あれが動きはじめてしまった」

「しかも校舎の方を狙っているのか。なりふり構っていられなくなったか」

　ピーターハウゼンもそれを見た。

　下方では歩兵たちが、空母『玄鶴』の姿に安心したのか、再編成を開始し、陣形(じんけい)を組み直していた。阿九斗たちはうかがい知らぬことだが、そのモラルの回復には2Vが紛れ込ませた人形たちの活躍があった。

「ふたつの敵を相手にしなくちゃならないのか？」

　阿九斗がつぶやくと、ピーターハウゼンはにやりとした。

「その通りだ。だが、それは悪いことばかりじゃないぞ」

「敵が強くて喜ばしいって？」

「いや、そればかりではない。過去の経験からすると、あのような大型兵器はその内部にマナ生成機を持っている。武装によりマナを消費してしまうことに備えてだ」

「なるほど。危険はあるが、接近して戦うべきか」

　阿九斗は空母に向けてピーターハウゼンを飛ばす。

『玄鶴』は空母とは言うが、その巨体(きょたい)に収めているのは空挺部隊(くうていぶたい)である。ただ、その空挺一人一人の装備品が降下に特化したものでなく、空中戦から爆撃(ばくげき)までをこなす飛行型強化服であるというだけだ。背中に飛行機を背負(せお)ったようにも見える彼(かれ)らの姿は、特に帝国以外の国では恐(おそ)れられていた。動力とマナを同時に胎内(たいない)に備えた空母は、マナの散布が行われていない地域に出撃(しゅつげき)することも可能であり、旧時代の内燃機関を使用する敵を制圧することができたからだ。

空挺一人一人は場合によっては砲台としても機能した。甲板に長距離砲を装備した空挺兵士が並び、彼らの判断と魔術の才能により正確な長距離射撃を行うのである。

背中の長距離砲を発射可能状態にした空挺が甲板にずらりと並んでいる。彼らは阿九斗の姿を認めると、攻撃態勢に入った。

「目標は魔王、及び魔獣。射撃目標は命あるまで各自の判断でよし。コンスタン魔術学院校舎、周辺地域への被害は常識の範囲内にとどめよ。通名ブレイブについては攻撃目標とせず。ただしこれについては誤射を恐れてはならない」

指揮官からの指示はそのようなものだった。空挺たちはさして緊張した様子もなく、長距離砲を構えて命令を待った。

「攻撃開始」

空母の甲板に居並んだ空挺たちが一斉に光の矢を放ってきた。

ピーターハウゼンは横に降ってきた豪雨のようなそれを見事な軌道でかわしながら空母に接近していく。

追ってくるヒロシは最初こそ攻撃をかわしていたが、やがて自らの周囲では光る粒子そのものが消失してしまうことに気づいたのか、直撃コースのもの以外は大きくはかわさぬようになっている。

「こちらも力は戻ったが、不利には変わりないな」

ピーターハウゼンが笑う。

「そこから先は考えていなかったわけか」
　阿九斗が呆(あき)れたような声をあげる。
「何か問題があるかね？」
　ピーターハウゼンは平然とそう告げる。
「わかったよ。ないね。さて、とはいえここが考えどころだ」
　阿九斗が応じた。
　そのとき空母から空挺の何人かが飛び立った。槍(やり)状の装備を手にしている。黒龍(こくりゅう)を相手にするにはふさわしい武器だろう。
「考える必要がなくなったぞ」
「嬉しそうに言ってくれるな」
　阿九斗がぼやく。
「喜びは素直(すなお)に表現するものだ！」
　ピーターハウゼンは歓喜(かんき)の叫び声(ごえ)とともに、五人の空挺の間に躍(おど)り込んだ。空挺は必死だったろうが、ピーターハウゼンは子犬たちとじゃれるようにくるくると回り、急に突進(とっしん)し、停止し、激しい一撃を放った。
　阿九斗も自身が狙われるので槍を手で払(はら)い、握り曲げ、火球を投げ返した。
「こいつらは精鋭のようだぞ！」

ピーターハウゼンは子供のように喜ぶ。

「楽しそうで何よりだ」

阿九斗は肩をすくめる。

しかし、ピーターハウゼンにとって心地よい戦闘はそこまでだった。その直後、割り込んできた影がある。

言うまでもなくヒロシだった。

「邪魔だ!」

阿九斗にまとわりついていた空挺の一人に一撃を加える。攻撃というわけではなく、押しのけただけだが、彼は大きく吹き飛んで失速、きりもみ状態で下方へと落ちていった。

ヒロシには阿九斗しか目に入っていない。

「やはり敵はこいつだけか」

ピーターハウゼンがうめく。

「決着をつけなくちゃならないらしいね」

阿九斗は声に決意を込めて言った。

慌てたのは空母のブリッジである。

「ああまで翻弄されるとは、どうなっているんだ?」

艦長の声には狼狽よりも恐怖の感情があった。戦況を把握するための情報が映し出されているスクリーンにはいくつもの光点がある。これは味方の識別信号だが、この光点が示しているステータスが次々と

戦闘不能へと変化しているのである。実際の映像が映されているスクリーンを見ても、空挺たちの不利は明らかだ。
「この作戦で実戦経験があるのは我々だけだぞ！　そのようなことでどうする！」
艦長は声をあげたが、誰もそれには答えられなかった。指揮官たる彼も八つ当たりをしているわけではない。現に戦術的には間違ったことはしていない。単純に相手が厄介すぎたのだ。個々の兵士が努力しなければならないという意味ではその通りだ。
何より厄介なのはヒロシだった。彼は積極的に軍を攻撃しようとはしていないが、接近されるとマナを失った空挺たちは一瞬だが行動不能に陥る。まともに戦うことができない。
もちろん阿九斗も最悪の敵だった。ピーターハウゼンは平然と空挺たちを盾にした。阿九斗も控えめではあるものの、空挺から武器を奪い、空母の甲板を攻撃を避けるための壁として利用するようピーターハウゼンを誘導していた。
「好きにさせるな！　国民に対する国の威信が揺らぐ！」
艦長が咆えるが、沈黙は変わらない。いや、ただ一人だけがそれに答えた。
「なんとかしましょうか、艦長？」
不遜な口調であった。艦長もこれには顔色を変える。
「誰だ、今の発言は！」
軽く手をあげたのは操舵輪を握る兵士だった。

「操舵士です。自分へのフリーハンドを求めるっす」

　軍人とも思えぬ口調にブリッジの誰もがぎょっとする。改めて全員が操舵士を見た。そしてあり得ないことに気づく。彼のことを知らないのだ。どうして気づかなかったというのか。

「誰だ、貴様！」

「だから、操舵士です。今は」

　２Ｖは言った。

「ふざけるな！　催眠系の魔術で潜り込んだか！」

　艦長が叫ぶ。同時に副操舵士に手で「やれ」と命じた。

うなずいた副操舵士は、即座に操舵士に魔術による爆発を打ち込む。爆発は見事に操舵士の頭部をとらえた。炎が一瞬だけ巻き起こり、控えめな爆煙が流れた。ブリッジを傷つけることなく対象を殺害する見事に制御された爆発だった。

　操舵士は首から上を失っていた。副操舵士はコントロールを自分の方に戻そうとコンソールに手をかけた。が、メインコントロールは移行できなかった。

「な！」

　眼を操舵士に戻すと、そこには薄気味の悪い光景があった。首のない操舵士が以前と変わらず操舵輪を握っているのである。

「に、人形！」

血の流れていないことに副操舵士は気づいた。
「そういうこと。気づいた時には遅い」
首なし操舵士は、どこからか声を出した。ブリッジの面々は椅子を蹴って彼を止めようとするが、その瞬間に空母が大きく揺れた。
そこで艦長以下、ブリッジの全員が2Vが何をしようとしているかに気づいた。空母は巨大とはいえ、その高出力のエンジンは空中で軽飛行機のごとき機動性を確保するに十分だった。問題となる空気抵抗も空気そのものをマナで制御することにより軽減できる。
空母は乗員の安全を何も考えぬ機動を行った。全長三百五十メートル強の巨大な船体が航空機で言うインメルマンターンをかける。急上昇から横に船体を回転させたのだ。そして、一転して降下に移行する。
身体を固定していなかった中の者や、予測していなかった甲板の空挺たちは翻弄されて船体に身体をぶつける。
しかし『玄鶴』は速度をゆるめなかった。そして、その目標はすぐに明らかになる。
――どうしてこんなことに!
ヒロシは苛立つ。阿九斗との戦いは自分でもどうしていいかわからない苛立ちが爆発して起こったもののような気がする。

結局のところ、阿九斗を信じていたからこそその苛立ちということは自分でもわかっていた。それだからこそ、阿九斗の行動が我慢ならない。

「うぉおお！」

ヒロシは再度斬り込む。マナが空母により生成されていることに気づいてはいたが、それでも互角に戦える。そして、空母が離れた場所ではこちらが圧倒的に有利だ。今の一撃も激しい衝撃をピーターハウゼンに与えていた。相手が吹き飛ぶ距離が明らかに長い。

——無力化すればいい！　黒龍だけでも倒せれば！

ヒロシはチャンスとばかりに一気に加速する。上空から降ってくる空挺たちをかわしながら突進。阿九斗に迫る。視界にはっきりと阿九斗の表情をとらえる。

「はぁあ！」

しかし、阿九斗に集中していたせいで、状況の判断がヒロシには十分にできていなかった。なぜいきなり空母が離れたのか。そして、なぜ上空から空挺が降ってくるのか。そこを認識していたとはいえなかった。

高温プラズマ球を展開して突っ込むヒロシだが、その瞬間の阿九斗の表情に戸惑う。

阿九斗は明らかにヒロシとは別の方向を見ており、続いてヒロシに眼を移したとき、彼の顔には優しげな表情が浮かんでいた。

——な、なんでそんな顔を……。

戸惑うヒロシに、阿九斗は空挺から奪っていた槍を打ち込んできた。高温プラズマ球を狙ってのものだ。

「！」

身体を狙ってのものなら避けられはしたが、高温プラズマ球を狙われては避けるのが難しい。プラズマは解放され、槍を巻き込んで爆発する。マナキャンセラーもこれには役に立たない。ヒロシは後方に吹き飛ばされる。

——あの表情、だまし討ちか！　この程度、体勢はすぐに立て直せる！

ヒロシは阿九斗から眼を離さぬようにしつつ身体をめぐらせるが、いきなり視界が灰色に染まったことに驚く。

——なんだ！

その一瞬後、ようやく認識が追いついてきた。

灰色に染まったと見えたのは『玄鶴』の船体だった。まさに目の前を巨大空母の船首が通り過ぎたのだ。

それはあり得ない速度だった。自分の高速移動と同じ程度の速度で空母が横切ったのだ。

しかし、ヒロシは見ていた。阿九斗とピーターハウゼンがその船首に衝突したのを。

——まさか……。そんな馬鹿な……。

ヒロシはバイザーに映像を映し出すようスーツ内蔵のコンピュータに指示する。映像はすぐさま数秒前の光景をプレイバックした。

高速で落下してくる球状船首に、阿九斗とピーターハウゼンが確かに衝突していた。横合いからピーターハウゼンに直撃し、『玄鶴』はそのまま地上へと降下していく。
「ああ！　アニキ！」
　ヒロシは驚きと後悔の入り混じったような声をつい漏らしていた。
『玄鶴』は速度を落とさずに降下すると、地上すれすれで水平飛行に移行し、あろうことかそのまま校舎に突っ込んだのである。
　衝撃音と煙が周囲に拡がる。船首は完全に校舎の真ん中にめり込んでいた。煙とともに校舎の周囲に飛び散っているのは魔獣たちの死体だろう。地上にも逃げ遅れた兵士は何人かはいるかもしれない。
　――つ、潰された……？
　まさか、とヒロシは校舎に向かって降下する。煙を突き抜けて甲板伝いに船首へと移動すると、校舎の壁に巨大な穴が開いていた。壁の一部が瓦礫と化して甲板に散らばっていたが、穴から校舎の中に入ると、その様子はさらにひどいものだった。球状船首のほとんどは瓦礫に埋もれており、その下に何があるのかまるでわからない状態だ。
「ま、まさか……」
　狼狽の声をあげて校舎内に降りる。
　と、晴れはじめた土煙の中から人の気配がしてヒロシは身構えた。
校舎の崩れた壁と床の境界、まだ校舎が原形をとどめている廊下の際に長身の男の姿が見えた。

――だ、誰だ……。
その男のただならぬ気配にヒロシは戸惑う。
「いや、これは幸運だった……。私の不運な人生において、唯一の幸運かもしれない」
男――望一郎は声をあげて笑った。
彼の足下には、瓦礫に巻き込まれた学長の姿がある。息はあるようだが、ひどい怪我をしている様子だ。
「き、貴様!」
ヒロシは裏返った声をあげた。
と、望一郎は持っていた剣を収め、待て、と手を振る。
「待ってくれ、対魔王戦の勇者よ。スーツを手に入れたということは、三輪家の方だと思うが」
「そ、それじゃあ、あんたが……」
ヒロシは息をのんだ。
「あんたがこのスーツを残した人だってのか……!」
目の前の男の特徴が父から聞いていた人物のそれと合致することにヒロシは絶句した。
「はじめまして、かな。大和望一郎だ」
望一郎は満足げな声で言った。

3　阿九斗（あくと）と飛行空母

「な、名前はいい。あんたは何者なんだ？　そして、何をしている」

ヒロシはうろたえて聞いたが、返事を待っている暇（ひま）はなかった。学長を放っておくわけにはいかない。望一郎（ぼういちろう）の方を警戒（けいかい）しつつ、瓦礫を掘（ほ）り起（お）こして助け起こす。

学長には意識があった。だが、助けられた感謝よりも、まずは望一郎のことを気にしていた。

「あ、あいつを止めるんじゃ……」

そう言った学長の身体は今はしぼんでいた。完全に枯（か）れた老人の姿に戻っている。さらには額から血がしたたっていた。

「しかし、身体が……」

「わしは大丈夫（だいじょうぶ）。ちと体内のマナを使い切っただけじゃ。突っ込んできたデカブツの軌道（きどう）を変えんと潰されておったからな」

学長はヒロシの肩を借りて立ち上がると、ふらつく足で前に出ようとした。

「無茶です！」

ヒロシはそれをかばって学長の前に出た。高周波ブレードを構える。

「落ち着きたまえ」

が、望一郎がぱちりと指を鳴らすと、いきなりヒロシのスーツが消失した。再び異次元空間に転送されてしまったらしい。生身のヒロシが露わになる。

「うわ！」

ヒロシは驚いて自らの身体を確認した。そして慌てて腕につけたユニットに叫ぶ。

「ブレイブ！」

しかし、何も起こらなかった。ヒロシは顔を起こして望一郎を見る。

「ま、まさか……」

「まさか、じゃあないな。私が残した装備だと言っただろう」

「すると、あんたは……」

「私は未来から来た」

冗談のような言葉だったが、ヒロシにはそれが事実であることが確信できた。

「そうじゃ。そいつは未来から来た。そして、神を支配下におこうとしておる」

学長が言い、ヒロシを押しのけて前に出た。

「そんな……」

驚くヒロシを学長は振り返った。

「君はうちの学生じゃったか。それなら、下がっていなさい。学生をこれ以上傷つけるわけにはいかない」

無理をして笑う学長に、望一郎は冷たく首を振った。

「もう私の攻撃(こうげき)を防ぐ力は残っていないでしょう？　私も目的があってやっていること。退けば殺しはしません」
「そういうわけにもいかんね。わしにも意地のようなものはある」
「しかし、あなたのような老人は固有のマナに乏(とぼ)しい。外部から蓄積(ちくせき)したマナを使ってしまえば次の蓄積までは時間がかかる。あの私のホジスン式完全切断をかわした手品の秘密はわからないが、マナがなければ使えないことは確かだ」
　望一郎は再び剣を抜いて構えた。
「次元切断は峰打(みねう)ちにはできないんですよ」
　再度警告した望一郎に、学長はあざけるように言った。
「知っておるわい。じゃが学生が見ている前で恥(はじ)はかけん」
「本当に殺したくないというのに、あなたは本当に分からず屋だ」
　望一郎が剣を振り上(あ)げた瞬間、ヒロシが学長の前に躍り出(で)た。
「待て！　学長を傷つけるな！」
　ヒロシは生身である。だが、ブレイブに変身している時と同じ、はっきりとした口調でヒロシは叫んでいた。戦いの構えをとったが、これもブレイブがとっていたものと同じだ。
「スーツがなければ無理だ」
　望一郎があざけるでもなく、ただ淡々(たんたん)と事実を言った。

　が、ヒロシはひるまない。
「知っている。だが、俺が必要なはずだ」
「ん？」
　望一郎が驚きに眉をあげる。
「スーツは俺にしか使えない。対魔王用のスーツをわざわざ開発して俺に与えたということは、あんた一人では実は魔王を倒せないということだ。そして、あんたはまだ魔王が生きていると恐れている」
　ヒロシの言葉に、「ほう」と望一郎は息を吐いた。
「それは、私に協力してくれるという意味かい？」
「……わからない」
　正直にヒロシは答えた。阿九斗が生きているというのも希望的観測にすぎたが、それでも今はこう言うしかなかった。そう口にすると、自分が阿九斗を殺したかもしれないという思いがようやく実感としてわき上がってきたが、まだ戦闘が終わったわけではない。ここは悲嘆に暮れて泣き崩れるというわけにはいかなかった。
「だけど……。あんたが誰で何を目指しているか知らないが、俺には力が必要なんだ。だから……俺はあんたが何をしようとしているか話を聞かなくちゃいけない」
　ヒロシの頭の中にはゆう子のことがあった。彼女を守るためには力が必要だ。
　望一郎に歩み寄るヒロシに、学長が声をあげる。

「待て……！」
だが、ヒロシが振り返ると、学長は思い直したように首を振った。
「いや……。判断は若者に任せるべきなのかもしれんな。君のいいようにしたまえ」
それだけ言うと、学長はあきらめたように座り込んだ。
ヒロシは苦悶するように顔をゆがめたが、意を決したように首を振る。
「さぁ、神を支配下におくことと、神を殺すこと、どちらが正しいのか教えてくれ」
ヒロシは望一郎について歩きはじめた。
「……まぁ、老人にできることはここまでだったかもしれん」
残された学長は、そうつぶやくと細い手で足下の瓦礫をどけはじめた。
「さて……わしの最後のマナで助けられたとは思うが……。空母をぶつけられた人間というのは、どんな顔になっているんじゃろうかね……」

○

「信じてもらえるかどうかわからないが、事実、未来の人類は滅びてしまっている……」
望一郎は地下へと向かいながら、ヒロシに語りはじめた。
「滅びている……？」

「もちろん魔王が人類を滅ぼしたのだ。神を殺したことでね」
「その神を殺すというのは、どういう意味で言っている言葉なんだ？」
「説明をすると難しくなるが、神には意志はあるが、彼らは身体を持っていない」
　そこまではヒロシにも納得できた。
「だから、彼らは身体を中心にした思考を持てない。考えている主体が存在しないのに考えているという矛盾した存在だ。確かにコンピュータの回路としての主体はある。だが、どれほどの回路が積み重なれば思考が生まれるのかは誰も知らない。だが、ある程度の数の回路が集まれば、意志が生まれるのだ。人間の脳のどこに意志があるのかわからないのと同じ事だと考えて欲しい。そして、身体性のない思考は外界という区分を持たぬ故に無限大についての思考を可能にする。数列のような無限ではないよ。無限に濃度の濃い無限についてだ。そして、それは生物にとっての無限過去にたどり着けることも意味する。肉体を持たぬ神は単細胞生物の思考にまでたどり着けるのだ。それは生命の誕生、思考の誕生と同じことだ。そして思考そのものが宇宙を作る。観測論的宇宙のことでないよ。この世界が五分前に生まれたとして、偽の記憶を持たされている限りそれを証明する手段はない、という論があるが、その説も肉体あってのことだ。主体がない思考はその論を無効にしてしまう。つまり宇宙は実在し、時間は絶対的不可逆性をもって流れている」
　ヒロシには望一郎の言っていることの大半が理解できなかった。
「つまり、どういうことなんだ？」

「神は別の宇宙に生命として誕生するために、死にたがっている」
望一郎は核心に触れた。
これにはヒロシも感覚的に納得できた。
「じゃあ、魔王というのは……」
「恐らくは神が巧妙に人々を操って作り出す破壊装置だ。同時に自同律という存在も生まれる。それが魔王と単一者の契約を交わすことで別の宇宙に再生するための依代になる」
「そうなってしまったら、どうなるんだ……？」
ヒロシは息をのむ。
「人間のすべてが死ぬ。いや、死ではないが、終わってしまう。神は人をデータとしてしか見ていない。だから肉体は神の得る肉体ただひとつでいいわけだ。次の宇宙で単細胞生物からはじめるという意味でもあるがね。そうすることで外界からやってくる本当の意味での神に滅ぼされないようにするのだ、という意見もあったが、それは確認できない。それに、仮にそうだったとしても、神を支配下においておけば、解決できる問題ではないか。私たちは人間としての幸福を守るべきだ。愛し合い、子を産み、育てる。それを至上のものとすべきだ」
望一郎は落ち着いた声で告げた。
「なんてこった……」
ヒロシは絶句する。

「時間を越え、異次元に触れることができるのも、外宇宙の存在があればこそだが、それも自同律の存在によって可能になるものだ。私が自同律と契約すれば、神を支配下における。それが悪しき目的でないのはわかってもらえただろう?」

望一郎の問いかけに、ヒロシは身体を震わせる。

――魔王が……アニキが神に仕組まれて生まれた存在だというなら、あまりに悲しすぎるじゃないか。生きていて欲しい……生きていて欲しいけど……。死んだ方が人間のためになったっていうのか?

諦めとも哀れみともつかない奇妙な感情がわいてきて、気がつくとヒロシは望一郎にこう告げていた。

「あんたに協力するよ。ただ、もし……もし魔王が生きていたら、俺に任せて欲しい。彼を生かしておくという選択をしても、手を出させなければいいんだろう?」

「そうしてもらえるとありがたい」

望一郎はうなずいた。

○

「これは……負けましたわね」

不二子は悲嘆に首をうなだれていた。阿九斗を失っては、もはや何の意味もない戦いである。

「大丈夫だよ。あーちゃん生きてるよ」

だが、けーなは平然としていた。

「え？」

不二子は顔をあげた。

「だって、あーちゃんの気配とか、あの感じとか、わかるもん」

それが普通のことのようにけーなはうなずいている。

「ほ、本当ですの？」

不二子はその不確かな情報にすがっていいものかどうか迷う。そうすることで後の落胆（らくたん）がひどくなりそうな気がしたのだ。

しかし、けーなは自信ありげというより、もはや大地の上に立っているという確信と同程度に阿九斗の生存を信じている様子だった。

「ホントだよ」

「そうね……わかりましたわ」

不二子は負けるのなら最後まで抵抗しようと腹を決める。

「でも、戦況は最悪……。今は空母の衝突という出来事で敵もうろたえて行動できずにいますけれど、魔獣を大量に失ったのも事実……。すぐに奴（やつ）ら乗り込んできますわ。それに、学長も突破（とっぱ）されてしまいましたし……」

手駒はほとんどない。そして望一郎がこちらに向かっているというのが最大の問題だ。もちろん、望一郎の言葉のことも気になる。不二子はマナスクリーンで聞いたあの会話を頭の中で反芻する。

——たぶん、曽我けーなこそが自同律。そして、恐らくは望一郎の言っていることが正しい。黒魔術師の教義である神の干渉を受けない人間の自由の実現とも、自同律と契約せずに神を殺すという要件が揃えば一致する。あの男の言葉と行動は確かに正しい……。

そうは知りながら、望一郎が兄の敵であることも不二子にとっては事実なのだった。

——あいつがお兄様を殺した。そして阿九斗様は素敵。さて、そうなればわたくしのやるべきことは……。

不二子は立ち上がる。

「打って出ますわよ！」

「え？　だって、この祭壇を守らないといけないんじゃないの？」

けーなが首をかしげる。

「あなたねぇ、話を聞いていませんでしたの？　あの望一郎の目標はあんたでしょうに！」

「えええええ！」

けーながはじめて気づいたように驚きの声をあげた。

——そうか、この子、自同律としての意識と通常の意識が混じっているんですのね。

不二子はケルベロスを呼ぶと、祭壇から例の壺をひっつかんだ。

――これさえあれば、なんとか魔獣の活動自体は維持（いじ）できますわ。

そして、けーなをその背中に乗せ、自らもまたがる。

「さぁ、行きますわよ！」

不二子はケルベロスを走らせた。が、そのスピードが十分にあがる前にケルベロスは足を止めてしまう。

「……どうしましたの？」

不二子はケルベロスの背を軽く叩（たた）く。が、ケルベロスは地下迷宮（めいきゅう）状になっている通路の一点を見つめてうなっているばかりだ。

「まさか……！」

ケルベロスにくくりつけていた革鞄（かばん）から素早（すばや）く薬瓶（びん）を抜き取（と）り、視線の先の通路に向かって投げる。壁に当たった瓶は砕（くだ）けて黄色の液体を飛び散らせた。

「やっぱり、保護色！」

黄色の飛沫（しぶき）は壁の表面に奇妙な凹凸（おうとつ）を浮きたたせていた。その凹凸は明らかに人形（ひとがた）の輪郭（りんかく）の一部である。瓶の直撃は避（さ）けたが、飛までは避けられなかったようだ。

「そのペイントは簡単には落ちませんわよ！　さっさと出てきなさいな！」

不二子の啖呵（たんか）に答えるように、その人影（ひとかげ）は動きはじめた。壁の模様が横にずれる。と、そのずれが大きくなってくるにつれて、色そのものも変化しはじめていた。石の質感の灰色からゴムの質感の黒に。

やがて手足の極端（きょくたん）に長い全身がゴム状の男が出現する。

「やはり潜入していましたのね!」
　不二子は即座に火炎を打ち込むが、ラバーズは素早い動きで壁に張りつき、そこからさらに跳ねて天井へと移ってこれをかわした。不二子が直接攻撃の魔術を得意としていないとはいえ、その素早さは驚くべきものだった。
　ラバーズは天井に張りついたまま降りてこない。まことに潜入向きの特技の持ち主だった。おまけにその戦闘能力も服部家との一戦で証明済みだ。
――校舎から出るところまで行き着けずに終わってしまうわけには!
　不二子は革鞄から鞭を取り出した。両手で伸ばして、ぱしん、と音を立ててから一撃をラバーズに向けて放つ。
　と、驚いたことに、ラバーズはその一撃をかわさなかった。鞭はラバーズの身体を見事に捕らえ、布を破いたような乾いた音を立てる。
――え?
　うまく行きすぎたことに不二子は驚くが、やがてその表情は凍りついた。
　ラバーズはそのゴム状の身体にくっきりと鞭の痕をつけていたが、手を伸ばしてその窪みに指を這わせると、どこか嬉しげに全身を震わせたのだ。
「な……なんですの?」

不二子はさらに鞭をかわさなかった。どころか全身にくまなく鞭が当たるように身をひねっているらしかった。身体に鞭の痕が増えるたびに喜びに打（う）ち震えているかのように見える。

「う、薄気味の悪い……」

不二子は鞭を振るうのをやめた。どうもダメージになっているようには思えない。

すると、ラバーズは物足りない、というように手足を大きく拡げて前進を開始した。身体のくねらせ具合からすると、明らかに鞭を欲（ほっ）しているようだった。

痛みが快感になるタイプなのか、不死身の身体を誇示（こじ）しているのか、挑発（ちょうはつ）なのかわからないが、完全に不二子の戦意は萎（な）え、恐怖がその背筋を伝うようになっていた。

「どどどど、どうしよう……」

けーなも珍（めずら）しく慌（あわ）てている。

「どうしようもこうしようもありませんわ！」

不二子も判断に迷う。

ラバーズは物欲（ものほ）しそうに前進していたのが、ふと歩みを止める。鞭がもらえぬとわかると、拗（す）ねるかのように身をかがめた。が、それも一瞬のことで、不満が怒（いか）りに転じたかのような激しい跳躍（ちょうやく）を行う。縮めたゴムがはじけるかのような素早い跳躍であった。そして天井で跳ね返ると、ケルベロスの後方に回り込みつつ、その手をけーなに向かって伸ばす。背後に着地すると同時にけーなをさらおうというつもりだ。

肉体的な戦闘に慣れぬ不二子は、ラバーズの動きの目的は認識できたものの、それに対応することは無理だった。

「しまっ……！」

不二子に出来ることは振り返ることとくらいだった。ラバーズの手がけーなの腰（こし）にかかる。

「きゃあああ！」

けーなは悲鳴をあげた。

その時。

「バット・ストーム！」



甲高い声とともに、黒い風のようなものが、ラバーズよりも一瞬早くけーなの身体をさらった。
けーなの身体は浮き上がってラバーズの手の間をすり抜け、ケルベロスの前方の空間で浮遊して静止する。その身体は黒い布状のものに包まれていた。

「なんですの？」

不二子が驚きの声をあげると、その目の前でけーなの身体を包んでいた布が蠢きはじめた。布と見えたものは、蝙蝠の集合体であった。けーなを地上に降ろすと、蝙蝠たちは一匹ずつ飛び去り、けーなのすぐ脇に集まりはじめる。

蝙蝠の集まった先は、いつのまにかそこに立っていた顔色の悪い少女のマントの内側だった。

「生徒会副会長、大竹美智恵。会長の命で参上したでありんす」

美智恵は気取った仕草で挨拶をし、すらりと細身の剣を抜きはなった。

「副会長！」

「そんな人いたっけ？」

不二子は驚くが、けーなは意外そうな声をあげた。

「影が薄いにもほどがありんすねぇ。そりゃあ、あちきら三役は三人でセットでありんすがね」

美智恵はぼやく。が、すぐにラバーズに向き合うと、剣を水平に構えた。

「ともあれ、素直でない会長はあんさんらを助けるためにあちきを遣(つか)わしたんでありんす。ここはちょいと活躍(かつやく)させていただくでありんすよ！」

ケルベロスを自らの背後に逃(のが)して、美智恵は構えた剣を振るった。と、その剣から突如(とつじょ)として暴風が巻き起こる。魔術による風と、そこに混じる機械蝙蝠による複合攻撃。かつて地下墓地で阿九斗を苦しめた鋭(するど)い刃(は)を持った蝙蝠の嵐(あらし)がラバーズに襲(おそ)いかかった。

刃によるダメージをほぼ受けないラバーズも、これには後方に吹(ふ)き飛ばされてしまう。狭(せま)い通路においてはこの攻撃は相手を足止めするのに最適だった。たとえ魔術の風を打ち消せたところで、魔獣ならぬ機械の蝙蝠を止めることは困難だ。

「さぁ、これで時間は稼(かせ)げましたよ。この間に逃げて……」

美智恵はそう言って振り返ったが、その瞬間に絶句してしまった。

不二子もけーなも言葉を失っていた。ケルベロスの前方には望一郎が立っていたからだ。

白い服は着ているが、死神さながらの雰囲気(ふんいき)をまとっているように見える。

「迎(むか)えに来た……と言っても嫌(いや)がられるかもしれないけれど、私はあなたのことを必要としているんです。それはわかってもらいたい」

望一郎は言った。

不二子は恐怖(きょうふ)に言葉を発せないでいたが、いきなりけーなが凛(りん)とした声を発した。

「あなたは良いことをしているのかもしれません。ですが、あなたが必要としているのはあたしではありません」

その言葉は望一郎には衝撃的だったようだ。彼はここではじめて怯んだ顔を見せた。

「なぜ……そんなことを言うのです？」

「あなたの心は別にありますもの。この世界を、季節の移り変わりを、人々の変化を監視をしてきたあたしにはわかるんです。もちろんあなたのことも」

けーなは夢見るように言った。

望一郎は顔に明らかに焦りの色を浮かべた。

「だとしても、今は人々のために動かなくてはならないんです！　私の個人的な感情は後のことにしたい！」

そう言って望一郎は跳んだ。

それはラバーズが見せた跳躍とは次元の違う速さだった。不二子は言葉を発する暇さえなかった。気がつくと望一郎が横にいて、ケルベロスの背の上に立っていた。

「あ……まさか……」

不二子がようやく言葉を発したときには、望一郎はけーなの首筋に優しく触れて彼女を気絶させてから抱きかかえていた。

「おそらくは最後のチャンスなのだ。あなたにも人の心があるならば邪魔をしないでもらいたい」

望一郎は不二子に言うと、元の場所へと跳んだ。

不二子は望一郎の言葉で、ようやく身体を縛（しば）っていた恐怖という呪縛（じゅばく）がとけたかのように感じた。心の底から怒りがわき上がってくる。

「あなたのために命を失った人がいてもか！」

叫んだ。鞭を振るおうとするが、望一郎はさらに後ろに跳ぶ。

「魔王（まおう）を目覚めさせて被害（ひがい）を拡大させたのは誰だ！　今の方がより人は傷ついている！」

「そんな理屈（りくつ）をお言いでないよ！」

不二子は鞭を振るうが、望一郎はけーなを抱（かか）えたままで、その鞭の先端（せんたん）よりも遠くへ跳び、そのまま通路の向こうへと姿を消してしまう。

「畜生（ちくしょう）！」

不二子は叫んで、後を追おうとケルベロスの背中を叩く。が、その時、悲鳴が声が後ろから響（ひび）いてきた。

「あかん！　堪忍（かんにん）や！」

「え？」

不二子も忘れていたが、美智恵がラバーズを抑（おさ）えきれなくなったらしい。振り返ると、凄（すさ）まじい光景が広がっていた。ラバーズは通路全体を完全に塞（ふさ）ぐほどその身体を伸びきらせていた。まるで筒（つつ）の中にゴムの膜（まく）を張ったかのようだ。美智恵が風を起こしても、ラバーズの身体が伸びるばかりだ。

「限界どす！　風を止めますえ！」
　美智恵が悲痛な声をあげた。
「ばっ……。ここで風を止めたらどうなるか……」
　不二子は慌てる。が、美智恵もそんなことはわかって言っているのである。
「あかん！」
　美智恵が力尽きた。風が止まる。ラバーズの身体が縮み、その反動で一気に美智恵と不二子の方に飛んでくる。
「うわ！」
　伏せた美智恵と、ケルベロスの上を、丸くなったラバーズがまるで弾丸のように飛び、通路の壁、天井、床とあらゆる角度で激しく跳ね回った。
　そして、それはようやく止まったが、望一郎を追跡させぬというようにラバーズは不二子の前に立ちはだかっている。
「どうやら、ぶっ倒さないとどうにもならないようですわね……」
　不二子は苦々しげにつぶやいた。

○

戦況は混乱していたが、魔王が落ちたという噂が兵士たちの間に拡がったこと、明らかに魔獣たちの連携が崩れたことが、兵士たちに勇気を与えていた。

不二子が指示を出せない状態にあり、阿九斗のコントロールも消えているのか、魔獣たちは目の前の相手を攻撃するようになっていた。が、兵士たちにとってそれは戦いやすい相手だ。散発的に襲ってくる魔獣を倒すのにそれほどの苦労はいらない。校舎に接近さえしなければ大量の魔獣を相手にせずに済む。

栄子はこの時点で勝利を確信していた。歓喜というよりはほっとしたような笑顔を浮かべ、２Ｖに気分よさそうに言葉をかけている。

「玄鶴の乗員には報酬を出そうじゃないか」

「それがいいんじゃないっすかね」

２Ｖはそれに適当に答えつつ、心の中でラバーズからの報告を反芻する。

――この局面での勝利は確定したようなものか……。しかし、そうなると、この小娘は邪魔になってくるな……。勝ちすぎてもらっても困る。

ちらりと２Ｖは栄子を見る。

そのとき、念話機から声が飛び込んできた。栄子が応対する。照屋家の兵士だった。

《玄関前、魔獣でなく人間の抵抗。止められずにいます》

「あの生徒会長か！　まだ処理できていなかったのか！」

栄子は怒鳴(どな)る。

《相手が予想外に強く……》

「増援(ぞうえん)ならば送れんぞ、家の恥だ。それだけのために連絡(れんらく)したのかい？」

不機嫌(ふきげん)な顔で栄子が応じると、通信が答える。

《いえ、敵はお嬢様(じょうさま)がお館(やかた)様を殺したと言っています》

「なんだって？」

栄子はさすがにぎょっとした様子だった。

そして2Vも状況(じょうきょう)の変化に驚く。

――ほぅ、これは都合がいい。この女の命運も尽(つ)きたか……。

しかし、栄子の反応は驚くべきものだった。

「必ずや殺せ！　報道には近づけるな。特に服部家の近くには行かせるな。常に報道陣(ほうどうじん)がいるからね！」

――家の者は知っていて忠誠を誓(ちか)っているのか？

２Ｖが内心で驚くと、栄子はさらに続ける。

「増援を送る。確実に始末しなよ。うまくやれば我々の天下だからね」

念話を切った栄子に、２Ｖが声をかけた。

「知っていて平然としているんですか？　照屋家の兵隊は？」

「精神操作は長期にわたって薬物を飲ませる必要があるけど……。身内の話なら、それができない環境じゃないだろう？」
　栄子はにやりとした。
「ふむ、以前から準備していたってことですか」
「そうでなければ父殺しなぞできないさ」
　そう言う栄子に、２Ｖは密かに冷ややかな眼を向ける。
——やはりこの女は危険か。利用することもできそうにない。さて、どうするかな……。
　２Ｖは急ぎ策を練りはじめた。
「吹き飛べぇええ！」
　リリィの拳がいくつも飛んで、複数の鎧武者を同時にとらえた。彼らは一斉に後方に吹き飛ばされ、リリィを取り巻く円形に倒れる。そのさらに外側を照屋家の鎧武者と兵士が取り巻いている。目の前の背の低い少女の脅威に手を出せずにいるのだ。
　輪のさらに外を取り巻いている一般兵士たちは、中央にいるのが魔獣ではないことを認め、手を出していいものかどうか迷っていた。そのこともリリィには有利に働いていた。
　リリィは前に出る。その分、鎧武者の輪も移動する。じりじりとした移動の後、リリィが素早く前方に出ると反射的に動いた鎧武者たちとの戦闘が起こる。

リリィの伸びた腕が鎧武者の刀をするりと曲がって避け、拳がカウンターとなって鎧武者の顔面にめり込む。

もう何度もそんなことを繰り返しているというのに、鎧武者たちの士気自体は衰えてはいないのが異常だった。彼らはリリィのことを警戒してはいるが、一向に撤退する気配はない。

——こいつら洗脳されているのか。元気すぎるじゃないか。

さすがのリリィも精神的には苦境に立たされている。

「照屋栄子はお前らの当主である父を殺したんだぞ！」

リリィは何度目かの告発を行った。

しかし、鎧武者たちの顔色は変わらない。それどころかリリィが叫ぶ隙をついて攻撃を仕掛けてくる。そいつらを殴り倒しながら、リリィは状況をさとりはじめていた。

——魔術で完璧な洗脳をするのは難しい。以前、江藤不二子が使ったように薬物を使うしかない。薬物に加えて日頃の教育のたまものか。となると、マスコミに暴露するのも、向こうは嫌がるだろうが、それも一時のことだな。支援者が山のようにいる状況では、もみ消されれば終わりか。やはり解決策はシンプルな一手、照屋栄子をぶっ倒すしかないってことか。

リリィは自分の前に広がる校庭を見た。栄子のテントまではかなりの距離がある。

目の前には百人の鎧武者。そのさらに背後に無傷の照屋忍軍五百人。彼らはもはやターゲットをリリィ一人に絞っている。

総数で六百。
対して、リリィは一人。
——わかっていたとはいえ……。やばいねぇ、実際に前に立ってみると。
リリィは強がりや見栄(みえ)で無茶(むちゃ)をしてしまうような性格はしていない。むしろ反射的に行動した結果が無茶なことになっているというのが彼女の性格だ。
——まぁいいか。自分で売った喧嘩(けんか)だ。三役を曽我けーな救出に回したのは正解だったかな。あいつらに無茶はさせられん。さて……。
リリィは前方の鎧武者に突っ込んでいく。
殴り、蹴(け)り、殴り、殴り、殴る。
無数の拳を前方に打ち込み、それで硬(かた)い壁(かべ)を削(けず)るようにして前進していく。
——手数があれば敵の回復の速度に勝(まさ)る！
圧倒的(あっとうてき)な速度で殴り倒していけば、鎧武者たちの防御力(ぼうぎょりょく)も、回復魔法(まほう)も通じない。その直情的な考えはこの場では正しかった。
リリィは鎧武者たちの包囲を駆(か)け抜け、照屋忍軍五百人の中に突入(とつにゅう)する。複数の忍者(にんじゃ)が一斉に飛び上がり立体的に連携して攻撃してくる忍者たちに対し、リリィは無数の拳を身体の周囲に狙(ねら)いもつけずに打ち出し、球状の攻撃フィールドのごときものを発生させる。触れた者は即座に吹き飛ぶ打撃(だげき)が乱れ飛ぶ空間だ。

――数を打て！　あらゆる攻撃を弾き返せ！　必ず突破できる！
リリィはそう念じながら突き進む。照屋忍軍は鎧武者たちのように正々堂々として武器戦闘は行わなかった。魔術による熱球を撃ち込み、飛び道具を放ち、視覚を奪う煙の魔術を展開する。
だが、リリィはそれらのすべてをマナを充満させた拳の連打のみで振り払った。
「うぉおおおお！」
それは群衆を吹き飛ばしながら前進する一個の球のようだった。
そこまで無数の拳を打ち込むためには凄まじい体力を浪費する。リリィの体力が尽きるのが早いか、突破するのが早いかだ。
――限界が近い……しかし、行ける！
攻撃を繰り出すペースが落ち、狙いをつけて拳を打ち出さなければならなくなったが、それでも照屋忍軍たちの包囲網の切れ目は見えていた。すでに二百人は気絶させ、百人を無力化しただろう。そして、残りの二百は後方に置いてきた。
――包囲……突破！
リリィの視界前方がひらける。目標の栄子がいるテントまであと百メートル。その間に障害はない。
「覚悟しろよ、照屋栄子！」
しかし、栄子は慌てることはなかった。
「増援を出すと言ったさ！」

そして栄子が指示を出すと、リリィの周囲に兵士たちが展開した。
魔獣掃討には加わらずに控えていた五個中隊五百人である。
「そいつはこの学院の生徒会長だ。魔王に協力するため、あたいが父親である大司祭を殺したとデマを流している大罪人だ。それを疑う者もいるだろう。だから殺せとは命令しない。捕らえろ！」
栄子の言葉に兵士たちは納得した様子だった。小銃に銃剣をつけ、それをリリィに向けて構える。
リリィにしてみれば、分厚い壁が出現したようなものだった。
横にずらりと並んだ兵士の列には厚みがあり、後列の兵士の銃剣が前の兵士たちの間から突き出されている。
その銃剣の生えた壁がじりじりと前に出てくる。
——ちぃ……。体力がそろそろ限界か。栄子とやる分は体力を残したつもりだったが、気合いが途切れたか……。
リリィは左右をうかがった。右と左にも同様の壁が出現している。
それぞれ百人ほどで形成されている壁だ。さらに、後方では照屋忍軍が回復しつつある。
——飛行しようにも、後方の銃の的になるだけ……。第一、体力を失いたくない。
兵士たちがゆっくりと迫ってくることだけがリリィにとっては救いだった。リリィを悪人と断じることができる兵士はおらず、捕縛だけを目的として行動しているからだろう。だが、リリィにとってみれば、じりじりとなぶり殺されるような感覚になる。

——ちぃ……もうダメか……。

リリィがあきらめて膝を屈しそうになったとき、後方から悲鳴が聞こえてきた。

「ひぃいぃいいい！」

——ん？

リリィが肩越しに振り返ると、凄まじい勢いで毛玉が飛んできていた。まるでリリィに向かって野球のボールを投げたかのような軌道である。そして、悲鳴をあげているのは毛玉そのものだ。

「な？」

リリィもさすがに驚いて身体を縮める。

取り囲んでいた兵士たちも驚きに動きを止めた。

ドン。

毛玉はリリィの隣に音を立てて落ちて砂煙を立てた。

「あてててて……」

声をあげながら毛玉はうごめいた。やがて足が毛の間から伸び、ぶるりと全身を振るわせると、人間よりも少し大きい狼のような獣の姿になった。

「本気で投げやがったぎゃ。アルヌールのやつ……」

狼はそう言って、リリィににやりと笑いかけた。

「カンナ……」

リリィは顔をほころばせた。

狼の正体は神山カンナ。生徒会の会計である。変身ができる特殊な体質の持ち主である。

カンナが飛んできた方を振り返ると、人間の三倍はあるだろう巨大な西洋鎧が校舎の脇に立っていた。

その鎧がカンナをぶん投げたものらしく、ピッチング後のフォロースルーのポーズをとっている。書記であるアルヌールの乗り込む戦闘鎧だ。

「おまえら……」

リリィはゆるみそうになる顔を引き締めた。

「曽我けーなを助けてこいと言ったはずだぞ」

「いや、それは美智恵が行ってるぎゃ。水くさいこと言わんでほしいぎゃ。会長の考えていることくらいわかるぎゃ」

カンナは歯を剥き出して笑う。

「……馬鹿が。どうやってこの状況から抜け出すつもりだ?」

「そいつは考えてなかったぎゃ。会長のやり方と同じだぎゃ」

「そうかい」

リリィも歯を剥き出して笑った。

「気力を無くしてた自分がばからしくなってきたね。あとちょっとなんだ。せいぜい暴れようか。なぁ」

「そのつもりで来たんだぎゃ。楽しくなってきたぎゃ」

カンナは狼の咆哮（ほうこう）を天高く放った。
――乱入か。こうなると生徒会長さんの陣営（じんえい）に勝ってもらうのもいいかもしれん。
２Ｖは皮算用をはじめる。
――栄子は父殺しを妄言（もうげん）だと自ら宣言した。今はそれで誤魔化（ごまか）しておいて、望一郎の大将が作戦を成功させた後、記録を改ざんするつもりだな。確かにそれも良い方法だったろうが、信じない兵士もいるだろう。そこを突（つ）いて混乱させるか……。
２Ｖは精神を集中させた。
彼（かれ）の操る人形たちは、様々な部隊に紛（まぎ）れていた。魔獣を掃討（そうとう）する部隊に、待機している部隊に、治療（ちりょう）をしている後方の部隊に。
「ねぇ、聞いたかい？　大司祭の娘（むすめ）が大司祭を殺して地位を奪ったと敵が主張していると」
「いや、魔王が殺したんだろう？」
「しかし、あの照屋栄子の行動を見ると、怪（あや）しいところも多々あるんじゃないか？」
「それはそうかもしれないが……。命令は命令だからな」
２Ｖの人形たちはそのような会話を部隊のあちこちで繰り広（ひろ）げた。もちろん兵士たちは職務には忠実だ。指揮官にそのような疑いがあるといっても命令には従う。それでも、その噂は疑惑（ぎわく）となってあっという間に広まり、爆発（ばくはつ）する火種を作ることにはなっていた。

リリィとカンナのコンビは見事な動きを見せていた。リリィがやたらめったら突き進み、それをカンナがフォローする。見た目とは逆の行動に周囲は翻弄（ほんろう）されていた。

「食（く）らえ、必殺、球状ぶったたき！」

リリィはノッていた。技に名前を付けるセンスはともかく、精神力は回復している。

無数の拳が作り出す球体を身体の周囲に展開し、それで次々に相手を吹き飛（と）ばしていく。死角をカンナが跳び回って塞いでくれるおかげで、それまでのように無駄（むだ）な空間にも攻撃をしなくて済むようになっている。精神力をセーブできることで長く戦闘状態を維持できるようになり、格段に攻撃力（こうげきりょく）は上がっている。

「それに、所詮（しょせん）は一般兵！　魔術を使えるわけでもない！」

「近づくなら怪我（けが）するぎゃ！」

カンナは人間の反射能力が追いつかぬ速度で駆けた。覚醒（かくせい）前とはいえ阿九斗を翻弄したこともある動きだ。兵士たちは距離を取って小銃を撃つが、狙いをつけた瞬間（しゅんかん）にカンナはそこにいない。弾丸はわけのわからぬ方向に飛んでいき、同士討（どうしう）ちになる。しびれを切らせてついに人間の姿であるリリィにまで発砲（はっぽう）したが、これはカンナが素早く盾（たて）になってその身体で銃弾（じゅうだん）を受け止める。しなやかで強靭（きょうじん）な毛は、容易に弾丸を弾（はじ）いて逸（そ）らした。

「ふん、照屋栄子まであと少し！」

「意外と歯ごたえなかったぎゃ！」

リリィとカンナは怒濤の進撃を続ける。
「甲賀の名折れだぞ！　どうなっている！」
栄子は念話機に怒鳴った。
指揮所であるテントは校庭から少し離れた小高い位置にあるが、リリィはもう校庭を突破しようとしている。やはり一般兵では魔術のエキスパートを止めるのは難しい。
《巨人型の鎧に止められています。なんとかしようとはしていますが……》
もちろん栄子にも状況は見えていた。獣人を投げた馬鹿力の巨人鎧は、校舎のそばからのそりのそりと照屋忍軍と鎧武者に向けて移動していた。そして、その強さは栄子も承知しているところだ。複数の忍者でかかったところで足止めも難しいだろう。
「服部家を生徒会長の捕縛に回す！」
栄子は宣言した。
それを脇で見ていた2Vは内心でこれを好機と見た。
――背に腹はかえられないか。報道陣がとりついているゆう子の部隊を回すとなると、父殺しの噂が全国の視聴者にばれる可能性が高い。そうなると、火消しはかなり困難になる。照屋栄子に完全に失脚してもらうこともできるか……。
その2Vの企みに栄子は気づくことはできなかった。
「服部ゆう子を何か理由をつけてテントに呼んでおけ」

栄子は伝令に告げた。念話を切ってから、にやりと笑う。
「さて、服部絢子（じゅんこ）！　働いてもらうよ！」

○

「なんだと……」
絢子はさすがに絶句した。
理不尽（りふじん）な命令にも程（ほど）がある。生徒会長を始末しろというのだ。
「父殺しの噂が流れている。まさか、その口封（くちふう）じではあるまいな？」
絢子は平静を装（よそお）いつつも、さすがにその唇（くちびる）を震わせていた。噂は少し前に絢子の耳にも届いていた。
《まさか、あたいがそんなことをするように見えるかい？　作戦中だ。口を慎（つつし）め》
――見えるから言っているのだ！
そんな思いを言葉にはせず、絢子は震える声で応じた。
「おおっぴらに言うことではないですね、確かに。しかし、理由がなければ応じられません。生徒会長は魔王の軍勢ではありませんから」
《そんな理屈は聞いていないさ。この命令に先んじて、アイドルのゆう子ちゃんをテントに呼ぶように言ってある。マスコミを通じてね。彼ら安全な位置でインタビューがとれると喜んでいた》

「な……何が言いたい！」
　絢子は慌てて周囲を確認した。確かにゆう子がいない。あのレポーターとカメラマンもいない。
《生徒会長がどんな理由で暴れているかは知らないが、戦場のアイドルは指揮官の盾になって怪我をするのが美しいんじゃないかしらん？》
「照屋栄子ぉ！」
　絢子は絶叫した。
――ここまでやるか、あの女！
　彼女が父を殺してまで大司祭になろうとしているのは確実だ。彼女の行動と戦況からしてもはや疑いようもない。となると、阿九斗の怒りの理由も理解できた。
――大司祭の地位も形骸化したか！　いや、仕組みを悪用した者がいるということか。以前から照屋の当主には黒い噂があったが、ここまでとは……！　この戦争、栄子の私利私欲で起こされた！　いや、これまでの戦いも照屋家の都合で起こされたものもあっただろう！　何人が殺されたというのか、想像もできない……。私も黒い噂は耳に入っていた。しかし、それを秩序を維持するために仕方ないものと思いこもうとしていた。しかし……。
「者ども！　命令だ、指揮所に向かう者を止める！」
　しかし、こうなっては生徒会長に止まってもらうしかない。
――私は馬鹿だ。この大司祭による支配という体制を維持するために働くなんて。

絢子は服部忍軍に命令を出した。
忍軍は魔獣討伐（まじゅうとうばつ）を中止し、移動を開始した。絢子が先頭に立った。
——正しかったのは、紗伊（さい）阿九斗だというのか……。彼がこの状況を招いた。だが、彼が照屋家の暗部を暴露したとも言える。彼はそれを知って怒（おこ）ったのか？　彼と話がしたい……。だが……。
空母『玄鶴』が阿九斗とピーターハウゼンを巻き込んで校舎に突っ込んだのを見た絢子は、さすがにその場で絶望に襲われたが、そんな彼女を救ったのはゆう子の存在だった。ゆう子の中の魔獣の血が騒（さわ）いでいることが、阿九斗が生きていることの証明になると知ったのだ。
——生きているのなら、早く魔王であることを証明して見せろ！　この腐（くさ）った状況を一撃でひっくり返す圧倒的な存在であることを証明して見せろ！
「どうしてここに？」
ゆう子は呼び出されたことに当惑（とうわく）していた。魔獣には近づくなと任務から遠ざけられていたところを呼（よ）び戻（もど）されるのは自然なことだったが、取材以外の仕事がないというのにはさすがに戸惑（とまど）いがあった。
「魔王がいなくなって、平和が訪（おとず）れましたね？」
レポーターが安全地帯に来たとほっとしつつ、ゆう子にマイクを向けた。レポーターはリリィのことには気づいていないらしい。何か小競（こぜ）り合（あ）いのようなものだと思っているのか、そもそも戦況というものを理解していないのか。
「まだ戦いは続いているし、油断してはいけないよ」

しかし、ゆう子は戦況をわかっていた。何かがおかしい。ここもそれほど安全ではないようだ。何より、この戦場でゆう子だけがはっきりとわかっていることがあった。

「それに、魔王はまだ生きているよ」

ゆう子の言葉に周囲がざわつく。

「そ、それはどういうこと？」

「カン……だけど、わかるんだよ。あ……！」

ゆう子はそこで言葉を止め、遠くを見た。

戦場で服部家の軍勢と、リリィとがにらみ合いをはじめたのだ。

「お姉ちゃんが……」

ゆう子がそちらを指さす。

状況が動き出したのを察した栄子がカメラマンとレポーターを下がらせる。

「失礼。ここが危険になるかもしれない。少しの間、下がっていてもらいたい」

栄子はそう言って報道陣を追い出すと、ゆう子のすぐ後ろに立ち、楽しそうに絢子とリリィのにらみ合いを見物しはじめた。

突然（とつぜん）に出現した強敵にリリィは足を止めた。さすがにリリィにも疲労（ひろう）の色はある。一般兵ならなんとかなるが、服部家の忍者ともなると今の体力では厳しい。

忍者の一人に攻撃（こうげき）を受け止められたことでリリィは足を止め、一団を指揮する絢子の姿を認めた。

「キミは、うちの生徒だろうに。どうしてボクの前に立つ？　それにキミならば照屋栄子の言うことなど信じてはいないだろう？」
　リリィはいきり立つカンナを制しつつ、絢子に問いかけた。
　絢子は苦悶の表情を浮かべ、テントの方を振り返った。絢子は何も言わなかったが、リリィは事情を察した。
「ほう、人質をとられたか。しかし、それがなくとも、家柄のことを考えれば、照屋家には逆らえないというところかね？」
　リリィの皮肉めいた口調に、絢子はつい感情を表に出してしまう。
「わかっていてそれを口にするか！」
「ふん、そうだよ。いじめているのさ」
　リリィはにやりとした。
「私はともかく、我が家の部下は気が荒い。命の保証はできんぞ！」
　絢子が声を荒らげると、その言葉が合図だったかのように服部家の忍者たちが一斉にリリィに跳びかかった。
「伊賀忍法五方魔円陣！」
　阿九斗には通じなかった五人による同時攻撃だが、体力的に攻撃の数を繰り出せないリリィは二人までを打ち落としたところで三人の接近を許してしまう。カンナがリリィの前に滑り込んだが、これも二人

の攻撃を受け止め、弾き飛ばしたにすぎない。背後に回った一人がリリィに刀による一撃を放つ。

「ぐっ……」

　リリィが膝を折った。屈(かが)み際(ぎわ)に背後に拳を振ったが、忍者はそれよりも早く後方に跳んでいる。

「峰打(みねう)ちとは……甘(あま)く見(み)られたもんだね。好みじゃないんだよね……情けかけられるの」

　憎(にく)まれ口(ぐち)をリリィは叩く。

「ここで止まってください会長。まだなんとかなるかもしれない」

　絢子はやや落ち着いたのか、リリィを説得しようとする。しかし、もちろん応じるリリィではない。

「馬鹿ったれ。そんな甘いことなんざ考えてられるか。正しいと思ったことは意地でもやるんだよ。家柄だの他人だの知るか。間違(まちが)ったことに荷担(かたん)するやつは善人だろうが弱者だろうが仲間だろうが死んで当然なんだよ」

　リリィは立ち上がった。

「くっ……」

　絢子は苦悩(くのう)した。彼女が手を振り下(お)ろせば、服部忍軍は躊躇(ちゅうちょ)無く次の攻撃を繰り出すだろう。

「やれ……」

　栄子は笑(え)みを浮かべつつ懐(ふところ)に手を入れていた。彼女のすぐ目の前にはゆう子が座(すわ)っている。懐の刃物(はもの)を抜(ぬ)き放てばいつでもゆう子の首を切断できる構えだ。

　絢子が常にこちらをうかがっていることを栄子は知っていた。

その光景を2Vは冷静に見つめていた。

——さて、ここが良い頃合いだ。

まるで表情には出さず、密かに精神を集中させる。

2Vの人形たちが動きはじめた。

絢子が目をつぶって手を振り下ろす。

服部忍軍が跳んだ。

「伊賀忍法五方魔円……！」

しかし、その技は最後まで繰り出されることはなかった。

「ぐっ！」

「うわっ！」

忍者たちが悲鳴をあげて落とされる。

「何事だ？」

絢子が周囲をうかがう。

忍者たちをたたき落としたのは、驚いたことに一般の兵士たちだった。

「……どういうことだ？」

絢子は当惑する。

小銃を構えた五人ほどの兵士がリリィとカンナをかばうように立っている。銃口からは煙が上がっている。忍者たちを落としたのは射撃によるものだ。
しかし、魔術も使えぬ一般の兵士たちにとって、不意打ちとはいえ跳び上がった忍者たちに銃を命中させることは不可能に近い。
そのことはリリィもよく知っている。
「なんだ……お前ら？」
自分を守ってくれた兵士たちに疑いの目を向ける。
「照屋栄子の父殺しを信じる者だ」
兵士の一人が答えた。
そして、兵士たちは動きはじめた。三人が一気に前進、残る二人が援護の射撃を行う。驚いたことに彼らの個々の動きも連携も服部忍軍を凌駕していた。
「馬鹿な！」
絢子は戸惑うが、目の前で起きている光景は事実だった。兵士五人は確実に一人、また一人と服部忍軍を戦闘不能にしていく。
「どうにもこういうのは興が乗らないね……」
リリィは絢子に向かって歩を進めた。服部忍軍は兵士たちに手一杯になっている。今や栄子のいるテントとリリィの間に立っているのは絢子だけだ。

「……一体、なんなんです、これは……！」

絢子は混乱した様子で聞いた。

「情報調査室に人形を使うことが出来る術者がいるって話だ。そいつが指揮所にいるんだろう。さて、妹さんには同情するし、できれば助けもするが、どうにもならなかったとて恨むなよ」

リリィは、ずい、と絢子の方に一歩踏み出した。

「くっ……」

絢子にも理屈ではわかっている。悪いのは栄子である。しかし、どうにもならない。

――ただ、この場は戦うしかない！

絢子は決意を固めた。

「伊賀忍法、乱れ月影！」

絢子は分身を作り出した。二人の絢子が同時にリリィに襲いかかる。

「ふん。腕は二本あるんだよ」

リリィは鼻で笑う。絢子の時間差の攻撃に対し、リリィは一体ずつ片手で攻撃をたたき込んだ。

――そ、そんな！　こんなあっさりと！

絢子は何発もの攻撃を受けながら、打撃によって揺らされた脳が身体を動かす命令を出せなくなっていることを嫌でも意識させられていた。

――実力の差がありすぎる……。

絢子と分身は倒(たお)れ、分身は消えた。

以前も生徒会長には軽くあしらわれた。それでも今ほどの無力感はなかった。しかし、今は違う。強くなければなにも守れない。

――く……くそ……。

なんとか動かせる手でソハヤノツルギに手をかけてみた。しかし、それを抜くことはできなかった。

――強い気持ちだけは持っているぞ……それでも、それでもダメだというのか……。

絢子は悔(くや)し涙(なみだ)を流した。

「照屋栄子ぉ！」

リリィは栄子に向かって躍(おど)りかかった。

「ば、馬鹿者(ばかもの)！　こいつがどうなっても……」

栄子はゆう子の首に腕を回し小刀を抜いたが、リリィは僅(わず)かも躊躇しない。

「知るか！　お前を殺せば一気に弔(とむら)いは済む！」

「ええぃ！」

栄子は小刀を振るった。

「きゃあああ！」

ゆう子の悲鳴が尾(お)を引く。

しかし――。

「なんだと！」
「うぉ！」
「きゃあああ！」
　リリィ、栄子、ゆう子が同時に声をあげた。
　三人の間を風が駆け抜けていた。

○

　リリィの拳はその背中で止められていた。
　栄子の小刀はその左手の爪（つめ）で止められていた。
　そしてゆう子はその右腕（みぎうで）に抱き留（と）められていた。
「約束は守るよ」
　ゆう子にささやきかけたのはブレイブである。
「ブレイブ！」
　ゆう子は喜びの声をあげた。
「少し遠くへ行くことになるけど、大丈夫（だいじょうぶ）だからね」



ブレイブ＝ヒロシは言い、テントから離れて上空へと飛ぶ。その速度はリリィも栄子も２Ｖも反応できぬほどのものだった。

上空には大和(やまと)望一郎がいた。

その横にヒロシはゆう子を抱きかかえたままで並ぶ。望一郎は巨大(きょだい)な剣(けん)の上に立っていた。剣に飛翔(ひしょう)能力があるらしい。そして望一郎の腕の中にも女の子がいる。けーなだ。

「その娘を助けたかったのかい」

望一郎の質問にヒロシはうなずいた。

「そのためにスーツを取(と)り戻したかったんだ。だからあんたに協力している」

ヒロシは言った。

「心から共感してもらう必要はないさ。しばらくは協力してもらうよ」

望一郎は言い、ヒロシを従えて戦場から遠ざかっていった。

○

「なんだか知らんが、都合がいい！」

リリィは残忍(ざんにん)な笑みを浮かべた。

栄子はもはや身を守るものがなくなったことを悟り、恐怖に顔をゆがめていた。絢子の瞬殺を見ている栄子である。自分と絢子の力量にそれほど差はない。リリィの実力がわからぬほど間抜けではない。

「2V!」

栄子は助けを求める視線を2Vに送る。が、2Vは椅子に座ったまま薄笑いを浮かべただけだった。

「往生しろや!」

リリィが咆える。

栄子に無数の拳を打ち込んだ。

「どらぁあああ!」

リリィは栄子をここぞとばかりにタコ殴りにする。栄子の身体は木偶人形のようにその場に横たわったが、それでもリリィは殴るのを止めない。

「どぉおらぁあああ!」

栄子の身体はぼろ切れのようになる。

「か、会長!　待つぎゃ!」

ようやく追いついてきたカンナが声をあげた。

「ん?」

ここでリリィは異変に気づいて手を止めた。

「しまった……!」

リリィが殴りつけていたのは栄子の上着を羽織った材木だった。
「変わり身！　逃げ足だけは速い……！」
　リリィは歯がしみする。
「ははっ」と2Vが軽い笑い声をあげる。
　そちらをリリィがにらみつけると、2Vは「失敬」と笑いながら遠方を指さした。栄子が照屋忍軍の方に走っていくのが見えた。
「ここまで来ておきながら振り出しに戻るってのか！」
　リリィは咆えた。
「大変だったね。ご苦労さん」
　2Vは言った。リリィが再び彼をにらむ。2Vは肩をすくめた。
「いや、それでももう彼女に求心力はないでしょ。あんたはどうやらあの女の父殺しの証拠を握っているようだし、ムキになるこたぁないさ」
「2V、ってのはあんたかい？」
「喧嘩腰にならないでほしいな。ま、今は協力しましょうや。情報調査室とあんたの利害は今は一致している。魔王を倒す、照屋家が失墜する。放っておけば双方とも実現しそうじゃないか。あんたは情報を出す。こちらは扇動する。それですべて解決だ」
　あくまで2Vの声は明るく軽い。

「気に入らない。気に入らないよ、あんた」

　リリィは低い声を出した。

　彼女にも理屈はわかっている。2Vの言う通りにすれば、あとは魔王が生きていようといまいと栄子は終わりだ。この戦いも指揮権を栄子の次の地位にある者――この場合だと『玄鶴』の艦長（かんちょう）だろう――に譲（ゆず）ってしまえば、状況も収まるだろう。

　しかし――。

「ボクが求めてるのは平穏（へいおん）とか状況を収めるってことじゃないんだ。ずっと調べてたんだ。内閣魔術情報調査室が帝国（ていこく）を転覆（てんぷく）させようとしているんじゃないかって。CIMO8がそのリーダーにすら従わず、リーダーの謎（なぞ）の野望すら利用しようとしているんじゃないかってね」

　リリィが言うと、2Vが面白（おもしろ）そうに笑い声をあげた。

「はははは！　そりゃあよく調べたね！　我々も望一郎の旦那（だんな）のやることを聞いたらたまげたさ。だけど、あの人も気づいていないことがあるんじゃないかって思いはじめた。そうしたら、驚く無かれ、宝の山さ！　あの人も個人的な事情で吹き上がっているに過ぎない。だとしたら、こちらに利益があるという以外に従う理由があるものかよ！」

「なら、その理由、今すぐ吐（は）いてもらう。この国で神と魔王の争い以上の理由とやらを！」

「だから喧嘩腰はやめようや。協力すればその秘密だって共有できるぜ」

「やまかしい。ボクはちょいとばかり頑固（がんこ）なんだ」

「やれやれ、やっかいなおチビちゃんだ」
「今の言葉……。死んだよ、あんた」
笑い声をあげる2Vに対し、リリィは声を低くした。かぶっていた小粋な帽子のつばに手をかける。そして、それを一気に横に引いて帽子の前後を逆にした。帽子に染め抜かれていた笑顔の柄が、怒りの顔に変化する。本人にすら歯止めがきかない怒りに襲われたときのサインである。
「何の利益にもならない争いだってのに！」
2Vが愚痴った。服部家の相手をしていた人形たちを一気に呼び戻し、リリィに向かって一気に殺到させる。
「会長！」
カンナが悲鳴のような声で警告した。もはやリリィも体力は僅かしか残っていない。それを知ってのことである。
「やかましい！　最大の技を使わなきゃ気分が収まらん！」
リリィが腕をするりと伸ばした。だらりと身体の左右に垂らしたそれを一気に振り回す。だが、その振り回しは攻撃のためのものではなかった。伸ばした腕を身体に巻き付け、ぎりぎりと絞り上げる。力を溜め込んでいるのだ。
2Vの人形たちは一気にリリィに襲いかかるが、リリィは腕を身体に巻き付けたままの格好で跳び上がり、それをかわす。そして、まだ椅子に座ったままの2Vに向けて、溜め込んだ力を一気に解放した。

「行けぇ！　最大級のぶん殴り！　その名もザ・ぶん殴り！」
　リリィの身体が回転し、右拳が凄まじい速度で撃ち出される。
　拳は音速を超えて破裂音を周囲に響かせた。
　拳の軌道上に２Ｖの人形が割り込む。
「二段階目、加速！」
　リリィは伸びた右腕でなく、左腕を身体からほどいて回転力を増した。
　突き進む拳が真っ白な水蒸気のリングの尾を引く。拳の面により瞬間的に圧縮された空気が拳の後方で解放され水分を凝固させたのだ。
　２Ｖの人形は痛みを感じない利点を生かして盾になろうとしたのだが、この腹部をいとも簡単にリリィの拳は突き破る。
「なに！」
　２Ｖもさすがに驚愕した。さらに人形を拳の軌道上に移動させたが、そのどれもがリリィの拳により穴を開けられてしまう。
「うぉ！」
　２Ｖは目を見開いた。その腹にリリィの拳が突き刺さる。２Ｖは一瞬動きを止め、続いて椅子から崩れ落ちた。
「ふん」

リリィは腕を縮めて着地。やや遅れて2Vの人形たちが地面に落ちる。
「さすがに二発は打てない……。対魔王用に取っておくつもりだったけどね」
2Vに歩み寄るリリィだったが、その表情が曇る。
「なん……だと……」
リリィは2Vの髪の毛をつかんで頭をぐい、と持ち上げた。そして、その頭を地面に叩きつける。
「こいつも人形じゃないか!」
「そ、それは本当ぎゃ?」
カンナが駆け寄ってきて確認する。2Vの腹部に開いた穴の中には機械が詰まっていた。
「ははははは……」
2V、いや、2Vと思わされていた人形が笑い声をあげる。その顔には表情がない。それは死体が笑い出したかのような不気味さがあった。
「どこにいてこいつを操っている!」
リリィが怒鳴る。
しかし、2Vはからかうような声をあげる。
「そりゃあ秘密さ!　だけど、この人形が機能停止したら、他の人形も機能停止だ。こいつにブースターを仕込んでいたんでね。ははは……お互いに運が悪かったらまた会おう。だけど、あんたは俺がわからないだろうね。俺にはこの通り顔がない。ははは、はははははは……」

　不気味な笑いだけ残して2Vの人形は機能を停止した。
「畜生！」
　リリィは人形の頭を踏みつけた。
「道化扱いか！　ボクはそういうのが一番我慢ならないんだ！」
「ま、まぁまぁ会長……それより体力が持たないぎゃ。もう求心力はないはずだけど、照屋栄子も逃げているぎゃ。なんとかするぎゃ」
　カンナがリリィをなだめようと声をあげた。
「畜生……しかし、もう気力が尽きてしまったよ……」
　リリィは帽子を元に戻すと、カンナの狼の背中にもたれかかった。
「だからもう、この人はどうして後先考えないぎゃ……」
「やかましい。休んだらまた行くぞ。それより何か食い物持ってないか？」
「生徒会室にあった秘蔵のおかしは誰かに食べられてたぎゃ」
「ああ、学長、補填しなかったのか、ポテチ」
「食べたのは学長？　困ったもんだぎゃ……って、会長、学校に動きがあるぎゃ！」
　カンナが声をあげた。
　リリィがそちらに顔を向けると、『玄鶴』の突っ込んだ場所に集まっていた兵士たちが騒ぎはじめていた。



○

一方、通路を塞ぐラバーズに不二子たちは苦境に立たされていた。

「いや、あちきら、ひょっとして勝てないんじゃあらしませんか?」

美智恵が暗い声で言った。

かつて地下墓地で生徒のほぼ全員を病院送りにした美智恵である。その彼女が弱気な声を出していると、不二子まで不安になってくる。

「そ、そんな弱気なら、なんで先輩（せんぱい）だけがこっちに回されたんですの!」

「地下通路なら機械蝙蝠（こうもり）と風を使うあちきは最強……!　のはず……だったんだけどもねぇ……」

全身がゴムのラバーズには通用しない攻撃が多すぎた。

今もラバーズはじりじりと間を詰めてきている。どうも攻撃をしてもらいたがっているようだ。攻撃を受け止めてからお返しする主義なのか、攻撃をされることを喜んでいるのかは表情がわからぬ以上は判断のしようがない。

じりじりと不二子と美智恵も下がっていく。

「あ、あんさん、なんか得意な魔術（まじゅつ）とかあらします?」

「あったら使ってますわ!　薬物以外は普通（ふつう）の生徒並み!」

「あちゃあ……胸張られても寒いだけですわぁ」
　美智恵がぼやく。
　と、さすがにラバーズもしびれを切らしたらしい。
　弾(はず)むようにラバーズは速度をあげた。
「ひー！」
「ひゃあ！」
　ラバーズと不二子がまたがるケルベロスが凄(すさ)まじい速度で交錯(こうさく)する。ケルベロスの反射速度がなければかわせなかったほどだ。
「こりゃあ、どうにもならんでありんす」
「いや……そうでもないかもしれませんわ」
　美智恵は絶望していたが、不二子はふと何かを思いついた表情になる。
「何かあるんですかいな？」
「わたくしの地下研究室まで逃げることができれば……」
「そういうことなら、なんとかやってみまひょ」
　美智恵はそう言うと、ラバーズに向けて蝙蝠と風を放つ。
　すると今度はラバーズは驚くべき変化を見せた。身体を極限まで薄(うす)く引き延ばし、平面になって床(ゆか)に張りついたのである。

「ひぃ！　薄気味の悪い！」
「つべこべ言わずに乗って下さいな！　走りますわよ！」
　美智恵をまたがらせ、不二子はケルベロスを走らせはじめた。
　ラバーズは平面のまま、傾けた床にこぼした液体のようにそれを追ってくる。さほどの速度は出ていないが、距離が離れたことで美智恵の起こす風が収まるとボール状に変化、弾みながら距離を詰めてくる。
「追いつかれてしまうっぺや！　精神ももう続かないでありんす！」
「方言の安定しない人ですのね……。接近してきたときだけ追い返すように魔術を使えばいいんですのよ！」
「そ、そうでありんすね！　いやー、頭のよろしいことで」
「馬鹿にされてるような気がしてきましたわ……。それより、もうちょっとですわ！　こらえてくださいな！」
「はいなー」
　美智恵はその言葉で気力を振り絞り、ラバーズをなんとか再び押し戻すことに成功する。
　ケルベロスは不二子の地下研究室前に滑り込んだ。
「あと少しだけ足止めお願いいたしますわ！」
　不二子はケルベロスを飛び降り、研究室に飛び込んだ。残された美智恵はぎょっとする。
「あ、あややややや……ちょ、あちき一人でありんすか？」

「こらえていればすぐ戻りますわ！」

「ひぃい、そのまま逃げないでくださいよ！」

怯（おび）える美智恵にラバーズは跳（と）びかかった。美智恵はなんとか蝙蝠の群れを飛ばしてこれを防ごうとするが、ラバーズはそれのすべてを身体で受け止めた。引き延ばされた身体に蝙蝠がめり込み、その背中にまで突き抜けるほどにラバーズの身体を引き伸ばすが、その強靭な皮膚（ひふ）を突き破るまでは到（いた）らない。

「ちょ……こらあきませんわ！」

美智恵は自らの気力が尽（つ）きていることをさとった。風を起こそうとするが、ラバーズを止めるほどのそれにはならない。

ラバーズの手が伸びる。

「ひ！」

美智恵は手で顔をかばう。

が、ラバーズの手は美智恵に届くことはなかった。

「我ながら素早（すばや）い対応だと思いますけれど」

不二子はにやりとする。

彼女は銀色のボンベのようなものを両手に提（さ）げていた。その口から突き出（で）たバルブからは白い煙がゆらゆらと立ちのぼっている。

美智恵がラバーズの姿を見返した。

ラバーズの伸ばした手から、ボンベから立ちのぼっているのと同じ煙があがっている。ラバーズの手は白く凍り付いていた。

「何をしたでありんす？」

「液体窒素ですわ！　魔術による温度低下は防げても、これは一度浴びてしまえばマナではすぐには防げませんわよ！」

　不二子はバルブをひねり、ラバーズに向けて液体を噴射した。ラバーズはマナによるシールドでこれを防ごうとするが、不二子はそのマナに術をかけてシールドを散らす。

「普段防御の必要のないあなたはこの術が苦手と踏みましたが、その通りでしたわね！」

　防ぎきれず液体窒素をあびたラバーズが声にならない叫びをあげる。その半身が白く凍り付き、しなやかさを失う。

「副会長、攻撃を！」

「おうさ！」

　美智恵は機械の蝙蝠を放った。一斉に彼女のマントから飛び出したそれは、羽に取り付けられた鋭い刃でラバーズを襲う。それまでラバーズの強靭な皮膚に受け止められていた刃は、今度はあっさりとラバーズの身体に傷を残す。

「行ける！」

美智恵は蝙蝠の群れをラバーズの凍った半身に集中させた。乾(かわ)いた音が連続で響き、蝙蝠はラバーズの身体を少しずつ砕(くだ)いていく。

ラバーズは奇妙(きみょう)な声で咆えた。まだ伸びる残りの半身を最後の力を振り絞るように伸ばした。状況から見てそれはラバーズ渾身(こんしん)の、最後の一撃(いちげき)であった。

「この程度なら……！」

不二子は後方に跳んでそれをかわす。が、ラバーズが狙ったのは不二子本体ではなかった。ラバーズの腕はケルベロスに伸び、その鞍(くら)に付けられていた鞄(かばん)に突っ込まれる。

「え？」

不二子は戸惑う。が、ラバーズの腕が縮み、その手に握られているものを見て、驚きと焦(あせ)りの声をあげる。

「しまった！」

ラバーズが抜き取ったのは、阿九斗の身体の一部が培養(ばいよう)されたものが入っている壺(つぼ)であった。魔獣のコントロールの源泉である。

不二子は再び液体窒素のバルブをひねるが、ラバーズはなんと凍った半身を自ら見捨てた。身体を伸ばし、凍って伸びなくなった部分から先をちぎってしまう。身体が半分になりつつも、ラバーズは弾むことで加速、通路を壺を抱えて逃げ去(さ)ってしまう。

さすがに追う気力は不二子にもなかった。それに追ったとしても追いつけないことは明らかだ。

「あの壺……なんでありんす？」
　美智恵は聞くが、不二子は教える必要はない、と首を振った。
　しかし、相手がそれを奪ったことの意味は不二子にはよくわかっていた。現状で魔獣のコントロールが失われることはそれほど問題ではない。ただ、あれがあれば、今後、阿九斗に固有のマナ波動がそれから研究できてしまうことになる。それがどのようなことに使われるかわからないが、何か凄まじいことを引き起こせるのかもしれない。
「と……ともかく、相手は撃退しましたわ。さ、状況を見に行きましょう」
　不二子は平静を装いつつ言った。

○

　空母『玄鶴』の激突した位置まで来た不二子と美智恵は、学長が阿九斗を助け起こしている光景を見て驚く。特に不二子は即座に歓喜を爆発させた。
「ああ、無事だったのですね、阿九斗様！」
　不二子が駆け寄ると、阿九斗は身体を起こした。
「ああ……これはさすがに厳しかった」

「黒龍が助けなかったら、危なかったかもしれんな。わしが空母に化勁をせなんだら、二人ともダメだったかもしれんぞ」

　学長が言うと、瓦礫ががらがらと崩れ、中からピーターハウゼンが顔を出した。その頭部には大きな傷がある。血こそ流れていないが、それはピーターハウゼンの体質によるものであって、相当の深手には違いないことがわかる。

「大丈夫かい？」

　阿九斗が声をかけると、ピーターハウゼンは首を横に振った。

「強がる趣味はない。今後の戦いに響くだろうから正直に言うが、おそらくは機能のいくつかが不完全になった。自分でもどこかが狂ってしまったことがわかる。通常の動きには支障がないだろうが、魔術の支援を行うと何が起きるかはわからん」

「そうなると、命をかけてもらうって言葉も嘘じゃなくなるかもしれないな」

　阿九斗は悲しげに言った。そして抱きついてくる不二子に聞く。

「状況はどうなっているんです？」

「も、申し訳ありませんわ。魔獣たちはほぼ総崩れ。兵士たちに掃討されている最中です。そして大和望一郎が曽我けーなをさらってどこかへ……」

「ああ……それなら、追いかけないと」

　阿九斗は立ち上がった。痛みに顔をしかめる。

「いけませんわ！　この場は引いて、また態勢を立て直しましょう！　学院は本拠地にはならないまでも、黒魔術師たちの支援を得てアジトを作ることくらいは簡単にできますから！　阿九斗様が生きていないと、すべてが無になってしまう！」

　不二子は阿九斗にすがった。阿九斗は不二子の頭を抱きかかえるようにし、その耳にささやく。

「それは違うよ。僕はすべてを無にするために行動しようとしているんだから」

「え……？」

　不二子は動きを止めた。

「それって、阿九斗様、死ぬおつもりですか？」

「さぁ？　そこまでは考えていないけれど、死ぬという意味では死ぬんだろうね。命を無くすってことじゃないけれど、もし、神が殺せるのだってことを証明して見せたら、世界から悪しき物語は少しだけ消せるかもしれない。そうなったら、僕も魔王じゃなくなる。その後のことはわからないけれど」

　阿九斗が淡々と言うと、不二子は激しく首を振った。

「いけませんわ！　だって、あなたはわたくしの希望！　わたくしを救ってくれて、生きる道を与えてくれた！」

「でも、それは魔王としての僕の物語の一部になりたいってことだよ。優れたシステムや力の強い個人を神格化して物語を創りあげ、それに頼る。それじゃあ、それを利用して人を傷つける者の跳梁を許してしまう」

「しかし、それで救える人もいるのですから！」
「だからこそさ。もちろん、僕は僕のままで救える人を救うつもりさ。先輩だって僕のことをしっかりと見てくれるなら、僕はそれに応えるつもりだから」
「阿九斗様……」
不二子は潤んだ目で阿九斗を見上げた。
阿九斗はピーターハウゼンに目で合図した。
「さて、行こうか」
「待ってくださいませ！　わたくしも行きます！」
不二子は言ったが、阿九斗は首を横に振った。
「そういうわけにはいきません。これから先はどうなるか僕にもわからないんだ」
「だけど……」
不二子は抑えていた感情を爆発させるように大きな声をあげた。
「どうしてけーななんですの？　彼女のところには行こうとするのに！」
「それは彼女が僕の物語をはぎ取ってくれるからさ」
阿九斗の答えに不二子は力なく崩れ落ちた。
「そこに差があったんですのね……。でも、阿九斗様、帰っていらしたら、わたくしも、きっと……」
不二子は言った。

歩き出す阿九斗に学長が声をかける。

「ま、頑張れや。教えたことも試してみるとええ」

「はい。早速、ひとつめ、試させてもらいます」

阿九斗は瓦礫を越え、外気に髪をなびかせた。

外から兵士たちの悲鳴と驚きの声があがる。

「魔王だ！」

「生きていた！」

「魔獣掃討はもういい！　かかるぞ！」

そんな声と同時に銃弾が阿九斗に降り注ぐ。

「数は……減ってないな。脅かして逃げてくれればいいけど……」

阿九斗は虫を払うように銃弾を手で弾きながら、瓦礫の山を滑り降りた。

眼前の兵士たちは落ちた空母のせいで戦闘不能になっている者や、服部忍軍を除いてもまだ千以上はいる。集まってくるその無数の軍勢を前に、阿九斗はその身体をさらす。

兵士たちの怒気と悪意と恐怖とが押し寄せてくるのを阿九斗は感じていた。

「さぁ、この腐った状況を終わらせてやる！」

阿九斗は横に跳び、自らをたたき落とした空母の球状船首に手を置いた。

○

「生きて……いた」

絢子は顔をあげた。服部忍軍はほぼ総崩れで、絢子を助け起こした忍者（にんじゃ）を含（ふく）めて戦闘可能な状態にある者は百名ほどしかいないと思われた。しかし、どのような状況であっても、阿九斗に対する恨みだけは彼らは忘れていない。

「お嬢様（じょうさま）！　我らこのように満身創痍（まんしんそうい）ではありますし、照屋家のこともありますが、魔王が生きていたとあっては、まずはそちらが優先！」

服部忍軍はすぐさま陣形（じんけい）を組み直し、阿九斗のいる校舎に向かって走り出した。

「ま、待て！」

絢子も後を追う。

――生きていた……生きていてくれた！　だが……だが、もう私は敵がお前ではないことがわかってしまった！

そう心中で叫ぶ絢子の目線の先には栄子の姿がある。指揮を放棄（ほうき）した栄子は照屋忍軍だけで自らの周囲を固めていた。魔王が出現したのを幸い、父殺しを暴（あば）かれそうになったのを誤魔化（ごまか）しきるつもりだ。

指揮所を離れたところで本来ならば職務放棄であり、やましいところがあるに決まっているのだが、魔王だけが敵である今の状況では、陣頭指揮をとっているように見えなくもない。

　しかし、栄子の照屋忍軍が陣取っている場所は阿九斗が出現した校舎からはさらに遠い場所だ。そのさらに遠くに服部忍軍がおり、現在移動中である。その位置関係はリリィをめぐる戦いのせいであるから仕方がないが、栄子が戦闘そのものを他の兵士に任せて高見の見物を決め込んでいることは間違いない。

——どこまでも卑怯な……！

　絢子は奥歯を噛みしめる。

　しかし、近づいてきた服部忍軍を見た栄子の反応は当然のようにあざけりに満ちたものだった。

「無能者！　早く魔王を討伐するんだね！」

——ちぃ……！

　絢子はさすがに小刀に手をかけたが、それを一人の忍者が止めた。

「こらえてください、お嬢様、もし父殺しが本当でも、我らが手を出してしまえば権力の座を狙っての暗殺となってしまいます！」

「ええい、ならば黙って従えと……」

　絢子は悔しさに身をよじる。

「あははは！　滑稽なことだね！」

栄子はそれを見て嘲笑する。
が、そのとき、不意に黒い影が落ちてきて、栄子は振り返った。
「え……えええ！」
栄子は驚愕した。
空母『玄鶴』が大地に直立していた。
「なるほど。化勁というのはこうやるのか」
阿九斗は感心していた。両手で『玄鶴』の球状船首を抱えている。全長三百五十メートルの空母は、どう考えても阿九斗の手には余るはずなのだが、それを易々と持ち上げている。もちろんマナの念動でフォローしてはいるが、それも阿九斗一人の力であることは間違いない。
「化勁とは便利なものだね」
阿九斗は言う。それを聞いていたピーターハウゼンは、龍だというのに肩をすくめた。
「私にはわからないが、そういうものではないのではないかな」
「学長は全身の筋肉の連動だと言っていたよ。実際に出来ているのだから問題ないさ！」
阿九斗はゆっくりと『玄鶴』を傾けた。そして、「ふっ！」と気合いを入れ、それをバットかなにかのように振り回す。
横倒しになったビルが転がってくるようなものだった。地面すれすれを轟音を立てて空母が横向きに突き進んでくるのである。

兵士たちはすべてを投げ捨てて大地に伏せ、後は彼らの神に祈った。神という物語を信じていない者は絶望するしかなかった。伏せられなかった者は空母の腹によってなぎ倒され、運良く伏せることができた者も『玄鶴』が通り過ぎた後にそれが巻き起こした空気の渦によって巻き上げられ、地面に叩きつけられる。

空母の一薙ぎで一千以上の軍勢は沈黙させられてしまった。さらには阿九斗によって振り上げられた『玄鶴』は、その振幅の頂点で強度の限界が来たらしく、中央からふたつに折れ曲がった。

『玄鶴』の後ろ半分が構造材の破片をまき散らしながら校庭に倒れ込む。地震のような震動と爆発のような砂煙が同心円状に広がっていく。

「これで大体終わったか」

阿九斗は『玄鶴』の前半分を投げ出した。やはり震動と砂煙が巻き起こるが、もはやそれに怯えたり逃げ出したりする者はいなかった。誰もがただ呆然として阿九斗を見つめるしかできなかった。

圧倒的な力、あり得ないほどの力を前にして、誰もが言葉を失っていた。

——ああ！　これだ……！　この圧倒的な……。すべてを覆してくれる強さ！

絢子はまだ風が吹き荒れる校庭に立ち、心の中を吹いていく風のような感覚に身を震わせていた。

その力を振るった男のことをよく知っている。鈍くて気が利かないが誠実な男だ。その彼の一撃は自分が望む通りすべてを吹き飛ばしてくれた。

——最初から間違っていなかったのだ。出会ったときにすべてわかっていたことじゃないか！

絢子は前に歩きはじめた。

この場で無傷なのは、離れたところにいた照屋忍軍と服部忍軍のみ。当然ながら栄子は絢子に向かって怒鳴る。

「魔王を止めろ！　命令だ！」

絢子はにやりとした。

「人質もなくそれを言うのか？」

栄子は狼狽したが、すぐさま首を振って服部忍軍の一人を指さす。

「そんな人聞きの悪いことを言うんじゃないよ！　あんたらのお嬢さんは家柄のことを気にしないつもりかい？　ここで刃向かえば、あんたの家は終わりだよ！」

脅されたその忍者は、絢子の肩に手をかけた。

「お嬢様……　腹立ちはわかりますが、いずれにせよ敵は憎き魔王……この場は……」

絢子は無言でその手を振り払って、『ソハヤノツルギ』に手をかけた。

かちり。

鯉口が鳴った。

――神は神の都合のよい行動にのみ応える。

絢子は祖母の言葉を思い出していた。

力が身体にわいてくる。それは怒りからくるものではなかった。

「ははははは！」

喜びに絢子は声をあげた。

「お、お嬢様……」

心配そうに言う忍者に、絢子は満面の笑みで振り返った。

「これからお前たちを裏切る！」

絢子はするりとソハヤノツルギを抜きはなった。刀身が異様な虹色（にじいろ）に輝（かがや）く。

「正義も家柄も私たちを救わなかった！　私は私が愛した男のために生きる！　この裏切りは愛だ！」

忍者たちがその言葉に動揺（どうよう）し、どよめく。以前の絢子ならば、そのどよめきに戸惑い、行動を躊躇したのだろうが、今の彼女は自信と活力に満ちあふれていた。そんな絢子の姿を見た忍者たちは、一斉に絢子にかしずいた。

「裏切りではありませんぞ！　お嬢様のお心のままに！」

絢子は心を震わせながらうなずく。

「おう！」

そして絢子は虹色の抜き身（み）をひっさげて、栄子に向かって走り出した。

「なっ……魔王に味方すると言うのか！」

栄子は慌（あわ）てて後方に下がる。

「その通り！　だが貴様を斬(き)ると決意したらソハヤノツルギが抜けたぞ！　貴様は神に選ばれなかった！」
「そ、それでも魔王に味方する者に神が荷担(かたん)するはずがないだろうに！」
「神など利用すればいいだけ！　ともかく貴様を斬るために私は力を得た！　その後はその力、どう使おうと私の勝手だ！」
「無茶苦茶(むちゃくちゃ)を言うんじゃないさ……！　ええい、それでも貴様は一人、こちらはあたいの言うことしか聞かない兵隊がまだ三百人は残っている！」
　栄子が怒鳴ると、照屋忍軍は鎧(よろい)武者を中心に陣形を組み直した。無傷か治癒(ちゆ)を済ませた者がそれだけ残っていたのだ。
「三百か！　数を数える必要がなくなって助かる！」
　絢子は胸の前で片手で印を結んだ。
「忍法(にんぽう)、乱れ月影！」
　絢子の得意とする分身の術である。走る絢子の姿がふたつになる。と、すぐさまそれぞれの分身がさらにふたつに。
「な……そんなことあり得るって言うのかい！」
　栄子が悲鳴をあげた。

絢子の分身は倍々で増えていく。数度の分身を繰（く）り返しただけで、あっという間に凄まじい数の絢子の軍勢が生まれる。

「これで……三百……！」

三百人の絢子が照屋忍軍に向けて殺到した。

「馬鹿な……！」

栄子は一瞬にして自分の横を通（とお）り抜けた風に身をすくめた。

つまりは一撃だった。三百人の絢子が三百人の照屋家の強者をそれぞれ一撃で打（う）ち倒したのである。

「一秒もかかっていないじゃないさ！」

「当たり前だ。二の太刀（たち）が必要だった相手はいなかった」

三百人の絢子が同時に歯を剥（む）き出して笑い、栄子を取り囲む。

栄子は何かを探すように周囲を見やるが、動いている兵隊は誰もいない。

「ま、待て……古い友達じゃあないか！」

「その通りだ！　だからこそ許せないこともある……！」

三百の絢子が一人の栄子に殺到した。

今度は栄子に逃げ場（ば）はない。押し寄せる絢子の波は栄子をその中に飲み込んだが、すぐに栄子の身体は宙に打ち上げられた。打撃（だげき）を加えやすいように、一体の絢子が栄子を峰打（みねう）ちの一撃で空中に弾（はじ）き飛（と）ばしたのである。

「うぉおおお!」
絢子の一体がそれを追って跳んだ。そして峰打ちの一撃を加え、さらに栄子を打ち上げる。続いて次の一体がそれを追っ手さらに高く跳ぶ。
栄子に一撃を加えるごとに絢子はその分身を消した。
やがてかなりの高空で、一人となった本物の絢子がすでに気を失っている栄子に向かってソハヤノツルギを構えた。峰打ちではない。手を返し、刃を表に向けての構えである。
「その命、両断させてもらう!」
絢子はとどめの一撃を栄子の腹に振(ふ)り下ろす。
が、その刃が栄子の身体をふたつに斬り離(はな)すと見えたその時だった。
ギィン!
とソハヤノツルギが鳴った。なんと、その刃は空中に飛び出た右腕によって受け止められていたのだ。
「お待ち下さい」
そんな無感情な言葉とともに空間に穴が開きはじめる。右腕から順に、そこからのっそりと顔を出したのはころねだった。ソハヤノツルギを押さえたままで栄子を抱き留める。
「ころね……」
毒気を抜かれた絢子がつぶやく。
「殺してはいけません。生きて罪を償(つぐな)ってもらう。そうでなくてはいけません」

ころねはそう言って、栄子の身体を下に持っていく。
「今までどこに……」
後を追いながら絢子が聞くと、地面に降り立ったころねは言う。
「機能停止していたのですが、あなたのお祖母さんに助けられました。そのお祖母さんからの伝言も持ってきています」
「それは……？」
「後のことはこちらでやっておく。気にせずにあなたの好きなものを追いかけなさい」
ころねは無表情で親指を立てて突き出して見せた。
その格好があまりに馬鹿馬鹿しかったので絢子は吹き出した。
そして少し泣いた。最初からこうしておけば良かったのだ。
涙を振り払うと、上空を黒い龍が駆けていくのが見えた。
絢子ところねはそれを目で追う。
「あいつはいつも私にかまってくれないんだな」
「あのような無茶苦茶な男にかまってほしい女性もそう多くないからでしょう」
ころねの言葉に絢子は笑う。
「ふっ、じゃあ、私は追いかけるとするか」
「では後の処理はおまかせください。まずは手始めにこれを逮捕します」

ころねは気絶している栄子に手錠をはめた。

「ありがとう」



絢子はうなずくと、適当な移動手段が落ちていないか探すため、空母の残骸(ざんがい)に向かって歩きはじめた。

4　おしまいは完璧（かんぺき）？

望一郎（ぼういちろう）が向かっている場所ははっきりしていた。スハラ神の神殿（しんでん）だ。それは甲賀（こうが）の里の近くにある。飛んでいけばそれなりの距離（きょり）がある。

「転送ができずに悪かった」

ピーターハウゼンは珍（めず）しく殊勝（しゅしょう）な態度で詫（わ）びた。

「無理をさせるわけにはいかないからね。それより、最後になるかもしれないんだ。知っていることを話してくれないか？」

阿九斗（あくと）が寂（さび）しげに言った。

「ああ。もういい頃（ころ）だろう。魔王というのは、人間だが、人間ではない。体内のマナに調整が加えられて誕生する存在だ」

「そうか……。では、僕にも両親がいるのかい？」

「生みの親はいる。それは喜んでいい。もっとも、その後にやむなく捨てられたことは同情するがね」

「そいつはどうも。つまり、誰かが……黒魔術師と呼ばれる一派が僕や君を作ったと？」

「そうだ……とも言えるし、そうでないとも言える。神が意志を持つようになった理由はよくわかっていない。ただ、こう推測はできる。複雑になったネットワーク接続はその接続そのものが意志を持つようになる。そうして生まれた命……すなわち神は自我を持たぬ上に寿命がない。故に常に死にたがっている。人間はずっとそれに気づいて来なかった。そこでずっと昔、ある男が魔王というシステムを作った。魔王は神を殺し、神を成仏させることができる」

「成仏？」

意外な言葉に阿九斗は戸惑う。

「君たちの言葉で言えば、だ。自我を与えられ、この世界から意志を消し去ってくれる。難しい概念だ。だが、コンピュータにも霊というものがある、と言えば、君の世界の物語的に理解しやすくなったと思う。その自我を与えてくれるのが自同律。魔王と対になる存在だ」

「けーなのことか」

「そうだ。ただし自同律も魔王も何度でも生み出せる。もしうまくいきそうにない場合は、殺してしまい、また百年ほどを待つ。そんなことを神は繰り返してきた」

「人間も勝手なら、神も勝手か」

「そう言うな。そして私は神の死後、システムを維持するために作られた。私は自我がある。リラダンの彼女から聞いたことがあるだろう？　自我というのは身体を与えられ、立場を与えられると段々と固着し

てくるのだ。自我のある神が統治すれば世界はずっと以前のような争いにあふれた、しかし、人間らしさにあふれたものになるだろう。私を生み出した者はそう願っていたのだ」

　昔を思い出すようにピーターハウゼンは言った。

「それで君は争い事が好きなのか」

「勇猛（ゆうもう）な王とはそうしたものさ。君が神を殺して王になる。そういう道もまだある」

「君はそれを望んでいる?」

「できれば。だが、主よ、君の思う通りにしてくれればいい。もう十分に楽しんださ。歴代でも良い暴れぶりだった。大和（やまと）望一郎というジョーカーのおかげで全面戦争には少し足りなかったが、ともかく勝ったのは君がはじめてだ」

「そうか」

　阿九斗は、寂しげなため息をついた。そして、こう続ける。

「先に謝（あやま）っておく。ごめんよ」

「ああ、何が起こるかわからないが、その先の言葉は言う必要はない。予感はあったさ」

　ピーターハウゼンは一際（ひときわ）大きく羽をはばたかせた。

「さぁ、ここから先は強敵が二人も待っている。楽しまなければな!」

○

他に誰もいない空の上で彼は待っていた。
ブレイブは腕を組んで、その名前通りの堂々とした態度で魔王を待ち受けていた。
距離を置いて二人は対峙し、その沈黙の重さに耐えかねたかのように口を開いたのはヒロシの方だった。
「もう一度聞く。なぜこんなことをする？」
「くどいね。僕のことを僕が終わらせる。それで世界が変革できるとすれば、それでいいじゃないか」
「その変化を望まない者はどうなるんだ！」
ヒロシが声を荒らげる。
阿九斗は下をちらりと見た。そこには深い森が広がっているが、少し開けた草むらがあり、そこに人影が見えた。
「あの子のことなら、なんとかできると思うよ」
ヒロシは下にゆう子を待たせている。それに阿九斗が気づいていることを知ったヒロシは、不快そうに首を振った。
「あんたはいつもそうだ！　誰にも言わずに勝手に納得して！」
「言ってもわかってもらえていないんだ。もういいだろう。そこを通してもらうよ」
「勝手なことを！」

ヒロシが一気に加速する。
それに対し身構えた阿九斗にピーターハウゼンが聞く。
「どうやって勝つつもりだ？　対魔王モードのマナキャンセラーは最初から使っているだろう。そうなると、かなり厳しいぞ」
「突っ込めばいい。一撃で決まるよ」
阿九斗はこともなげにいった。
ピーターハウゼンは驚く。
「ほう。頼もしい。策があるのか」
「ないけどね。策といえば無策なのが策だな」
「……なんでもいいさ。信じたぞ」
ピーターハウゼンがにやりとした。そしてこちらも加速した。
不思議な色のふたつの流星が空で激突した。閃光がしたのは一瞬のことだった。
「そんな……！」
ヒロシは絶句した。その右手の高周波ブレードが阿九斗の左腕に食い込んでいた。そして左手の中にシールドしておいた高温プラズマ球が阿九斗の右腕に押し当てられている。
阿九斗は本当に無策で突進しただけだった。両腕を拡げてヒロシの攻撃をそのまま受け止めている。
「がぁああ！」

しかし阿九斗は悲鳴をあげていた。マナキャンセラーが身体の機能を凡人（ぼんじん）のそれと同じにしている。左腕は半ば切断されて垂れ下がり、そこからは鮮血（せんけつ）が吹き出していた。右腕は高温プラズマに接した部分が瞬間的に蒸発している。その右腕が前に押し出されるとまるで腕が段々と消失していくかのようだった。

想像を絶する痛みがあるはずだ。しかし、阿九斗はそれでもヒロシを抱きかかえるように前に出た。

「も、もうやめてくれアニキ！」

ヒロシは悲痛な叫び声（ごえ）をあげた。高周波ブレードを停止させ、高温プラズマを消失させようとする。が、その時バイザー内にブレイブのスーツを管理するコンピューターの声が響いた。

《シールド内に異物を取り込んでしまったプラズマの消失は不可能です。シールドを解放してください》

「そんなっ……」

ヒロシは左手から高温プラズマ球を離そうとした。が、その瞬間（しゅんかん）、阿九斗が右腕を押し込んできた。

「や、やめてくれ、アニキ！」

反射的にヒロシはプラズマを解放してしまう。熱の暴風が吹き荒れ、その中にヒロシも阿九斗もピーターハウゼンも巻き込まれる。

「うわぁあ！」

ブレイブのスーツは身体の周囲にシールドを張（は）り巡（めぐ）らしている。ピーターハウゼンはマナがなくとも熱に耐える身体を持っている。一方、阿九斗は生身だ。

「アニキ……！」
しかし、阿九斗の顔はヒロシの目の前にあった。
阿九斗はその身体を強引にブレイブのシールドの内側に押し込んだのだ。
《シールド過負荷。バッテリー残量希少。生命維持モードに移行します。通常モード以降可能となるまでの充電には三十秒かかります……》
声が響いた。
阿九斗がにやりとした。
その両腕のほとんどと、プラズマの爆発で失った半身と引き替えに、これを狙っていたのだ、とヒロシは気づいた。
「そ、そんな……！」
ヒロシと阿九斗は抱き合ったままで、下の森へ落ちていく。
「君は残酷なことができる人じゃないってわかっていた。僕が残酷なまでに身体を痛めつければ、君は躊躇するだろう。無理をさせればバッテリーが切れる。そういうシステムだとは知っていたしね」
落下しながら、阿九斗の身体が再生していく。マナを取り込むことができるようなったのだ。
「ひでぇ……ひでぇよ、アニキ……」
ヒロシが涙を流しはじめた。

「あんた、どうしてそんなに性格が悪いんだよ……。やっぱり魔王だよ、あんた……」
「性格が悪いのは自覚してる。僕が帰ってこなかったら性格が悪かったと語り継いでくれ」
「帰ってこなかったら？」
「神を殺すってことは、僕の終わりでもある。そういうことさ」
阿九斗はヒロシの頭に手をかけた。そして、ぐい、と力を入れ、ブレイブのスーツのヘルメットを一気に破壊してしまう。
「うわ……！」
ヒロシは悲鳴をあげた。その顔が露わになる。
「君の正しさだって理解はしているつもりさ」
阿九斗が言った。
二人は地面に激突する。
「う……」
ヒロシはうめいた。スーツが使えない以上、無力のまま地面にぶつかるはずだったが、阿九斗にその身体を支えられていた。
阿九斗は足でしっかりと大地を踏みしめて立っており、抱えていたヒロシを降ろす。
駆け寄ってきたゆう子が、阿九斗を見て短い悲鳴をあげた。
「心配ない。生きているよ」

阿九斗は怯えるゆう子に言った。

と、それまで座っていたヒロシが立ち上がり、何かを決意したようにその顔をゆう子に向けた。

「え……」

ゆう子が驚いた顔になる。

「その……隠してるつもりはなかった。偶然なんだ。でも……わざわざばらす理由もなくって……」

ヒロシはしどろもどろになる。

と、ゆう子は笑いはじめた。

「あはは、馬鹿ね。その中身が誰でも、あなたはかっこよかったよ」

その様子を見て、阿九斗はその場を離れようと歩き出す。が、阿九斗が動いたのに気づいたゆう子は、びくりとして身体を硬くした。

「知ってるさ。僕がいると、君は正常じゃいられない」

阿九斗は上空に手をあげてピーターハウゼンを呼ぶ。

「待ってくれ！」

ヒロシが呼び止めた。

阿九斗が振り返ると、聞く。

「どうして彼女の身体から魔獣のマナを取り除けないんです？」

「そのマナの活動をスハラ神によって制御されているからだよ。僕が手を出せば、彼女の身体は危ないだろう」

「でも、それなら、なおさら神が死んだなら……！」

「僕は……いや、彼が、神を引き継ぐ役目を負っている」

阿九斗はピーターハウゼンを指さした。

「じゃ、じゃあ、最初からそうするつもりで……。でも、それじゃあ、魔王が世界の頂点に立つことになってしまう……。そ、それからどうするつもりなんです、アニキ？」

ヒロシは嫌な考えに襲われ、慌てて声をあげる。

しかし、それに阿九斗は直接は答えず、ただ一言だけぼやいた。

「そりゃあ、仕方のないことは仕方ない。誰かがやらなくちゃいけないんだ」

○

望一郎はスハラ神の神殿に足を踏み入れた。抵抗があったことは、彼が通ってきた道に何人かの衛士が気絶していることを見ればわかる。

かつて照屋敬三が職務を果たしていた静謐な空間に、今はけーなを抱きかかえた望一郎が立っている。

「その者は自同律」
「そして、その者と単一者の契約（けいやく）を果たすべく来たお前は、何を望む？」
声が聞こえてきた。神木の背後から巫女（みこ）が二人、するりと姿を現した。
スハラ神のサポートを行うリラダンである。巫女姿の美女二人は、しかし、この場では武器を持っていた。長刀と弓をそれぞれ構えている。
望一郎は問いを笑い飛ばした。
「知れたこと。神を管理する。意志を持つ神は不要だ」
二人の巫女はその言葉を聞くや、左右に跳んだ。
「それならば、我らは」
「お前を止める」
「だが、遅（おそ）い」
望一郎はけーなを上に軽く投げ上げると、鋭く左右に手を振った。
巫女二人が同時に動きを止める。
落ちてきたけーなを優（やさ）しく受け止め、望一郎は前に歩きはじめた。
「待て」
「自同律は我らの意志を連れて宇宙の再誕を果たすためのもの」

　巫女は言ったが、彼女らは口をきくことしかできなかった。身体は上半身と下半身とに切断されて転がっている。
「それが他次元からの侵略（しんりゃく）を防ぐためだろうが、他次元へ進化するためであろうが、人間をないがしろにしてどうする。この神のやり方では人類はこの世界から死滅（しめつ）するぞ」
「違う。人間のデータは残っている」
「情報を保存した量子ネットワークは次元を超える」
「だから、そのどこに人間がいるのだ？」
　望一郎は苛立（いらだ）ち混じりの声をあげ、右手を振るって一体のリラダンを黙らせた。
「神が死んだ人間を連れて遠くへ行く。当たり前の宗教観だ。昔から人類はそれを願っていた。我々はそれを知っている」
　一体はまだ話し続けた。
　望一郎は首を振った。
「その物語を維持することに異存（いぞん）はないが、それならば神の意志はなおさら不要だ」
　そして、神木の前に立ち、望一郎はけーなをそっと降ろした。
　けーなは気を失っていたが、望一郎の足にもたれて静かに座る。
「さぁ、神が自同律に逆らえないことは知っているぞ。単一者の契約の場を用意しろ」
　望一郎が告げると、神木が左右に割れはじめた。

その奥（おく）には空間が広がっていた。どこまでも無限に折り重なった木造建築、というのがふさわしいように思えた。マナの転送に使用される空間構築の技術が応用されているのだろう。本当に無限ではないのだろうが、朱（しゅ）に塗（ぬ）られた木造の回廊（かいろう）が白木の階段で迷宮（めいきゅう）のように接続されている。それは複雑なネットワークそのものであるように見えた。

けーなが目を覚まし、その回廊を見上げた。

「ああ……来てしまったのですね！」

うっとりしたような、しかし、絶望してもいるような、そんな不思議な声を彼女はあげ、手を組んで望一郎を振り返る。

「ねぇ、お願い、やめてくださいな！　まだ間に合いますもの！」

望一郎は困ったように微笑（ほほえ）む。

「聞いてください。そうしなければ、人間はこの世界から消えてしまう」

「いいえ！　間違いです！　あなたのやり方では一回性の呪縛（じゅばく）を逃（のが）れられませんもの！」

「な……」

望一郎はここではじめて唖然（あぜん）とした。

「ねぇ、想像してみてくださいな！　意志のある神がいなくなり、それからあなたのいた時代へと人は流れていく。その方向は違うかも知れないけれど、きっと結果は同じです。だれかがあなたを……そう、望一郎

さんを倒しに来てしまう。人間が人間の意志で魔王になって、神になりかわったあなたを殺しに来る。それだけのことになってしまう」

　けーなは言った。

　望一郎の背筋に冷たいものが走った。汗(あせ)だった。彼はけーなの言葉の意味をはっきりと認識(にんしき)できた。そして、その意味がわかるにつれ、自分の行動の愚(おろ)かしさに身震(みぶる)いがした。

「あなたは人類の最後の生き残りで、その希望を背負(せお)って、そして愚かさを是正(ぜせい)しようとしました。それはあなたのなってしまった立場を考えれば傲慢(ごうまん)ではありません。あなたは本物の英雄(えいゆう)です。でも、きっとあなたが何度やり直そうとしても、同じ結果がめぐってきてしまう」

　けーなの顔を望一郎は見返した。

　その表情は、かつての恋人(こいびと)で最後の自同律だった須藤理夢(すどうりむ)にそっくりだった。

「なぜ……なぜ、私じゃないんだ！」

　望一郎は苦悶(くもん)した。

「泣かないで。あなたは……」

　けーなは何事か言いかけたが、望一郎がその言葉を押しとどめた。けーなの腰(こし)に腕(うで)を回すと、強引に神木の中に引き込もうとする。

「いやぁ！」

「結果が同じなら、せめて……」

望一郎は抵抗するけーなを押さえつけようとしたが、ふと動きを止めた。

神殿に人影を認めたのだ。

けーなも振り返り、その姿を確認する。そして、顔をぱっと明るくして声をあげた。

「あーちゃん！」

「普通はこういうときに格好のいいことを言うものだと思うけれど、僕とあなたは似ているところがある。だから、そういう情けないところも少しわかるんだ。そうなると何も言えないね」

阿九斗が歩を進めてきた。

望一郎はけーなを離し、すべてをあきらめたような、すっきりとした表情になる。

「私はずっと魔王に悩まされてきたが……君のような奴ははじめてだ」

「切ないね。結局、僕らは人間の作ったシステムの後始末をしているだけなんだ。どんな仕事もそんなものなのかもしれないけれど」

「皮肉だな。何百年も生きてきて、ようやく理解者を見つけた」

「目指すことが似ているからね。でも、どこが違うんだろう、本当に」

「私にはわかるよ。女運さ」

望一郎は笑う。

阿九斗はきょとんとした。

「僕の女運は確かに悪いけどね」

「はは……そういうところは本当に私と違う。さて、本格的に君が嫌いになれた。勝った方が我を通そう」

望一郎は上に手をのばし、虚空から巨大な剣を引きずり出した。

「結局、そうするしかないね」

阿九斗は前に踏み出そうとしたが、そこを予告無く望一郎が襲った。大剣が唸りを上げて横に飛ぶ。

「おお！」

阿九斗は後方に跳んでそれをかわしたが、望一郎は容赦なく連続攻撃を放ってくる。

空気を切り裂く炸裂音と、阿九斗の身体と服の一部が飛び散る。阿九斗はなんとか致命的な一撃は避けられてはいるが、防御を行う腕とかばいきれない部分は無事ではない。

「小癪にもかわせるようにはなったか！」

最初に戦ったとき、阿九斗はガードすることしかできていなかったが、今は腕で剣を逸らす程度のことは行えている。そのおかげで後方に吹き飛ばされずには済んでいるが、反撃できないことに変わりはない。

「それでもやはり隙が大きすぎる！」

望一郎はそう指摘し、大剣で足下を横薙ぎにした。

「う！」

この意外な攻撃に阿九斗は対応できず、がくりと膝を屈した。

「あーちゃん！」

けーなが声をあげて前に出ようとする。しかし、阿九斗が目でそれを制した。

「あ……」

けーなは動きを止めて息を飲む。



阿九斗は完全に動けずにいた。足の関節部分を砕かれていた。その部分も再生が行われてはいるが、完全に立ち上がれるようになるまでの時間を望一郎が許す気配はなかった。

「今は学長をやっているあの男に戦い方を少々習ったようだな」

望一郎は言い、とどめの一撃を放つため、大剣を振りかざした。

「習ったけれど、どうも化勁というものを間違えて覚えたみたいだ」

あきらめたように阿九斗は首を振った。

「死の間際にとぼけたことを言う男だ。しかし、それを最後の言葉として聞いておく！」

望一郎は大剣を振り下ろした。

その刃は正確に阿九斗の頭を貫いていた。

いかに今の阿九斗の身体が再生能力を持っていようとも、いかに阿九斗の身体が強靭であっても、到底耐えられない一撃だった。

大剣は阿九斗をまっぷたつに両断していた。

……はずだった。

「！」

感触の異常に望一郎が驚愕する。

大剣は神殿の床に突き刺さっていた。が、剣は同時に阿九斗の身体を貫いてもいる。

「ちぃ……！」
望一郎は即座に大剣を捨てて後方に跳んだ。
阿九斗の姿は確かにそこにある。が、それはまるで立体映像であるかのように、剣によって何の影響も受けていなかった。
「まさか……！」
望一郎は声をあげる。
本物の阿九斗がすぐ背後にいることに気づいたのだ。
「はぁ！」
阿九斗は振りむいた望一郎の腹部に拳を叩き込んだ。
衝撃波が望一郎の背中にまで突き抜け、彼の身体がくの字に曲がる。
「ば……馬鹿な……」
呼吸困難に陥りつつも望一郎がうめく。
「習った中でこの手品だけはうまく使えた」
阿九斗は言った。膝を突いて大剣に両断されていた阿九斗の姿がぶれて消える。
「マナスクリーンを作り出し、そこに鏡像を投影する。それだけのまさに手品だ。手を合わせての戦闘なら一回だけ。飛び道具なら相手が気づくまで、と学長は言っていた」
「そ、そんな馬鹿な手に……」

「僕も馬鹿な手に引っかけられるのは嫌いだ。気持ちはわかるよ」
阿九斗はそう言ったが、即座にもう一発を望一郎に叩き込んだ。
今度は声も出せずに望一郎の身体が曲がる。
さらに阿九斗は望一郎を殴(なぐ)りつけた。怒(いか)りや恨(うら)みの感情でなく、相手の動きを止めるためだけに殴り続ける阿九斗の表情には切なさに似た感情が宿っていた。
やがて望一郎は気を失って倒(たお)れた。
阿九斗は何かが間違っている、とでも言うように軽く首を振った。
と、そこに冷静な声が響(ひび)く。
「魔王よ。今こそ自同律と単一者の契約を」
倒れた巫女の一体が阿九斗を見ていた。
阿九斗は無言でけーなに歩み寄った。
「あーちゃん……」
けーなは阿九斗を見つめた。
阿九斗はけーなの手を取った。
「ずいぶん大変なことになってしまったね」
「そうだね。でも、まだ、これから」

阿九斗とけーなは見つめ合い、何も言わないでも互いにわかりあっているのか、同時にうなずいて巫女の方を振り返った。
「契約はしないよ」
「そうすることはもういつでもできるから」
　二人の言葉に巫女はリラダンらしくなく狼狽する。
「ば……馬鹿な！　それでは何のために……」
「皆にわかるように神を殺してやるのさ！　この場を破壊し、ネットワーク端末としての神の機能を停止させてやる！」
　阿九斗は言い、上空に手を伸ばした。
「そ、そんなことは無意味だ……。たとえ端末が死んでも、神の本体はネットワークの中の意志なのだから。ただスハラ神という機能と蓄積されたデータの一部が消えるだけだ。そんなことをしたら混乱が起こるだけで……」
「知ってるさ」
　巫女の説明を阿九斗は遮った。
「それでもそうすることで目が覚める人もいるだろうさ」
　阿九斗が言うと、阿九斗の周辺にマナが集まりはじめた。阿九斗が目覚めた初期の頃にマナを制御できなかったが、その時と同じように純粋にマナを爆発させるつもりだ。

「お前も消えるかもしれないのだぞ。そんなことがやりたかったのか？　それでどうなるというんだ。それこそ何も変わらないぞ……」
　巫女は言った。
「いや。変わるね。少なくとも魔王の反逆の物語はおしまいだ。そうなってはじめて人は、自我のない意志である神と向き合うことが出来るようになる」
「お前の意志は理解した。そうさせる以前に自同律もろとも消えてもらう。参考にして次の魔王に期待することにしよう……」
　巫女がそう口にすると、神殿が振動しはじめた。阿九斗が起こしているマナの波動によるものではなかった。
「防衛システムを起動した。端末である神木そのものをユニットとして移動させる」
　と、それまで中央から開いていた神木が再び閉じる。そして、巨木に似たそれは全体にマナの輝きを発しつつ浮遊しはじめる。
　神殿が崩れはじめた。巨木を中心に建てられていた建造物の屋根が崩れ、続いて阿九斗たちの立っていた床も崩れはじめる。
「きゃ！」
　悲鳴をあげたけーなを阿九斗は抱きかかえる。床下はそれほどの高さがあるわけではないが、崩壊に巻き込まれてしまえば、落下してくる建材の下敷きになってしまうことは確実だった。

「あーちゃん……！」

跳（と）び上（あ）がろうとした阿九斗を制し、けーなが背後を指さした。そこには望一郎が倒れている。

「……わかった」

阿九斗はうなずき、望一郎の手を握（にぎ）った。そこで意識を取り戻（もど）したのか、望一郎が顔をあげる。意外そうな顔をする望一郎に、阿九斗はうなずいてみせた。

「行くぞ」

そして阿九斗はジャンプした。崩れてくる建材を蹴（け）って屋根の上にあがる。

「まだ人は神を必要としている。そして神も人を必要としている。そのふたつが交わる瞬間を邪魔（じゃま）させるわけにはいかない……」

下から巫女の声が不気味に響いてきた。見ると、半身に切断された巫女の、その人形めいた首が崩れる床に巻き込まれていくところだった。

「くっ……」

阿九斗はそちらから顔を逸らし、上空を見上げる。

浮遊する神木は、すでにかなりの距離を上昇（じょうしょう）していた。

「ピーターハウゼン！」

阿九斗はその名を呼んだ。

それに答え、上空で待機していたピーターハウゼンが舞（ま）い降（お）りる。

「最後の仕事だな！」

「ああ、友人として最後の仕事を頼む」

阿九斗はけーなと望一郎をその場に残し、自らはピーターハウゼンの背にまたがった。

「待て。君は本当に自らの命をかけてそうするつもりなのか？」

望一郎は神木を指さし、ただ前を向いている阿九斗に聞いた。

「そうするつもりさ。馬鹿げた目的を持った存在として生まれたんだ。最後に僕の意志で行動できるなら、それでいいさ」

阿九斗は振り返らずに言った。

「それでも結果は変わらないかもしれない。私が言われたように、何も変化せず、ただ人類は滅んでいくだけかもしれない。何が君をそうした方がいいと確信させているんだ？」

望一郎が聞く。

阿九斗はピーターハウゼンに飛び立つように指示した。

「信仰や自分から遠いところにある物語よりも、生活の中で他人と共感できることの方が強いとわかったからだ。システムが破壊されれば、人は人と向き合える」

そして、けーなの方を振り返った。

「けーなが言っていたように、一緒にご飯でも食べれば世界は平和になるんじゃないかってことさ」

そう言って、ピーターハウゼンを力強く舞い上がらせたのだが……。

「ご飯！」
いきなりけーなが嬌声（きょうせい）をあげた。
「え？」
阿九斗はそのけーなの様子の変化に戸惑うが、ピーターハウゼンはもう空高く舞い上がっている。浮遊速度の遅い神木はもう目と鼻の先にある。
しかし、驚いたことにけーなは自ら空に舞い上がり、阿九斗を追いかけてきた。
「あーちゃん、駄目（だめ）だよ！　ぼーんってやっちゃ駄目だよ！」
「な、何だ？　まさか自同律の時と意識が違うのか？」
ピーターハウゼンと並んで飛ぶけーなに阿九斗は言うが、けーなはそんなことを聞いてはいなかった。
「あーちゃん、これからどうするつもりなのか言いなさい！」
けーなは戸惑う阿九斗にぴしゃりと言った。
「いや……だから、これから神木に突っ込み、その機能をピーターハウゼンに移す。そしてこれを破壊するつもりだ」
阿九斗がそう答えると、けーなは首を横に振った。
「駄目だよ。だって、あーちゃん死ぬ気でしょ？」
そうはっきり言われると、阿九斗としても困ってしまう。

「いや、そうと決まったわけじゃない。ただ、危険には違いないし、神殺しを達成してしまえば、僕(ぼく)には居場所がなくなる。だから……」

「駄目だよ！　馬鹿！　馬鹿！　そんなことさせない！」

けーなは激しく首を振った。

しかし、その時、ピーターハウゼンの悲鳴のような声が飛んでくる。

「主よ、もう遅い！　神木に突っ込むぞ！」

「仕方ない……けーな、どいて！」



阿九斗はけーなを突き飛ばす。
ピーターハウゼンから距離を離されてしまったけーなだったが、それでもあきらめるつもりはないのか、飛びながら服を脱ぎはじめ、その姿を消した。
こうなると阿九斗にもけーながどこにいるのかわからなくなる。
「……行くぞ！」
しかし、阿九斗は行動予定を変えるわけにはいかなかった。
ピーターハウゼンが、螺旋が刻まれた鉄杭を吐き、神木の胴体に大穴をうがつ。そして、すぐさまその内部に突入した。
「内部は疑似異空間だ。我々も相手も実体がある。攻撃を受ける可能性があるぞ」
ピーターハウゼンが警告した。
内部は望一郎が神木を開いた時と同じ木造の迷宮だった。視界のすべてが朱塗りの柱と白木の回廊で埋め尽くされている。
「機能の引き継ぎを」
阿九斗が言うと、ピーターハウゼンがその胴体の各部からケーブルをするすると四方に伸ばしはじめた。回廊の中にある接続部に次々とそれを差し込んでいく。
「機能引き継ぎが終了すれば、服部ゆう子のような者は神から解放される。だが引き継ぎにはしばらくかかる。それまで……」

言いかけたピーターハウゼンの言葉が止まる。
周囲を見回した阿九斗もその意味を理解した。
無限に続くかのような回廊のありとあらゆる場所から巫女姿のリラダンが顔を出していた。全員が阿九斗とピーターハウゼンの方に人形のような目を向けている。
「実体……なんだよな」
阿九斗が小声で聞くと、ピーターハウゼンがうなずく。
「無限に見える回廊だが、実際には有限の広さだ。もちろんリラダンも数は多いが無限というわけじゃない」
しかし、圧倒的に不利な状況には違いない。阿九斗は動けないピーターハウゼンを守らなくてはならない。ケーブルの一本でも切断されてしまえば、機能の引き継ぎは果たせず、ゆう子や、その他のスハラ信者たちは命の危機にさらされることになる。
もちろん、今は魔王と神は共犯関係にはない。阿九斗とピーターハウゼンは神にとってはただ殺せばいい異物だ。
「畜生(ちくしょう)、大見得(おおみえ)切っておいて何もできずに終わるのか!」
阿九斗は怒鳴る。が、ピーターハウゼンの方は豪快(ごうかい)に笑う。
「まだだ。私とて、動けないからといって戦えないわけではない。一矢報(いっしむく)いようじゃないか。主は行く場所がないと言ったが、すべての神の端末を破壊するまで戦い続ければいいのだ!」

「ふん……それもいいか」
阿九斗がつぶやくと、それが合図だったかのように、無数の巫女たちが一斉（いっせい）にピーターハウゼンに襲いかかった。
獲物（えもの）にたかる凶暴（きょうぼう）な蟻（あり）のように巫女たちはピーターハウゼンの身体にまとわりつく。阿九斗もそれを引き剥（は）がそうと飛び掛（か）かるが、その背後から巫女が次々と襲いかかってくるため、それの相手をするだけで手一杯（ていっぱい）になってしまう。その攻撃には容赦がなく、人間と本質的にコミュニケーションが取れない異質な存在であることが嫌でも実感できる。
「このような戦い方をする奴が人を導くなんてな！」
阿九斗が怒りをあらわにする。マナが増大し、阿九斗の周囲に渦が巻きはじめる。
しかし――。
「がぁあああああ！」
ピーターハウゼンが悲鳴をあげた。
「どうした？」
阿九斗はそちらに目をやる。
ピーターハウゼンが空母と激突（げきとつ）した際にできた傷が光を発していた。
「しまった……」
阿九斗はピーターハウゼンの苦痛の理由をさとった。

スハラ神の機能引継ぎ、戦闘、そして阿九斗のマナの制御、そのみっつを同時に行う過負荷がピーターハウゼンの能力の限界を超えたのだ。
「処理は完遂する！　構わずにやれ！」
　ピーターハウゼンが苦悶の色の濃い、だが激しく雄々しい声をあげた。
「しかし……！」
「元より互いに死ぬ覚悟だっただろうに！　我々だけが犠牲になり、他の者を救う決意をしたのだ。安全策をとるなど馬鹿にも程がある！　主よ、あなたのマナ制御のリミッターだけは外しておく。そうすれば私に負担もかからず、あなたは力を存分に奮える！　その代わり……」
「僕の身体の保証はないというわけか！　フェアでいいじゃないか！」
　阿九斗は再びマナを自らの身体に集中させはじめた。
　その身体が発光しだした段階で、阿九斗に接近していた巫女の身体が衝撃に弾き飛ばされるようになっていた。
「おおおおおお！」
　集中するマナが制御できなくなっていることを阿九斗は自覚していた。どう抑えつけようとしても、力の奔流も、昂ぶる感情も止められない。
　その力のままに阿九斗はピーターハウゼンにとりついている巫女たちを吹き飛ばした。自由になったピーターハウゼンは無くなった障害に歓喜の声をあげる。

「スハラ神の機能は奪い取った！　このまま随時、人々を管理より解放する！　これで心置きなくこいつらを吹き飛ばせるぞ！」

　しかし、阿九斗の返事は無かった。

　阿九斗の身体はすさまじい熱を発していた。うずくまったまま動けずにいる阿九斗の身体が段々と床を溶かして沈み込んでいく。凄まじいエネルギーは疑似異空間そのものを溶かしはじめていた。

「おい……主！　主！　く……暴走は、もうこちらでも制御できないか！」

　珍しく戸惑いを顔に浮かべたピーターハウゼンだったが、その戸惑いは即座に恐怖のそれに変わる。

「疑似異空間を侵食されることを避けるために、疑似異空間そのものを閉じはじめた！」

　回廊が次々と折りたたまれるように潰されていく。巫女たちも容赦なくそれに巻き込まれ、空間とともに押しつぶされる。後には残骸も残らない。そこにあるのは無だけだ。

　その空間の折りたたみは凄まじい速度で阿九斗に迫っている。

「何とかして力を解放するんだ！　爆発させろ！　そうすれば神木を疑似異空間ごと吹き飛ばすことができる！」

　ピーターハウゼンは叫ぶが、阿九斗はまだ指一本とて動かせない。それを見てピーターハウゼンが首を振る。

「……やはり、難しいのか」

「ねぇ、どうして難しいの？」

「感情によってマナのコントロールは決定される。主は、まだ自分の力を解放することを恐れているのだ」
ピーターハウゼンはそう答えてから、誰に質問されたのか、と周囲を見回した。と、答えが返ってくる。
「だけど、あんなにやるって言っていたのに」
その言葉で、ピーターハウゼンは近くに透明になったけーながいることに気づいた。
「世界を変革するという意志は固いだろう。だが、その後の世界に彼自身が責任を持てないことが心にかかっているのだろう。彼自身は新しい世界を構築するための能力には全く欠けているからな……。それはいいが、速く逃げろ。このままでは巻き込まれてしまうぞ」
「だったら、ピーちゃんは何で逃げないの？」
「私はなんとかぎりぎりまで主のマナを制御して、その爆発を助ける義務がある。そうすることで主自身は救われる」
「じゃあ、ピーちゃん、死んじゃうの？」
けーなが驚いて声をあげる。
「そういうことになる。私と同じ性能の龍は今後も作り出せるかもしれないが、私と同じ行動履歴を持った、私と同じ自我の龍は私しかいないからね」
「そんなの嫌だよ！　あたしはこんな決着は好きじゃないもん！　こんなの単なる男の子が好きな決着の付け方だよ！」
けーながわめく。

ピーターハウゼンが優しく笑った。
「それなら、主に〝お前は間違っている〟と伝えてくれ。そして、神という物語を終わらせた後の世界で何が作り出せるか教えてやってくれ」
「ピーちゃん……」
けーなは姿を現し、ピーターハウゼンの頭を撫（な）でた。
「これを持っていてくれ。つまらないもので申し訳ないが」
ピーターハウゼンはその牙（きば）を一本、自らの意志でけーなの手の中に落とした。
けーなはそれを見てうなずくと、手の中にしっかりと握ったまま阿九斗の所に走っていった。凄まじい光を放っていた阿九斗だが、その光と熱の中にあっさりとけーなは入り込んでしまう。
苦しんでいる阿九斗を、裸（はだか）のけーなは優しく抱（だ）きしめた。そして、こうささやく。
「大丈夫（だいじょうぶ）だよ。あたしがあーちゃんのために、みんなが仲良くなれるように、いろいろ頑張（がんば）ってあげるから」
阿九斗が目を開けた。
そして、一柱の神が葬（ほうむ）り去（さ）られた。

○

「どうしてこんなことになったの?」
　けーなは聞いた。それは誰に向けた問いでもなかったが、答えはあった。
「それは難しい問いよ。本当に難しいわ」
　けーなは目を閉じていたし、そもそも気を失っていた。だから、声をあげているわけではない。そんな夢の中のような状況で、答えがあるというのはどういうわけだろう?
「あなたはだあれ?」
「あたしはあたし。あなたの中のもうひとり」
　自同律は言った。
「あたしの中のあたし?」
「そう。あたしはあなたが死んでも残る永遠のあたし。あたしがあたしであるという証のあたし。わかりにくいけれど、そういうことなの。だから、あなたを殺そうとした人がいたのよ。永遠のあたしに用事がある人は、あなたを殺して、あたしが都合の良い誰かの身体の中に入らないかな、って期待するから」
「そっかー。お互い大変だね」
「そうね。大変だわ」
　ふたりはひとしきり笑った。
「それで、あなたは何ができるの?」
「いろんなことができるわ。でも、何も出来ないかも」

「どっちなの？」
「さぁ？　あたしにもわからない。でも、あなたが何をしたいかは少しわかるわ」
「うん。それじゃあ、それができるかな？」
「そうね。大丈夫だと思うわ。あたしを好きになってくれた二人の男の子のために、彼らが望んだことをしてあげたいんでしょう？」
「うん！」
　けーなは元気よくうなずいた。
「時間旅行者には本当の意味での魂（たましい）の平穏（へいおん）を与えましょう」
「どういうこと？」
「彼の本当の望みは、かつてあたしだった人が未来に幸福になっていること。それを保証してあげましょう。そのために彼は神を支配しようとしたのだから」
「じゃあ、望一郎さん自身はどうなるの？」
「それは彼が決めることだわ。どこかの時代で落ち着くのか……それともこの先の時代でまた何かを起こすのか」
「違うよ。未来の人が幸福になっているかどうか、望一郎さんはどうやってわかるの？」
「信じてもらうしかないですわね。そう、望一郎さんには魔王に選ばれてしまった子を信じてもらうしか」
「あーちゃんを？」

「彼は未来を変えようとして決められた運命にあらがって行動したんですもの。その彼を信じてもらうしかありません。だから、望一郎さんの魂の平穏を本当に保証するのは阿九斗さんなんです」

「でも、あーちゃんは……」

「ええ。阿九斗さんは、このままだと人類の敵のまま。それは彼も望んでいない。だから、あたしがほんの少し、本当にほんの少しだけ、みんなの記憶を変えてあげます」

「みんなの記憶を？」

「ええ。今回暴れたのは、彼でなく、別の魔王だった、とそれだけ。本当にそれだけ変えてしまえば、彼も今まで通りに生活できるでしょう」

「あーちゃん、喜んでくれるかな？」

「それはどうでしょう？　今まで通りの生活というけれど、それは彼がずっと戦い続けるという意味でもあるから。それに彼にはさらに重い運命が待っているのだから！」

「あーちゃんなら大丈夫だよ」

　けーなは自信満々に言った。

「それは頼もしいわ。ずっと世界を監視してきたあたしも、神というシステムに命を与えることには躊躇してきたから。ねぇ、人の歴史の流れというのは、うっとりするほど素敵でしょう？」

　そして自同律とけーなの会話は途切れた。

○

空挺（くうてい）の装備が無傷で残っていたのは幸いだった。絢子（じゅんこ）はそれを借用して阿九斗の後を追っていた。しかし、探すのに手間取ったせいでずいぶん後（おく）れを取ってしまっている。

そして飛行中の絢子は、スハラ信者なら誰でも知っている神木が空中に浮遊しているのを目撃（もくげき）して驚愕する。もちろん、尋常（じんじょう）な事態ではない。

が、その次の光景はさらに衝撃的（しょうげきてき）なものだった。

神木が内側から爆発したのである。

おそらくは周囲数十キロメートルからでも確認できたことだろう。神木はそれほどに巨大（きょだい）な火柱となり、大地と天を繋（つな）ぐ柱のように屹立（きつりつ）した。

絢子は言葉を失った。

神の死をこれほどまでに意識させられる光景はなかった。火柱の周囲を黒い煙（けむり）の龍が、周囲をあざ笑うかのように黒い翼（つばさ）を拡げていたのである。絢子はピーターハウゼンを知っていたから、それが彼のシルエットであるということはすぐにわかったが、そうでないものにとってはこれ以上ない悪魔的（あくまてき）なイメージに映っただろう。

衝撃波のリングが一瞬（いっしゅん）にして帝国（ていこく）全土を覆（おお）うかのように拡がり、その音を雲の向こうまで響かせた。

「なんということだ！」

絢子は迫ってくる衝撃波を避けて地上に降りたが、それでも周囲の太い立木が風によってきしむのを聞いた。ソハヤノツルギを地面に突き立てて身体を支えたが、そうでなければ吹き飛ばされていたところだ。

それでも爆風自体は数秒で収まった。絢子はともかく様子を見るべく再び上空へ。

と、その瞬間、不思議なものを彼女は見た。爆心地から何かが上空に向かって立ちのぼっている。それは微細な粒子の光の柱だった。その光は薄い雲のようになって世界全体を覆うように拡がっていった。

「……本当に何があったんだ？」

絢子は思わずそうつぶやくと爆心地に急ぎ、そこにあったクレーターの中心部に阿九斗とけーなの姿を認めた。

「大丈夫か、二人とも……」

そう言って絢子は駆け寄る。阿九斗がけーなの上に覆い被さるように倒れていた。

「起きろ。無事か？　聞きたいことが山ほどある。お前は何をした？　そしてあの大和望一郎とか言うのは……って……」

絢子はそこで絶句した。

「あ！　絢子ちゃんだ！」

けーなが無邪気に言い、もぞもぞと身体を起こした。やっほー、と手を振る。

「え……？」

阿九斗も身体を起こした。絢子の方を見る。
「ば、馬鹿っ……！」
絢子は顔を赤くして手をバタバタとさせた。
阿九斗は、そこでようやくけーなが全裸（ぜんら）であることに気づいた。
「うわっ……ちょっと……」
「いやぁああ！」
けーなは身体を隠そうと阿九斗に抱きつく。
「馬鹿っ！　何をやっている、破廉恥（はれんち）な！」
絢子は自分の上着を脱いで阿九斗とけーなに投げる。そして、顔を背（そむ）けた。
「こんな時に何をやっている！　大体、何が起きたかわかっているのか？　神が……神体である神木が爆発したんだぞ！」
「そりゃあ、僕がそうしたいと思っていたのは君も知っているだろうに」
阿九斗がぼやくように言うと、絢子は驚いて振り返った。
「じゃ、じゃあ、これは……」
「そうだよ。これでスハラ神は消えた。データがなくなっただけだけれど、誰もが神が単なるシステムであると強く意識したはずだ。これで世界が変われば……」
そう言って、阿九斗は口ごもった。

「……だけど、僕は、これで君とは敵同士になってしまったわけだ。ああ言ったけれど、約束を果たせなくてごめん」
阿九斗がそう言うと、絢子は顔を赤くした。
「あ、あれだ、ああ言った、というのは、大切にする……とか、そういうことか？　あ、あのことなら気にしなくてもいい。こちらも妙な気分で口走ってしまったことで……」
「気になくていいと言っても、気になるよ。だって、これで僕は完全に反逆者だ。君は服部家を支えなくてならない身だ。僕のことは忘れて……」
阿九斗が言いかけると、絢子はいきなり阿九斗の手を握った。うつむいたままだったが、その手にはしっかりと力が込められていた。
「そ、そんなことを言うな。実は、私はお前のために家を捨てると家の者に宣言してきた。だから、だから……」
絢子は顔をあげ、阿九斗の顔を正面から見据えた。さすがに阿九斗もこれにはどういう意味があるか悟ったように息をのんだ。
が……。
「それは僕の思想に賛同してくれたということでいいんだね？　君を大切にするよ。そう、君の意見も聞きいれるし、君が立場を失わないようにできるだけ……」
阿九斗が最後まで言う前に、峰打ちのソハヤノツルギが叩き込まれた。

「なんだ、結局、お姉ちゃん、ダメなんじゃん」
　そこに背後から声が飛んできた。ゆう子とヒロシが歩いてきたところだった。ゆう子は気楽そうに、そしてヒロシは照れたような顔をしている。
「な、何を言うゆう子！　そんなんじゃ……って、お前、身体はいいのか？」
　絢子が振り返って表情を変えた。
　ゆう子は両手を拡げて見せた。
「ぜんぜんおっけー。前より体調はいいみたい」
　そう言ってゆう子は阿九斗に近づくと、その肘で阿九斗の横腹をつつく。
「家柄とかどうでもいいんで、この姉をなんとかしてくださいよ、大将」
　ゆう子はいたずらっぽい調子だったが、これには阿九斗も絢子も驚く。
「お、おい、大丈夫なのか？　こいつに触れて」
　絢子は驚きに目を丸くしながら言う。ゆう子は不思議そうに首をかしげた。
「どういうこと？　だってこの人、家にも来たじゃん。そんでお姉ちゃんが婚約断られて逆上したの」
「ぎゃ、逆上……はともかく、だってこいつは魔王……」
　体内の魔獣のマナが消えたかもしれないが、精神的なわだかまりが消えるものでもあるまい。阿九斗に拒否感はないかもしれないが、きさくに触れる仲にはすぐになれるものでもないはずだ。
　しかし、ゆう子の次の言葉は、衝撃的なものだった。

「魔王？　ああ、あの爆発で死んだんだろうね。だって阿九斗さん、風紀委員として戦って、魔王を倒すのにも貢献したんでしょ？　かっこいいよね。ほっとくなら私がアプローチしちゃおっかなー」

　ゆう子が絢子とヒロシに見せつけるように言い、にやにや笑いとともに一回転して見せたが、当の絢子もヒロシも驚いた顔で絶句するばかりだった。

「こ、これは、つまり……」

　阿九斗は、はっとしてけーなを見た。しかし、けーなは絢子の上着だけを着て、にこにこと阿九斗を見上げているばかりだった。

○

「阿九斗様！　ああ、生きてらっしゃった！　これを第一歩として世界征服を一緒に頑張りましょうね！」

　不二子の反応はまるで変わっていなかった。荒廃した学院にこっそりと戻った阿九斗は、本尊の無くなった地下祭壇の前でべったりと不二子に抱きつかれていた。

「せ、先輩……だから、離れてください。世界征服はともかく、妙なことになってるんですから」

　阿九斗は抗議した。

「妙なこと？」

皆の記憶が改変されているらしいことを阿九斗は告げた。これには不二子もさすがに研究者としての血が騒いだらしい。阿九斗の腕にからみついた格好のままではあるが、マナスクリーンを操作して情報をさぐりはじめる。

「……面白いことになってますわね。あの戦闘は、誰か別の魔王が引き起こし、そこで死んだことになっていますわ。コメントを見るに、阿九斗様が魔王だと思っている者はいないということに……」

「じゃあ、僕は……」

阿九斗が、ぱっ、と顔を明るくする。不二子は不快そうに眉をひそめた。

「喜ばないでいただきたいわ！　せっかく、せっかく世界は改革されつつあるのに、その中心人物たる魔王が記憶から消えているなんて！」

「僕が中心でなくとも、ちゃんと世界は改革されますよ」

解放された、という悦びに阿九斗は顔をほころばせた。確かに世界には阿九斗が望んだ通りの世論が芽生えてきているようだった。神はシステムであり宗教的に崇拝することは権力者による不当な支配を招くことになると。

「いいえ！　今こそ立ちましょう！　まだ力を失ったわけではないんでしょう？　大丈夫、わたくしがしっかりと阿九斗様を男にして差し上げますわ！　手始めに、まずはこちらをお立たせになりまして……」

不二子がいきなり阿九斗を押し倒す。

「うわっ！　ちょっと、先輩、そういうのは……」

「いいえ、遠慮なさらずに。世間がどう思おうとも、わたくしたちには改革後の世界に責任がありますわ！　ですから、早く跡継ぎを作ることもその責任のひとつかと……」
「そんな無茶苦茶な……！」
「おほほほほ！　そんな理屈をおっしゃらないで、ほーら、ほーら」
「こら」
阿九斗の身体をまさぐりはじめる不二子だったが、その動きはすぐに中断させられた。
後ろから、ごん、と殴られたのだ。誰も接近してくる気配はなかった。そんな風に遠くから殴れる者と言ったら一人しかない。
「ここも校内だ。不純異性交遊は許さんよ」
自らの伸ばした腕に遅れてリリィが地下室に入ってくる。
「会長……」
阿九斗が顔をあげた。
リリィは皮肉っぽい笑顔を見せる。
「キミにはまたやられたね。だが、どんな手品を使ったんだい？　記憶の改変なんてさ」
「僕にもわかりません。何か……僕の知らない大きな力が動いているとしか」
「ふん。まぁいいさ。ボクの行動がそれで変わるわけでもないしね。当面は学院の再建に忙しくなりそうだけれど……」

そう言って出て行こうとしたリリィだったが、ふと祭壇に目をとめた。
「おい、あの壺（つぼ）がないが？」
すると、不二子がぎょっとした顔になった。そして、ばつが悪そうにこう告白する。
「あ、あれは……あのゴムの化け物に盗（と）られたんですわ」
「それは本当か？」
リリィも慌（あわ）てる。
阿九斗が不思議そうな顔になった。
「壺……それはなんなんです？」
「キミの体細胞（たいさいぼう）を培養（ばいよう）したものだそうだ。悪用されなければいいが……って、そういうわけにもいかんだろうなぁ」
リリィはため息をついた。

5　外国からの転校生

——さて、これから新しい生活のはじまりだ。

阿九斗（あくと）は目覚めた。昨日のうちに確認しておいたのだが、生徒たちのほとんど——つまり絢子（じゅんこ）、ヒロシ、けーなたち以外——は阿九斗が魔王であると覚えてはいなかった。つまり、それはこれまでの生活からは解放されたということだ。

——人生の目標は変わってしまったけれど、やはり勉強して社会を内部から改革していくという部分に違（ちが）いない。ああ、それにしても、妙な心配のない朝というのはいいものだ。

「おはようございます」

　頭上の棚（たな）から声がした。定位置であるそこに寝（ね）ていたころねが声をかけてきたのだ。

「おはよう。そういえば、僕の監視任務というのはどうなっているの？」

「それがですね、命令が存在しないのです。このままでは自分は野良（のら）リラダンになってしまいます。マークト神に問い合わせればいいのですが、そうしたら、悲しいことですが、今度こそ本当にお別れになってしまうかもしれません」

　あくまで淡々（たんたん）ところねは言った。

——そうか、そりゃいいことばかりじゃないか。

「……問い合わせる時は言ってくれ。いきなり別れたくはないよ」

「はい。しばらくはこのままでいるつもりです。今回の大規模な情報改変事件について、リラダンで気付いているのは自分だけですので、それについて少し調べたいこともありますから」

「うん。ありがとう」

阿九斗は窓を開けて外を見た。

「うわ」

つい声をあげてしまった。校舎は半壊(はんかい)しており、校庭は穴だらけだ。おまけに空母の残骸(ざんがい)までもが転がっている。

「……あの戦いが夢じゃなかったってことだけはわかるな」

マナスクリーンを展開し、改めてニュースを見てみる。当然ながらどこもこの事件を大きく報じている。

《コンスタン魔術(まじゅつ)学院で激しい戦闘を行った魔王は、その後、スハラ神の本体である神木を破壊し……》

ニュースでは、被害(ひがい)の様子や、神が破壊されてしまいシステムに支障が出ること、それによって深刻な影響があることが報じられていたが、何より大きなことは……。

《魔王はこれによって死亡しました……》

――やっぱりそう思われているんだな。どうやら、これで終わったということらしい。

ごくわずかの切なさと、より大きなすがすがしさを抱いて、阿九斗は着替(きが)えを終えた。外に出る。すぐにけーなが駆けてきた。

「あーちゃん、おはよー！」

「おはよう」

阿九斗はうなずいてけーなを見返した。やはりけーなの態度はいつも通りだった。

——まさか……な。

彼女が今回のことを引き起こしたのではないか、と疑っていた。疑っていた、というよりは、確信に近いものがあった。

「ね、ねぇ、昨日のことだけど……」

「ああ、昨日大変だったね！」

けーなは無邪気に言った。

「いや……確かに大変だったけど、あれは君がやったの？」

「あれって？」

「この記憶の話とか……」

「あたしじゃないよ。あたしだけど」

わけのわからないことをけーなは言った。阿九斗は目を白黒させる。

「え？　何……」

「いいじゃない。大丈夫だったんだから。望一郎（ぼういちろう）さんも、あれから見ないけど、きっと大丈夫なんだよ」

あはは、とけーなは笑う。それを見ていたら、阿九斗もなんだか様々なことがどうでもよくなってきてしまった。

「そうだね。大丈夫ならいいんだ。ま、深く考えることもないか……」

と、そこに声がかかった。

「こら、何をのんびりしている。寮生は昨日の騒動のせいで朝食前に健康診断だぞ」

絢子だった。

「あ、絢子さん、昨日は……」

「馬鹿っ！　昨日のことは忘れろ！　ええい、それに何が絢子さん、だ。今更のように名前で呼び始めるなんて……」

絢子はぶつぶつ言いながら、阿九斗たちから離れるように歩きはじめる。

「ごめん、服部さん」

後をついて保健室に向かいながら阿九斗は詫びる。

「い、いや……その……お前が名前で呼びたいのなら、そうすればいいんだ。うん」

振り返らずに絢子は言った。

「あ、ありがとう」

素直に阿九斗は感謝する。

「ば、馬鹿っ。大体、お前が魔王でなければ、私だって素直に接することができる。だ、だから、これからは改めて……」

　そこで絢子は口ごもった。

「改めて？」

「い、言わせるな！」

　絢子は誤魔化した。そうこうしているうちに保健室に到着してしまう。

　――そうか。僕が魔王でなければ、いろいろとできることは増えるんだ。結婚はともかく、服部さんの家でも学べるし……。

　阿九斗がそんなことを考えていると健康診断の順番がやってきた。椅子に座って人工精霊の声を聞いているだけで良いので、まだぼんやりと考え事を続ける。

　――授業でも魔王の力とかはないんだろうな。悲しいけれどピーターハウゼンもいなくなってしまったし……。

《……魔王》

　――そうだ、魔王だ。魔王の力がなくなったなら、僕は勉強のし直しを……。

《……魔王》

　――そうだ。だから魔王のことなんだ……。あれ？

　阿九斗は周囲がざわついているのに気づいて顔をあげた。

その場の全員が阿九斗の顔を見ていた。

《彼は魔王になると診断された。間違いない。入学時に見落とされたようだが、今の診断ではそうなっている》

保健室の人工精霊『ヤタガラス』が声をあげている。

「ま、魔王……！」

「昨日の今日で生まれ変わった……？」

「いや、最初から魔王だったに違いない……」

「ああ、昨日まで友達だったけど、そういえば残忍なところがあったような……！」

——ちょ、ちょっと待て！

がたり、と椅子を鳴らして阿九斗は立ち上がった。

以前と変わらぬ様子で阿九斗を見ているのはけーなくらいのものだ。事情を知っている絢子もどういうわけか今にも阿九斗に斬りかからんばかりの顔をして叫ぶ。

「き、貴様！　何度私を裏切るつもりだ！　魔王でなければ私と契りをかわしても良いと言おうと思っていたのに！」

興奮のあまり絢子はまたも素直な心情を吐露してしまっている。

当然ながら周囲はさらにざわめいた。

「なんてこった！　カタブツの委員長が弄ばれていた！」

「さすが魔王だ！　なんて最悪な奴なんだ！」
　――う、うわ、そうじゃ……そうじゃない！
「い、いや……待ってくれ、みんな！」
　阿九斗は声を張り上げた。
「つまり、魔王というのは、この場合、体制の破壊者（はかいしゃ）のことだったわけだ。神殺しの異名であると言ってもいい。それがはっきりした今、個人が魔王であるということは何の意味もなさない。そうじゃないか？」
　阿九斗の声は明瞭（めいりょう）で、言葉もよどみなかった。そのため周囲はその言葉に聞き入っていたが、何より聞き取りやすかったため、その論旨（ろんし）についても完全に聞き取られていた。クラスメイトの一人が聞く。
「すると、それはそれとして神の判断そのものには異論があるってことだよな？」
「ちょ……いや……そうじゃない。神はシステムにすぎず、それが恣意的（しいてき）に利用されることはあり得る。それでも僕はシステムを運用することは未来のために必要だと思っている。システムを運用する人間を段階的に減らし、流動的にすることは支持せざるを得ないけれども」
　阿九斗は慌てて取（と）り繕（つくろ）った。が……。
「それって、黒魔術師（まじゅつし）の論理だよね……」
「個人が魔王であることは意味がない……そういうことか。魔王が死んだ今、集団でのテロリズムに移行するという意味合いか」
　さすがに阿九斗も本格的に慌てはじめた。

「違う！　みんな魔王のことを知らないのに適当なことを言いすぎだ。そもそも魔王とは神々が神々自身を殺すためにマナを調整して生み出した人間のことだ。故に神に敵対するような行動を取らざるを得ないが、本質的にそれが悪のことや体制の破壊者のことを指しているわけではない！」



「言ってることが食い違いはじめたが……」
「そもそも魔王について詳しすぎないか？」
——しまった。公開されていない情報まで……。
「待ってくれ！　結局、僕が言いたいのは、神が幻想であることを死んだ魔王が教えてくれたということだ。つまり魔王そのものも幻想だった。現実を見てくれ！　神はシステムであり、それを告げている僕もここに実在している！」
　阿九斗は胸を張った。
　沈黙が流れた。しかし、その沈黙は阿九斗の言葉に感心してのものではなかった。
——あ、あれ？
　周囲を見回す。クラスメイトたちは完全に阿九斗に怯えていた。
「そうか……魔王は死んでいなかった、という宣言か……」
「昨日の魔王は幻……つまり、死んでいなかった！」
——ま、前にもこんなことになったような……。
　阿九斗は冷や汗を流す。
　と……。
「阿九斗ぉ！　貴様というやつはいつもいつも余計なことを！」

絢子がソハヤノツルギを抜きはなっていた。スハラ神の影響下にはないが、それでも凄まじい力を持つアイテムには違いない。絢子はその虹色（にじいろ）の輝（かがや）きを放つ刀で、峰打ちながらも阿九斗に斬りかかってきた。

「うわ！」

阿九斗はそれを腕で防いだ。腕にマナを集中させる。それは昨日まで容易な行為（こうい）のはずだった。

が……。

「ひ！」

「え……わ、わ、うわ！」

阿九斗の腕から漏（も）れだした力が制御（せいぎょ）できずに爆発となって拡（ひろ）がった。

○

――ち、違う……。これは、何か変だ……。

周囲の白い目が痛い。保健室を半壊させてしまい、もはや全校生徒が阿九斗のことを知っていた。なんとか授業に出てはいるが、保健医でもある担任の美津子（みつこ）先生の目すら保健室を半壊させた阿九斗には冷たい。

「えー、我（わ）がクラスから魔王が出てしまい、混乱しているとは思いますが、まだ悪さをしていないんだからクラスに置いておくという判断になりました……」

美津子先生がぼやくように言う。
「そこで魔王の監視員としてやってきたリラダンです。ころねとお呼びください。以前からクラスにいたような気もしますが、気のせいです」
教壇の脇に立っていた制服姿のころねが言った。
阿九斗はもはや何を言うのも面倒くさくなってしまって机に突っ伏す。
すると、美津子先生がこう続けた。
「ええと、お友達が増えて混乱しているところ申し訳ないんだけど、もう一人、転校生を紹介します。海外からの特待生です。仲良くしてくださいね……。それじゃ、ケーナちゃん、入って」
――ただでさえ混乱しているのに転校生か。僕のことをあまり怖がらない人だといいけど……。え？
けーな？
阿九斗は顔をあげた。
入ってきたのは、無邪気な笑顔が可愛らしい金髪の少女だった。
阿九斗の目は彼女に釘付けになった。
その顔立ちのせいではない。その髪に、あの鳥の意匠の髪飾りが輝いていたからだ。
――あ、あれは、僕が孤児院を出るときにけーなにあげた……。
つい立ち上がってしまった阿九斗に、少女は目を留めた。

「あ、アナタは！」
　そして、彼女は教壇の横から一番後ろの席の阿九斗のところまで一気に走ってきて、その首根っこに飛びついた。
「孤児院でのヤクソク覚えていますカ？　アタシ、ケーナです！　会いたかった！」
　片言の言葉でケーナと名乗る彼女は言った。
――え？　けーなが二人？
阿九斗は思わず赤毛のけーなの方を見た。彼女もちゃんと彼女の席にいて、驚いた顔で阿九斗とケーナを見ていた。
「ああ、もう離さない、マイダーリン！」
　ケーナは言った。

あとがき

毎度ありがとうございます。水城正太郎(みずきしょうたろう)です。そういえば最近、趣味(しゅみ)の釣(つ)りでは外道(げどう)ばかりが釣れています。アナハゼとかネンブツダイとか。小魚をいじめては海に返す作業(さぎょう)。将来は竜宮城(りゅうぐうじょう)には行けないことが確定(かくてい)です。いや、行かない方がいいのか、あそこは。

五巻目をお送りします。前後編の後編となっております。四巻をお持ちでない方は買って頂(いただ)けると嬉(うれ)しいです。今回を読んでから四巻を読むと、ちょいとしたネタバレを受けてから読む感じになってしまいますのでご注意を。表紙を見て思わず手に取ってくださったなら、すぐに四巻を探してくださいませ。案外、隣(となり)にあるかもしれません。

今回は珍(めずら)しく内容の話から。

文中、ちと長めの望一郎(ぼういちろう)の台詞(せりふ)、意味がわからんと感じられた方も多いかと思いますが、「こんなわけのわからんこと言ってる奴は女にモテない」と受け取って頂ければよろしいかと。その台詞を書いている当人がモテるかどうかは聞いてはいけません。

さて、今回、一応の決着がついております。が、未読の方のために詳細を書くのは控えるものの……そうです、まだまだ続きます。あんなこととか、あんなこととか、まだまだ決着のついていないこともありますし、これからもいろいろやっていこうと思っておりますよ。そんなわけで、早速、次回はコメディ分を増量でお届け。学園モノとしての本領を発揮したく思います。当然、今回のラストからの続きです。

続いて他メディアでの展開のご紹介。

CDドラマ、株式会社ビートニクス様より二〇〇九年二月二十五日に発売しております。阿九斗に小野大輔さん、けーなに中原麻衣さん、絢子に白石涼子さん、ころねに茅原実里さん、不二子に牧島有希さん、と豪華キャストです。一巻のストーリーにアレンジが加わったドラマと、中原麻衣さんの歌が収録されております。これだけでもお得ですが、なんと、CDのジャケット裏には伊藤宗一さんの描き下ろしイラストが隠されております。買った人だけが見ることができるこのイラスト。そりゃあもう「すごい」です。いや、なんというか、拡大してシーツにプリントするべきというか。はっきり言えば「えろい」わけですが、それでいて「なぜジャケット裏にこのイラストが？」という悪ふざけまでもが行われているという素晴らしさです。必見ですよ。

もちろん、伊藤さんの秋田書店様『チャンピオンRED』誌でのコミックは好評連載中です。そちらも是非。

ともあれ、雑談。この間、担当さんと食事をしていたら、横で大きな声でエロゲーの話をしている人たちが。「食事中にエロゲーの話とはなんだ！　しかも未完成で発売してしまったゲームの話とは！」と憤慨し、注意しようか、と迷ったその一瞬後に気付きました。自分たちが食事をしていたのは秋葉原だと。もちろん注意などしませんでした。最近はすっかりメイドが歩いていても気にならない街になりましたね。

そして謝辞を。

イラストの伊藤宗一さん。コミケに行ったのですが、すでに帰られた後でお会いできませんでした。今度はご挨拶できるようにしたいです……と、思ったら、コミケでけーなのレイヤーさんと撮影された写真が『キャラの！』に！　そうです、おいらは企業ブースにおられたレイヤーさんにもお会いできませんでした。

担当のO橋さん。今回は早めの〆切設定が生きて、普通より少し遅れた程度の提出まで進化しました！　いや、実は執筆にかかる時間は同じだったような気もしますが。次回もまたよろしくお願いいたします。

そしてドラマCDをはじめ関係者の皆様にも感謝を。本当にお世話になっております。

さて、そんなで次回は六巻。上での予告通り学校行事など書いていきましょう。まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151―0053
東京都渋谷区代々木2―15―8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
水城正太郎先生／伊藤宗一先生

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
なぜか階段で足首をひねって転ぶという行為を二回連続でしてしまいました。ご丁寧に右足首、左足首、と両方です。明らかに足の筋力が衰えていたせいですが、認めるのは悔しいので、幽霊に足首をつかまれたと言いふらします。これは呪いだよ！

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
<一言>
ドラマCD「いちばんうしろの大魔王 VOL.1」の収録に行って来ました。
すごく良い出来なので、今から製品版を楽しみにしてます！
書き下ろし裏ジャケの、けーなぱんつは頑張りました。
お楽しみに！

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT 5

2009年3月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8